

表紙の写真は、市民大学開講式（5/12開催）の様子

目 次

| | |
|---------------------------|---|
| 総合コースとは | 2 |
| 5 コース開設概要 | 3 |
| 令和5年度総合コース企画委員会について | 4 |
| 令和5年度総合コース企画委員を終えて | 5 |
| 運営委員会より | 7 |

各コースの学習記録

| | |
|--|----|
| 【経済】 課題先行の日本経済 ～日本は何ができるか～ | 11 |
| 【哲学】 ゆっくり生きよう ～暮らしの中の哲学・宗教～ | 27 |
| 【歴史】 日本の近現代の戦争を学び直し、平和を守るとは何かを考える | 43 |
| 【環境】 身近なくらしから環境問題を考えよう！ ～気候変動・エネルギー・衣食住～ | 59 |
| 【政治】 転換期に直面する世界と日本 ～現在地点から今後を探る～ | 75 |

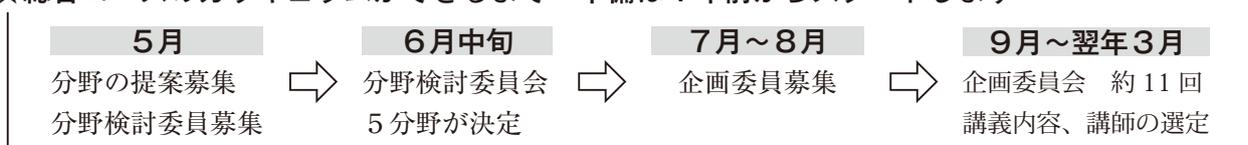
総合コースとは

総合コースとは

三鷹市の市民大学総合コースは、開設以来今年で56年目を迎えました。当初から「学習の主体は市民にある」という命題を掲げ、コースの企画段階から運営に至るまで、市民自らが主体となって行う講座です。

平成28年度までは、三鷹市社会教育会館を会場に開催（開設当初4年は市民会館で開催）してきましたが、社会教育会館の閉館に伴い、29年度からは会場を三鷹市生涯学習センター（29年4月オープン）に移し、運営や事業理念を市から公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団に引き継ぎ実施しています。

★総合コースのカリキュラムができるまで～準備は1年前からスタートします



1 総合コースの企画と運営

(1) 分野検討委員会の開催

広く市民から学びたい分野・学習テーマを募り、公募の委員が意見を集約・分類します。2日間にわたって議論を重ね、次年度に開設する5つの分野を決定します。

(2) 企画委員会の設置

公募による委員と担当職員とで企画委員会を設け、半年以上かけて、広く市民の学習要望をもとに、講義内容やそれにふさわしい講師を検討し、カリキュラムを作成します。

(3) 運営委員会の設置

各コースの学習生から選出された委員と担当職員とで運営委員会を設け、学習生の意見や要望をコース間で共有し、一人一人が主体的に学習できる環境づくりを行います。

2 学習方法

各コースとも、講座回数30回のうち20回はゼミナール形式の講義、10回を自主学習の時間としています。年間を通じて、講義・発表・討論などを積み重ね、学習課題についての問題解決や知識の習得を目指します。自主学習では、講義を契機として各人が互いに意見を交わしたり、交流を深めたり、運営について話し合ったりするなどして、自主的に学習を進めていきます。

3 学習の記録『あゆみ』の作成

総合コース『あゆみ』とは、総合コース1年間の学習記録です。

毎年、各コースの学習生が終了時に学習の記録や感想を執筆し発行しています。

4 学習成果の発表

学習成果の発表として、12月に開催される『生涯学習センターフェスティバル』に参加しています。経済、歴史、環境、政治の4コースが展示や来場者への説明、アンケートを行ったほか、プロジェクターで映像を投射したコースもありました。哲学コースは自主グループと合同で展示を行ったほか、哲学対話の体験会を開催しました。

更に、3月8日（金）から23日（土）までの期間、模造紙展示を元気創造プラザ1階休憩コーナー前の廊下で行いました。

5 コース開設概要

総合コースは、市民の皆さん主体で企画・運営する講座です。地域や生活に根ざした課題について、ゼミナール形式の継続学習・研究・発表・討論を積み重ね、市民としての自治能力を高めています。そして、学習成果を地域や生活の場に活かし、まちづくりに結び付けていくことを目指しています。

今年度は、次の5つのコースを設け、3コースは金曜日に、2コースは土曜日に1年間にわたって行いました。

会 場 三鷹市生涯学習センター（元気創造プラザ4階）

開設時間 午前10時～正午

| 【分野】 コース | 要 旨 |
|--|---|
| <p>【経済】 課題先行の日本経済 ～日本は何ができるか～</p> <p>5月12日～3月8日 (金曜日 全30回)</p> | <p>米中2極対立、企業活動のグローバル化、DX、GXといった世界経済の動向を踏まえ、「新しい資本主義」を主体とする政府の経済対策を検証しましょう。また、資源・食料・半導体の低自給率などの経済安全保障課題、収入・資産格差の拡大、人口減少と産業構造の転換遅れによる長期的な国力低下といった、私たちの生活にも直結する日本経済の諸課題への処方箋について、ともに考えましょう。</p> <p>茨木 秀行 さん（亜細亜大学経済学部教授） ほか</p> |
| <p>【哲学】 ゆっくり生きよう ～暮らしの中の哲学・宗教～</p> <p>5月12日～3月8日 (金曜日 全30回)</p> | <p>ときどき、「生きている意味って何だろう」そんなことが頭をよぎります。そんな時、哲学は心にそっと寄り添ってくれます。私たちの生活の中にある生きることに関わる哲学・宗教的なテーマ(生命科学と倫理、グリーンケアと死生観、宗教とスピリチュアリティ、幸福)に触れることで、自分の人生をもう一度、ゆっくり見つめてみませんか。</p> <p>一緒に暮らしの中で哲学してみましょ。</p> <p>島蘭 進 さん（東京大学名誉教授） ほか</p> |
| <p>【歴史】 日本の近現代の戦争を 学び直し、平和を守るとは 何かを考える</p> <p>5月12日～3月8日 (金曜日 全30回)</p> | <p>21世紀はアジアの時代と言われています。しかし、プーチンが仕掛けたウクライナ戦争により様相は一変しました。さらに、経済・軍事大国化した中国と専制国家の弱体化を狙う米国との対立は、台湾併合の問題でアジアの戦場化リスクを高めることになっています。日本が関わってきた近現代の戦争について学び直し、日本の今後の外交・安全保障・教育の問題を自分事として一緒に考えてみませんか。</p> <p>山田 朗 さん（明治大学文学部教授） ほか</p> |
| <p>【環境】 身近なくらしから 環境問題を考えよう！ ～気候変動・エネルギー・衣食住～</p> <p>5月13日～3月9日 (土曜日 全30回)</p> | <p>近年の異常気象に不安を感じているものの、何をすべきか分からない、環境問題は「難しい」「我慢」「面倒」といった考えを持っていませんか？本コースでは、毎日の暮らしが世界の問題と繋がっていることに気づき、「地球」の限られた資源を循環させるために市民一人ひとりが継続的に取り組める行動を学びます。</p> <p>福士 謙介 さん（東京大学未来ビジョン研究センター教授） ほか</p> |
| <p>【政治】 転換期に直面する 世界と日本 ～現在地点から今後を探る～</p> <p>5月13日～3月9日 (土曜日 全30回)</p> | <p>世界も日本も社会がおかしくなっていると思いませんか？ロシアのウクライナ侵攻は物価高や平和への不安をもたらし、日本では30年間経済は成長せず賃金も上がらず、格差が広がっています。</p> <p>民主主義国家は分断が拡大し専制国家との対立が先鋭化している中で、日本では突然専守防衛から反撃能力保持と、安保政策が転換し、防衛費増強が議論もなく閣議決定されました。</p> <p>これからどうなる？今の私達の生活に直結する政治を学びませんか。</p> <p>五野井 郁夫 さん（高千穂大学経営学部教授） ほか</p> |

※夏・冬休みは除く

令和5年度総合コース企画委員会について

企画委員会では、公募による市民の委員と担当職員が一堂に会し、毎年、次年度の開設コースのテーマ、学習内容、講師などについて協議し、決定しています。

令和5年度は令和4年9月から令和5年3月までの約7か月間、計11回（うち全体会は5回）の会議を行いました。

令和5年度企画委員会の開催日、主要課題

| 全体回 | 月 日 | 主要課題・内容 |
|-----|--------------|--|
| 1 | 9/15 (木) | <ul style="list-style-type: none"> ○企画委員自己紹介 ○総合コース概要及び分野選定経緯の説明 ○企画委員会の概要と日程 ○司会・書記について ○開催曜日の検討、決定 ○全体キャッチフレーズの検討、決定 |
| 分科会 | | ○主軸となる学習内容の検討 |
| 2 | 10/6 (木) | <ul style="list-style-type: none"> ○コースの趣旨、年間30回の大まかな流れを検討 ○メイン講師、ゲスト講師の検討 ○市民大学公開講座の開催有無、開催方法についての検討 |
| 分科会 | | ○メイン講師、ゲスト講師の検討 |
| 分科会 | | ○メイン講師、ゲスト講師の検討 |
| 分科会 | | <ul style="list-style-type: none"> ○メイン講師の決定 ○メイン講師との打合せ日程調整 |
| 3 | 12/15 (木) | <ul style="list-style-type: none"> ○カリキュラム、ゲスト講師の検討 ○コースタイトル、サブタイトルの決定 ○総合コースPRポスター及びチラシの作成者選出 ○講座開設趣旨180字(募集チラシ用・広報誌用)の作成 ○市民大学公開講座の講師選定方法の提案についての検討 |
| 分科会 | | ○メイン講師、ゲスト講師の検討 |
| 4 | 2/2 (木) | <ul style="list-style-type: none"> ○ポスター、チラシ完成 ○市民大学公開講座の講師選定方法の検討 |
| 分科会 | | ○メイン講師、ゲスト講師の検討 |
| 5 | 3/2 (木) | <ul style="list-style-type: none"> ○ポスター、チラシの配布準備 ○総合コース開講式の打ち合わせ ○学習記録「あゆみ」企画委員会ページの執筆者の選定 ○反省会(企画委員会を振り返って) ○市民大学公開講座講師候補の決定 |

<時間・場所> 午前10時～正午 生涯学習センター ホール

令和5年度市民大学総合コース企画委員を終えて

「ゆっくり生きよう～暮らしの中の哲学・宗教～」

哲学コース 渡邊 伸廣

初めての企画委員の経験でした。

まずは、分野別検討委員会での分野の絞り込みが大変でした。「学問分野」と「テーマ」が重なり合う部分があり、どのように塊としてコースに落とし込むのかが議論になりました。個々人の物の見方も違うので正解のない答えを出す事が大変だったと記憶します。年々世の中も変わり、その時々に関心事や優先順位が変わって来ていると言う事もあります。

各コースに分かれての企画委員会は大変貴重な経験になりました。哲学コースはメンバーにも恵まれ、「暮らしの中で哲学する」事にこだわりつつ、内容の議論と講師選びを楽しみながら進める事ができました。「暮らしの中で哲学する」とは、現象学のフッサールに始まり、ハイデガーの「道具の有意味性ネットワーク」と言った世界観や、和辻哲郎の「風土論」などをベースに導かれた世界観ですが、それを毎日流れゆく「暮らし」の中でちょっと足を止め、少しずつ考える動機にして行きたいと考えていました。

今回は、島藺進先生と言う宗教学の大家をお迎えし、①グリーフケアと日本人の死生観、②現代生命科学と倫理、③現代世界の宗教と公共空間、の3つのテーマから「死生観」「倫理」「公共空間」をキーワードに宗教を哲学的に「暮らしの中で考え」たら何が見えて来るか？ 大変楽しみな内容になりそうです。

また、ゲスト講師も豊富な方々で、ワイトゲンシュタイン、西田幾多郎、戦争と平和、死生観についての哲学ワークショップ、哲学対話、恋愛哲学、バツハの世界と真理と様々な角度、様々な話題を取りあげて頂き「暮らしの中で」色々と考えていけそうな内容になりました。

お陰様で、毎週市民大学に通うのが楽しみなコースに企画できた事は、メンバーに恵まれた事と、事務局の熱心な先生へのアプローチによる所大です。皆様、ありがとうございました。

令和5年度市民大学総合コース企画委員を終えて

「転換期に直面する世界と日本～現在地点から今後を探る～」

政治コース 黒沢 園子

地球は46億歳 人生百年おおいに学びませんか

企画委員として参加するのは5回目です。引退をして新しい方が継続されることを期待したいです。現役で新人が2名、リタイア3名の5名で行いました。初参加の方に対して説明不足は否めません。報道された発言や著作と最近の論文新聞のオピニオン講演会の内容を参考資料とし講師を決めていきました。職員の方が候補講師と交渉して決定となります。日程調整など大変なことが満載で感謝感謝です。

分野検討委員会で市民が希望した学習テーマを公募市民と職員が分類しコースを決めます。企画委員はコース別にメイン講師とゲスト講師、サブ講師を決めていきます。55年も続けてこれたのはたえず意見を出し合い改善を重ね市民の希望が組み込まれているからだと思います。

スタート時を知っている方が別のコースに参加されておられました。10数年ぶりの参加で当時の事をお話しされておりました。現在参加されているメンバーは退職された男性が多数おられます。開講時には企業で大活躍をされていた方々です。当時の受講生は主婦層がほとんどで講師も一名で30回を受け持っておられました。携帯電話やパソコンも使われていなかった時です。

運営委員に参加したのは必ずしも知識が豊富にあるわけでもなく本を沢山読んでいる事ではありませんでした。経済を受講したいと思い3回抽選に外れてしまいました。知人が企画委員になれば受講資格が優先される事を教えてくれました。経済の企画委員となりましたが委員の方が挙げられた候補講師は日本でも一流の経済学者ばかりでした。本も紹介して下さったのですが、難しい本ばかりでした。関心のある経済は全くの未知の世界でしたが知る事の喜びと楽しさは一言では言い表せません。NEWSを見る目も少し賢くなった様な気がします。

地球46億歳のなかで人間は100歳です。ほんのひと時地球にいただけです。歴史、環境、政治、経済の事など知らない事ばかりです。学びを深めたければ仲間と自主学習グループを立ち上げる事も可能です。皆様と一緒に学べたらと思い企画委員会に参加いたしました。

運営委員会より

1 令和5年度の学習生数

| | | |
|------|-------------|--------|
| 【経済】 | 女 12名・男 16名 | 計 28名 |
| 【哲学】 | 女 19名・男 9名 | 計 28名 |
| 【歴史】 | 女 14名・男 14名 | 計 28名 |
| 【環境】 | 女 16名・男 12名 | 計 28名 |
| 【政治】 | 女 15名・男 13名 | 計 28名 |
| 合計 | 女 76名・男 64名 | 計 140名 |

2 運営委員会

開催日 5/26 (金)、7/7 (金)、9/16 (土)、10/27 (金)、12/9 (土)、3/8 (金)
午後1時～2時

構成 各コース4～5名の運営委員と生涯学習センターの担当職員

3 運営委員会の取り組み

(1) 運営委員会ニュースの発行 NO.1～NO.6

毎月の運営委員会での話し合いの結果を翌週の学習日に配布
運営委員会の内容をすべての学習生が把握し、主体的に運営に関わることを目的としています。

(2) 市民大学公開講座【10月13日(金)・14日(土)開催】

○10月13日(金) 対面形式での開催 計113名(学習生93名/一般20名)

『現代日本の教育と政治』

講師 前川喜平さん(現代教育行政研究会代表)

○10月14日(土) 対面形式での開催 計76名(学習生68名/一般8名)

『アジアにおける平和と共生』

講師 羽場久美子さん(青山学院大学名誉教授)

市民大学公開講座は、総合コース学習生が一堂に会して学習する場を設けることで、相互の交流を深める目的で開催しています。企画委員会で講演内容・講師候補を検討、選定した上で事務局が講師へ出講依頼をしています。

(3) 三鷹市生涯学習センター利用者懇談会への委員選出

運営委員会が推薦した2名の委員が生涯学習センター利用者懇談会※に参加し、総合コースを代表して、今後の事業のあり方や施設の運営などについて意見や要望を伝えました。

※生涯学習センターのより良い運営のために、市長が利用者の意見を聞く場として設置

(4) 「あゆみ」の発行

各コースから編集委員を2名選出し、1年間の学習の記録として、「あゆみ」を発行しました。令和5年度は編集会議を1月19日(金)に開催し、原稿のとりまとめ、各コースページの作成や4月に2回の校正作業を行いました。

総合コースを振り返って(令和5年度 運営委員会より)

【各コースの感想】

<経済>

どの講師も熱意をもって講義していただき、レベルの高い講義でも興味深く勉強できた。アンケートでの学習生の満足度はかなり高かった。

<哲学>

哲学だけでなく他の分野の学問と絡んだ講義。先生の人柄もよく、収穫のある学びだった。

<歴史>

講義の満足度はかなり高く、特にメイン講師の評判は特別なものだった。最後まで出席率は高かった。

<環境>

講師陣の評判は良く、充実した内容だった。仲間意識が強くなりこのまま終わるのはもったいないと思った。今後何らかの繋がりがあることを期待したい。

<政治>

新鮮な講義内容だったが難しかったようだ。人気のあるメイン講師を目的に応募した人が多かった。多面的な講師を招くことができた。

【自主学習について】

<経済>

三鷹光器株式会社の会社見学や、東洋大学講師派遣を利用できたことはとても良かった。学習生間の意見交換の機会が少ないという意見もあった。

<哲学>

講義に関連するビデオを視聴したり、講義の振り返りや哲学対話を行うなど充実していた。

<歴史>

山田朗先生に明治大学平和教育登戸研究所資料館をご案内いただいた。市内在住の方から戦争体験をお聞かせいただいた。講義の振り返りやビデオを視聴し意見交換を行うなど出席率も高かった。

<環境>

学習生の中で様々な分野で活動している方のお話を聞くことができ充実していた。

<政治>

市民大学に初めて参加したが自主学習の時間が良かった。

【公開講座について】

- ・方式やPRは現状で問題はないと思われる。
- ・金曜日の公開講座は、外部の募集人数が少なく、初日で募集が締め切られた。人数制限のないオンライン方式を取り入れたらどうだろうか。

【生涯学習センターフェスティバルについて】

- ・経済、歴史、環境、政治コースは模造紙を使用し、展示方式で学習成果を発表。環境と歴史コースは動画も放映した。会場は1階の体育室を利用し、昨年の学習室よりスペースを広く利用できた。
- ・哲学コースは自主グループ2団体と協働で独自のブースで参加、普段の講義の様子を紹介する映像も作

成し、来場者と哲学対話を行った。

・グループでの作業は、学習生の仲間意識を高めるのに効果があった。大変な作業ではあったが、満足感を得ることができた。

【その他】

・足の不自由な学習生もあり、バス停から遠い。何らかの対応はできないだろうか。

・総合コースは年間を通しての30回の講義であるが、15回の半期のコースも設置したい。若い世代を対象に、夜間コースの設置も必要ではないだろうか。

・総合コースを受講することで、信頼できる仲間が増えた。そのため地域活動にも役に立つ。終わることなく、長く継続してほしい。

課題先行の日本経済

～日本は何ができるか～

講師：茨木 秀行
(亜細亜大学経済学部教授)



日本経済の課題と向き合う

講師 茨木 秀行

三鷹市民大学総合コース「経済」にご参加頂いた皆様には、この1年間、熱心に講義にご参加頂き、心より感謝申し上げます。ご参加頂いたメンバーには、講師を務める私よりも豊富な人生経験をお持ちの諸先輩方も多く、皆様から大変貴重なご指摘やご示唆を頂いたことは、私にとっても良き財産となりました。

私の担当した講義では、日本経済の抱える様々な課題について、なるべく広い範囲をカバーしつつ、最新のデータに基づく客観的な資料・解説を提供することを心がけました。世界的なインフレや財政・金融政策といったマクロ経済政策の課題、少子高齢化の進展や財政・社会保障制度の持続可能性の問題、日本経済のグローバル化に伴う課題、デジタル化や脱炭素化の実現に向けた課題など、いずれも日本経済にとって対応しなければならない重要課題ばかりです。これらの課題は、いずれもスケールが大き過ぎて、日常的に考える機会は少ないと思いますが、私の講義が皆様の関心を多少なりとも高めるきっかけになったのであれば幸いです。

1990年代のバブル崩壊以降、日本経済は低迷を続け、物価や賃金が上がらないデフレの状態にも陥りました。この間に、世界第2位だった日本のGDPの順位は、中国に抜かれ、ドイツにも抜かれ、とうとう4位に低下してしまいました。こうした経済の低迷に対し、政府の経済政策は、金融緩和や大型補正予算の策定など、どちらかといえば需要喚起策に頼ってきましたが、経済成長率は上向きませんでした。それはなぜかと言えば、現在の日本経済が直面している問題は、単に政府がお金を出せば片が付くといった単純な問題ではなく、グローバルな環境変化、デジタル化・脱炭素化など急速な技術革新、少子高齢化の進展といった、複雑な要因が絡み合い、利害関係者の調整が大変難しい課題であるからだと思います。例を挙げれば、貿易・環境・安全保障問題などにおける西側諸国とグローバルサウスの深刻な対立、デジタル化に伴う労働の二極化の進展、脱炭素化に向けた経済活動と環境負荷のトレードオフ、少子高齢化に伴う若年世代と高齢世代の受益・負担の調整など、必ずしも正解が一つとは限らない問題がたくさんあります。こうした問題に正面から向き合い、どこかで妥協点を見つけていく忍耐強い作業が日本には必要です。今回の講義を通じて、参加された皆様がそれぞれ日本経済の課題に向き合うお手伝いのできたのであれば、大変嬉しく思います。

プロフィール



東京大学経済学部卒業、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)経済学修士。1990年に旧経済企画庁(現内閣府)に入庁し、経済財政白書の執筆や政府経済見通しの作成などを担当したほか、OECDでエコノミストを務める。2022年4月より現職。

著書

『世界経済危機下の経済政策』(単著)(東洋経済新報社、2013年)

『日本経済読本第22版』(共著)(東洋経済新報社、2021年)

『マイナス金利下における金融・不動産市場の読み方』(共著)(東洋経済新報社、2017年)

経済記事

「財政政策の効果と異次元緩和」金融財政ビジネス2023年1月23日号(時事通信社)

「危機からの出口に何が必要か」2022年10月26日付日本経済新聞経済教室

「世界的なインフレ加速と物価変動メカニズムの変化」金融財政ビジネス2022年8月8日号(時事通信社)

いばらぎ ひでゆき
茨木 秀行さん

講座風景



自主学习



見学（三鷹光器株式会社）



●カリキュラム

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|------|---|---------------------|-----------------------------------|
| 学習内容 | | | |
| 1 | 5月12日 | 開講式・オリエンテーション | 自主学習 |
| | 企画委員の紹介、コース概要説明、学習生の自己紹介、運営委員の選出、講座の運営説明。 | | |
| 2 | 5月19日 | 戦後日本の経済成長と現状 | 亜細亜大学経済学部教授 茨木秀行さん |
| | 日本のGDPは2位から3位に、GDP/人は2位から23位と低下。経済成長のメカニズムは労働力+資本→生産性向上+技術革新→産出GDP。経済成長に向けた課題は、DX、GX、少子高齢化、制度疲労。企業、労働市場の改革が必要。 | | |
| 3 | 5月26日 | 課題先進国日本 | 茨木秀行さん |
| | 日本経済の構造的課題は、人口減少(少子高齢化)、社会保障(年金、医療、介護の持続)、財政・金融(政府財務)、環境・エネルギー(脱炭素化)、対外問題(西側と中口の分断、経済安全保障)。 | | |
| 4 | 6月2日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 4グループに分かれて2回の講義内容の共有、感想、発表。フェスティバルの紹介、参加の確認。自主学習への要望、提案。 | | |
| 5 | 6月9日 | デジタル資本主義 | 株式会社野村総合研究所 グローバル産業・経営研究室室長 森 健さん |
| | 世界のデジタル化(ドローン、自動運転、3D、AI等)紹介。デジタル化による消費者余剰が加味されておらず、GDPとリンクしない。増加蓄積(如何に価値を増やせるか)へシフトし、価値創出と価値獲得の進化が望まれる。 | | |
| 6 | 6月16日 | 米中対立下の中国経済 | 専修大学経済学部教授 大橋英夫さん |
| | 中国は改革開放の45年で産業構造の転換、対外貿易・加工貿易拡大でGDP世界2位の経済大国となった。今後はイノベーション主導型成長を目指す。習近平「新時代」で2035年長期目標綱要、双循環戦略(国内と国際)を発表。 | | |
| 7 | 6月23日 | 日本の労働生産性の課題 | 第一生命経済研究所 首席エコノミスト 熊野英生さん |
| | 労働生産性の向上には、①作業効率化のための、得意分野への特化、アウトソーシング、②新規需要獲得(新しい価値)のための、グローバル・ニッチ・トップ戦略(アルコール飲料、農業)などの手段がある。キャリア形成、人的ネットワーク、労働移動、テクノロジー、脱大企業体質の提案あり。 | | |
| 8 | 6月30日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 1学期の講義の感想、意見交換。フェスティバルの方法提案。自主学習の提案。 | | |
| 9 | 7月7日 | 世界的インフレと日本の経済政策の課題 | 茨木秀行さん |
| | 企業や家計が物価を気にせず経済活動をするために物価安定が重要で、ゼロインフレが物価・賃金の相場感として定着した。金利操作、量的緩和、マイナス金利、予想への働きかけ(2%)等の金融政策が取られている。 | | |
| 10 | 7月14日 | 経済安全保障は私たちにどう関わるのか? | 明星大学経営学部教授 細川昌彦さん |
| | 経済と安全保障が接近し重なりが大きくなっている。米中対立、先端技術を含む経済の武器化が背景にある。中国に軍民融合、自強自立の大方針があり、脅威の認知が必要。企業経営は経済安保のリスク対応が必要。 | | |
| 11 | 9月15日 | 経済政策は要らない | 慶應義塾大学経営管理研究科教授 小幡 績さん |
| | 経済は健全な社会実現のための手段。重要なのは若年失業の阻止。景気対策は経済成長を損なう、賃金と物価の好循環はない、経済活動があればインフレ率が低くても良い、円安は罪。思考力、判断力、知的好奇心こそ必要。 | | |
| 12 | 9月22日 | 最近の為替・国際収支動向とその背景 | 昭和女子大学客員教授・東京大学名誉教授 荒巻健二さん |
| | 急速な円安は日米の金利差と強く連動している。日本は貿易立国というより対外投資からの収益で黒字を出す投資立国。産業の国際競争力の低下に原因があるのか。 | | |
| 13 | 9月29日 | 経済のグローバル化とその課題 | 茨木秀行さん |
| | 資本、人、サービス、知識、文化等が国境を越えて移動し各国経済が結びついた。通貨体制・自由貿易体制の確立、EPAが広がった。米中の貿易摩擦等グローバル化が変質。日本はFTA、EPAを締結しサプライチェーン運営、経済安全保障に取組み、国際的に果たす役割が重要。 | | |
| 14 | 10月6日 | 脱炭素化に向けた日本の課題 | 茨木秀行さん |
| | 地球温暖化対策に世界が取組んでいる。脱炭素化に向けて電化、水素化、再生エネルギー(洋上風力、太陽光、地熱)、原子力の利用が重要。政策として排出権取引、エネルギー課税、再エネ電力買取、GX基本方針がある。 | | |
| 15 | 10月13日 | 【公開講座】現代日本の教育と政治 | 現代教育行政研究会代表 前川喜平さん |
| | 10月14日 | 【公開講座】アジアにおける平和と共生 | 青山学院大学名誉教授 羽場久美子さん |

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|------|---|---|---|
| 学習内容 | | | |
| 16 | 10月20日 | 人口減少と日本経済—イノベーションの役割— | 東京大学名誉教授 吉川 洋さん |
| | 日本経済の地位低下は人口の問題ではない。少子化で労働力不足、高齢化による社会保障費増大の課題はあるが、労働生産性を上げるために資本蓄積とイノベーションが必要。低成長を乗り切る鍵はプロダクトイノベーション。 | | |
| 17 | 10月27日 | 21世紀の資本と21世紀の労働の関係を考える～新しい資本主義論はバカらしい資本主義論【オンライン】 | 同志社大学名誉教授 浜 矩子さん |
| | 現政権の新しい資本主義、人本主義の問題点を指摘。ライン型資本主義(社会主義的市場経済)の再考を提案。 | | |
| 18 | 11月10日 | 脱炭素と経済—世界の視点から | 上智大学経済学部教授 蓬田守弘さん |
| | 世界の温室効果ガス排出の現状説明。日本の脱炭素化に向けて、排出枠取引制度等の強化、削減計画の実行、環境技術の強化、再生可能エネルギー比率の引上げ、技術革新、人材育成、設備投資の促進支援が必要。 | | |
| 19 | 11月17日 | 生涯学習センターフェスティバル準備① | 自主学習 |
| | 事前アンケートにより2テーマとメンバーを決定。展示物の発表ポスターの内容を討議。 | | |
| 20 | 11月24日 | 生涯学習センターフェスティバル準備② 開催日：12/ 2(土)・3(日) | 自主学習 |
| | 展示物のポスターを完成。フェスティバル当日の説明員、前日の展示物準備、最終日の片付け担当者を決定。 | | |
| 21 | 12月 8日 | デジタル化と日本型経済モデルの変容 | 茨木秀行さん |
| | 経済のデジタル化はプラットフォームビジネス、オンライン商取引、シェアリングエコノミー等がある。課題は生産性への影響、雇用への影響等で、日本の対応は遅れている。人材不足とジョブ型雇用の導入遅れがある。 | | |
| 22 | 12月15日 | 日本の経済の展望と変革課題(自主学習) | 東洋大学元教授 益田安良さん |
| | 日本経済の変革課題は、潜在成長率(生産性)の向上、産業構造改革。備えるべきは金利高騰、円安、イノベーション(グリーン)、マーケットの変化。日本の経済展望として、実質経済成長の予測、消費者物価上昇、経常収支黒字の再拡大が示された。 | | |
| 23 | 1月12日 | 財政の持続可能性 | 茨木秀行さん |
| | 財政の持続可能性とは公債残高GDP比率を安定化するために、年金、医療、福祉の社会保障費抑制のための制度設計、保険料負担の国民のコンセンサス、財政再建ルールの採用が必須。 | | |
| 24 | 1月19日 | 「欲望の資本主義」から見える光景 欲望と転倒の「経済」思想史 | NHKエンタープライズ エグゼクティブ・プロデューサー/東京藝術大学客員教授 丸山俊一さん |
| | 富を生むルールの変遷(欲望の経済史)は、利子→重商主義→産業革命(蒸気機関)→株式市場(大衆)→金融資本主義(デジタル技術)。主体、理性、尊厳、公共、社会、個人の近代の概念の揺れである。 | | |
| 25 | 1月26日 | 三鷹光器株式会社見学(自主学習) | 自主学習 |
| | 三鷹光器を訪問し、観測機器(宇宙開発)、天体望遠鏡、医療機器、風力発電等の技術開発の説明を受けた。医療機器工場、風力発電の設備を見学。 | | |
| 26 | 2月 2日 | 公共経済と政府の役割 | 立正大学経済学研究科教授 村田啓子さん |
| | 政府の役割は公共財の提供。日本の課題は財政赤字、金融政策、少子高齢化。赤字の原因は社会保障(年金、医療、介護)の給付と負担のアンバランス。社会保障と税の一体改革の推進が重要で、自らの力で制度を改革。 | | |
| 27 | 2月 9日 | 物価について —金融経済と実体経済— | 杏林大学総合政策学部特任教授 大川昌利さん |
| | 金融経済と実体経済はフィッシャーの交換式MV=PTで言われているが、蚊柱のたとえがより実態を示している。一般的にはCPI(消費者物価指数)の統計が使われる。物価対策の金融政策は金利、貨幣量、期待から今後はサービス価格、賃金上昇、相場感の変化、日銀の物価見通しの変化がひとつの焦点。 | | |
| 28 | 2月16日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | フェスティバル展示物の説明、議論。茨木先生の講義への質問について4班に分かれて討議。 | | |
| 29 | 3月 1日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 学習生の1年間の受講の感想、提案等。 | | |
| 30 | 3月 8日 | 質問事項に関する討議 | 茨木秀行さん |
| | 日本の資本主義の課題は、資金投資家(機関投資家・外国人投資家)→利益主義→賃金抑制→消費抑制、少子化→財政赤字→年金不安→消費抑制と、デジタル化の乗り遅れによるイノベーションの遅れと考えられる。高齢者や女性も支える側(労働)へ回る全員参加の資本主義とオープンイノベーションが改善方策になる。 | | |

先生は話された。物価が上がっている、それに押されて賃金も上ってくる。今企業は企業成績も上むいている。しかし私達高齢者は賃金上がるほど年金は上がらないだろう。高齢者は我慢してください。いい時もあったのではと話される。私は早速年金、その他の収入、支出を見直をしました。その時物価が上がっても、今までの生活を落したくない。今まで生きてきて、後何年生きていけるのか分かりません。指揮者の小澤征爾も亡くなったとニュースで流れる。収入が増えなくても、食べる事の大好きな私は、支出をもう一度見直し、ゆずれない点はゆずらず、これからの生活を過していきたいです。

楽しく、これが先生の講義で感じた事です。

2月の電気料は800円安くなりました。デパートのポイントで、カツの昼食をたべました。

日本経済再生の処方箋

長期低迷する日本経済を再生するための対策について、最近はやりの生成 AI に質問したところ、回答は次のようなものであった。

- ① 出生率の向上、移民政策の積極的な活用などの人口減少対策
- ② 健康寿命の延伸、高齢者の社会参加の促進などの高齢化社会への対応
- ③ 研究開発投資の増加、スタートアップ企業への支援強化、STEM（科学、技術、工学、数学）教育の推進
- ④ イノベーションを促す規制改革や、FTA、EPA を通じた海外市場へのアクセス改善による国際競争力の強化
- ⑤ 競争力のある事業への投資など資源配分の最適化、M&A による新事業獲得など企業や事業の再編
- ⑥ 地方独自の産業の育成や観光資源の活用、移住の促進策などにより地方経済を活性化

これまでの講義でも聞いたような内容であり、特に目新しい特効薬といえるものはない。問題は、いかに必要となる予算を捻出し利害関係者と国民の理解を得て対策を実現するか、ということなのだろう。

私なりに考えた対策は以下の通り。

- ・ 高齢化・人口減少が急激に進む日本では国全体の GDP 減少は止めようがない。せめて一人当たりの GDP の増加を目指すべきである。
- ・ 経済格差を是正するため、収入や資産への累進課税を強化する。
- ・ 地球の環境や資源の持続可能性を考慮し、価格は高くとも高品質で長持ちし、修理、解体、リサイクルの容易な製品の普及を図る。
- ・ 遠くない将来に確実に起こる首都直下地震や南海トラフ地震の被害による日本経済の損失は莫大であるため、大都市圏の固定資産税を引き上げ、人口の地方への分散を促す。
- ・ 建設、運輸、商業等の多層下請け構造を解消する。また、介護、看護、保育、ゴミ処理等の人手不足の業種の賃金を引き上げるとともに、農林水産業の最低収入を保証する。

日本病の根治には、副作用を伴う強い治療薬の投与や、リスクの高い外科手術が必要である。さらに、国民が将来に希望を持つことが何より重要であると思う。

熱心にかつ丁寧に指導頂いた茨木先生及び講師の方々、運営された三鷹市、自身に示唆・刺激を与えて頂いた受講生の方々に感謝する。

以下一年間の受講後の雑感2点を述べる。

講義の活かし方

三鷹市民大学は講義の成果を「単なる学びに留まらず行動に生かす」ことも受講者に求めているようである。あれだけ立派な先生方のお話を無償でうかがえる機会に恵まれたこと大変有難く思っている。一方、第一線を退いた身である者としては、「経済に関する知見を深め、国の経済諸施策の是非をできれば自分の頭で判断できる社会の一員となること」が自分なりの成果の活かし方、であると考えている。

財政赤字問題

国の借金依存体質は改善されず、借金返済に追われ、今後金利上昇が待ち構え赤字が更に増すことが想定される厳しい状況にある。赤字解消には、消費税なら30%にアップ、経済成長なら実質経済成長率10%が必要といわれる。

日本が財政破綻する前に、国は従来からの「経済成長のあとに財政再建」との姿勢を改め、一刻も早く対策を講じるべきではないか。そのためには茨木先生ご提案の通り、適切な情報提供と超党派的な議論により、国民の理解を得ることが必要となる。政治は国民の声を反映した結果と考えるなら、我々も次世代に「つけ」を回さないため負担増を覚悟しなければならない。先生のご示唆通り、福祉に見合わない現状の負担レベルを改め、我が国が「中福祉中負担国家」となるのは避けられないことを理解すべきではないか。

先行きぼんやりの日本経済

昨年度が初受講の「環境と科学」講座に続き、今年度は「経済」講座を受講する機会に恵まれました。当初はもう1年、環境関連講座で更に知見を深めることも考えましたが、ここ数年、日常的に耳にする“日本経済の失われた30年”という言葉が妙に気になり、それならばここはひとつ目先を変えて…と、「経済」コースの受講を決めました。すると、これが大アタリッ！

メイン講師の茨木秀行先生は、現在の日本経済が抱える問題点や課題について多角的に講義して下さい、また、その穏やかな語り口で聞く側の理解もより深まります。一方、その他の講師についても、昨年度の企画委員諸氏のご努力により多方面から選りすぐりの方々を招聘下さり、最後まで大変興味深く受講させて頂きました。とりわけ、オンライン講義ながら浜矩子先生による現政権政党の政策を巡るお話には思わず溜飲が下がりました。

ここ最近、株価がバブル崩壊後の最高値を更新したと盛んに報道されていますが、我々一般消費者としてはいくら株価が上がるうとも、日常生活には何ら変化を感じることはありません。昨年辺りから大企業を中心として多少の賃上げ気風は見てきたものの、実質的に日本経済を支える多くの中小企業までには浸透せず、そのため国民の消費行動は停滞したまま。少子高齢化による労働力人口の不足、それに伴う労働生産性の低迷、国際的な円安ももはや定着しきっているかのような印象すらあります。このように山積する経済課題こそが、まさに株価上昇と消費者の生活意識とが噛み合わない理由であるやなしや。

今回、当講座に参加したことで、日々報道される経済ワードへの感度が一段と敏感になったと同時に、一有権者として課題解決に向けた政府政策の進捗を注視していきたいと思っています。

連日日経平均株価が最高値を更新し、給料も上がり傾向で先日もホンダ、イオンリテール等は労働組合の要求に満額回答したとある。好循環が始まっている様に市場では言われているが日本経済の将来に本当に必要な方向か考えてみた。

まず、講義では好循環とは「賃上げ→消費増→企業収益増→賃上げ」と、インフレには demand-pull と cost-push が有ることを習った。現状は「外部」の cost-push によるもので「物価高騰→賃上げ」だが「企業収益増」には結びつかず、長期の好循環にならないと思う。

日本経済を強靱にする為に何が重要かと考えた場合、P.Drucker が言うイノベーションと Entrepreneurship（事業精神）に伴う製造設備への投資である。賃上げを重んじて企業が投資を犠牲にしない事が肝心である。

GDP を単純に「 $GDP = C+I$ + 貿易差」と考えた場合、実質 C 及び貿易差はあまり変わりなく、政府の I も限界に近い。民間製造設備の投資に期待し、設備を最新にすることで日本の生産性も上げ人口減を補え、女性、高齢者も製造に参加出来る様になる。

設備への投資を導くには原価償却の耐用年数を短くし、減価償却を過ぎたものには課税してはどうか。中小企業には申請により免除すればよい。利益を内部留保している企業には積極的に設備及び研究に投資をさせる方策が必要だ。

ベンチャーキャピタル（VC）にも資金が集まる様にしなくてはならない。日本の VC ファンド規模を大きくする必要がある。貯蓄から投資ではないが野村系が 24 年より導入する非上場株投信の非上場分上限を 15% 以上にすれば良い。又、イノベーションには経営者を含め老若男女のリスクリングも必要だ。まだまだやらなければいけないことが沢山ある。

日本の経済課題を改めて考える

今年もレベルの高い、内容の濃い講義を受けることができ、とても満足しています。日本の置かれた状況が良く理解できましたし、色々考えさせられました。

日本の GDP が昨年ドイツに抜かれて世界第 4 位に後退しました。人口の影響を除いた一人当たりの GDP も 1988 年当時日本はスイスに続いて世界第 2 位でしたが、2022 年には 30 位に下がっています。GDP と幸福感はリンクしない、身の丈に合った経済で良く、これ以上の成長は必要ないという脱経済成長の話も良く聞きます。しかし、生活の満足感や仕事の達成感を得るには、やはりある程度収入は増えて欲しいと思いませんし、経済成長を望む方が私の気持ちに近いです。

失われた 30 年と言われるように、日本経済は長年低迷を続けています。日本の経済が直面する課題として人口減少・少子高齢化、年金・医療・介護の社会保障、国の債務増加等の財政・金融問題、脱炭素化に向けた環境・エネルギー、世界経済の分断リスク等の対外問題等を講義の中で学びました。低成長の主な要因として、労働力不足、生産性の低下、投資の低調、DX・GX への対応遅れが言われています。国や民間企業も色々な取り組みをしていますが、ここに挙げた課題が良い方向に向かっているという話は中々聞けず、むしろ更に悪化しているというニュースばかりのような気がします。それは何故なのか、何がまだ足りないのかと考えさせられます。しかし、課題があまりにも大き過ぎて、自分に何が出来るのか、何をすれば良いのか分かりません。背伸びをせず、まずは身近な所から出来ることをやってみようという意識を持つことから始めようと思います。経済は奥が深いということを改めて知らされました。

1年間の学習を通じて得られたもの、今後への期待

佐藤 剛史

今年度、初めて三鷹市民大学の講座を受講した。受講動機は現在就業中の企業において、社会・顧客業界における将来課題を洞察し、ITにて解決する企画・提案を行う業務に従事しており、本講座のタイトルである「課題先行の日本経済～日本は何ができるか～」に共感したことによる。平日は自社の業務があるものの、コロナ禍を経て自社ではリモートワーク・裁量労働が普及しており、時間の調整が可能になったことも大きい。

各々特色のある専門分野をお持ちの講師による授業は毎回異なった視座を提供してくれ、一つの事象をとっても複数の考察を行う機会となる、広く・深い学びを得られる良質なものであった。学生時代に経済学を専門とせず、日々新聞紙面も購読していない自分にとっては1年を通じて新たな知識を多く獲得でき、大変に満足できるものであった。

一方で受講者の企画による自主学習については、不足を感じる部分があった。受講者同士の意見交換、交流が目的とのことであったが、テーマが明確に決められておらず、各自が話したいことを話す場にとどまっておらず、建設的な時間となっていなかった。市民講座として開講されている以上、単なる個人レベルの学びから地域をより良くするための還元が必要ではないかと考える。例えば、講座タイトルにある「日本は何ができるか」にフォーカスし、講座で認識し理解を深めた日本の現在または今後の課題に対して、東京都／三鷹市／個人において何ができるのか？考え、意見を交わす、結果を市に提言する、といった活動ができればより有意義なものとなったのではないだろうか。

来年度も本講座が地域にとって有意義な施策となるよう、期待している。

経済を初めて学んで思うこと

H.S.

2023年5月にコロナはひと段落しましたが、コロナ禍約三年間で社会情勢は大きく進化しました。毎日の中で不安や焦り、緊張が募る中で、経済問題の方から、ひとりの人間としてどの様に生活していくのか？(生きていくことが大切か？)過去の経済成長のメカニズムや歴史を学びたいと思って受講しました。

日本経済の課題は、①人口問題、②社会保障問題、③財政・金融問題、④環境・エネルギー問題、⑤対外問題があると学んだが、その中で私は人口問題の少子化問題について興味を持った。

現在、日本での男性の育休取得率は、国際的にみて非常に低い水準にとどまり、夫婦が理想の子供数を持たない現状もある。女性の就業に関する課題も多い。私も結婚を期に退職を決断したが、大変な勇気が必要だったと覚えている。

コロナでデジタルへの変化も顕著である。スーパーのレジやショッピング、ファミレスでのロボットの活躍、学校など各所での連絡、手続き関係などIT技術が進んだが世界的にみれば、日本はDX、GXともに出遅れたという。まずは財政を持続可能にした上で、気候変動への政治的な取組を踏まえながら、脱炭素化実現が必要である。SDGsを、今日今から私が始めるとしたら何ができるか？感謝の気持ちを持って、一回一回の食事の在り方を見直したいと思う。

経済コースの受講をきっかけに、地球人として今いるここ日本を大切にしながらも、世界の仲間を意識し、毎日を丁寧に、ほがらかに生活していきたいです。

もっと子供に投資しよう

四方賢三

少子高齢化が大きな社会課題となっている。それに伴う社会保障費増に起因する財政問題も大きな問題だ。これら日本の将来を不安視させる問題を、我々市民が「今、どのように対処して行かなければならないのか？」を学びたくて受講した。

問題の本質はやはり少子化だ。これが高齢化・労働力不足・社会保障費の国債負担増による財政悪化等の主要課題を招いている。この少子化の問題は、核家族化・女性の社会進出・ライフスタイルの多様化等時代に伴う変化もあり、経済問題だけで解決できない根の深い問題でもあるが、ベルリンで家庭を持っている娘一家との行き来を通じて感じるドイツとの差を記したい。

ドイツも同じく少子化問題に悩まされているが、最近チョット出生率が上向いてきたとの事である（合計特殊出生率 1.58）。一番に「子供は親だけでなく社会全体で育てるもの」の意識がしっかり根付いていると感じる。18歳までは教育費・医療費・交通費等が無料と社会保障も充実している。このため国民負担率（租税負担率+社会保障負担率）が54%と、日本の47%より高く、消費税率も19%（食料品は7%）と高額である（日本も国債による政府支出分を加えた実質負担率は54%と同等である）。加え、子供の迷惑を大目にみたり、子連れ優先等が自然に行われている。

日本では、「子供を育てるのは親の自己責任」の風潮が強いが、「子供は未来の宝物であり皆で育てる」環境を作る事が肝要だと思う。明日の日本を背負う子供に投資をし、日本の繁栄持続性を維持して行く事は我々の責務だ。生育施策拡充の為に、その財源とする消費税率のアップを許容する事も我々の責任だと思う。「子供を2~3人持つのが普通の家庭」の社会通念をもう一度実現したい。

経済コースを受講して

T.T.

市民主体で企画・運営する三鷹市市民大学の存在を知り、その中に令和5年度【経済コース】「課題先行の日本経済~日本は何ができるか~」があったので応募して受講する機会をいただきました。そして最終講義まで参加できました。

このコースを選んだ理由は、急速な少子化高齢化、産業構造の転換遅れにもよる長期的な国力低下、資源・食料・半導体の低自給率などの経済安全保障課題、収入・資産格差の拡大に陥っている日本の経済政策への不安です。それらを検証し諸課題について考えるという講座の趣旨に惹かれました。更にさまざまな観点から人類・世界の持続可能性について、この齢になって自分出来ることは何だろうか？と関心を強めたからだと思います。

メイン講師の茨木秀行先生には8回に分けて講義をいただきましたが、常にデータや資料も十分準備いただいていた講義だったので大変分かり易い授業でした。学者になられる以前に行政の立場で仕事されていた経験もおありになったようで、理論と実践現場を併せた知性の強みを感じました。はじめの講義の時に「新しい資本主義」について検証をすることで日本経済の諸課題への処方箋を考えようというお話がありました。経済システムの変革を理論だけにとどめず、現実の構造改革を実行してゆく処方箋にしてゆくためには、相互に補完性がある関連システムと一体的・同時的な変革とならざるを得ない難しさも感じました。

今後ますます拡大が予測される AI や新しいテクノロジーから得る利益、これを社会全体で配分する仕組みを考えないと貧富の格差はますます広がるのが今の資本主義です。現在の資本主義経済に「神の見えざる手」はもはや存在せず、目の前の資本主義に経済学が正しく関わり、人類を幸せにする道を指し示すことができるのか問われていると思います。それが今日の経済学を学ぶ意義ではないかと考えたりしました。

昨 2023 年は Generative AI が「生成 AI」の名でブレイクし、対話型 AI の代表 ChatGPT (Generative Pre-trained Transformer) ブームが起こりました。

生成 AI とは、AI (人工知能) が文章、画像、音声、動画を自動生成する技術です。

なぜブレイクしたか、それは生成 AI がこれからのビジネスだけではなく、あらゆる分野を変えていくからです。

例えば今回の第 170 回芥川賞受賞作九段理江氏の「東京都同情塔」も AI と対話しながら、生成 AI が思考のサポートをしてきている世界を意識して書いたとのことでした。

また、この小説は、生成 AI 時代の預言の書とも言われていて、近い将来 AI が書いた小説が芥川賞をとることもあるのでしょうか。

AI の知性が人間の知性を超える時点をシンギュラリティ (Technological Singularity) 「技術的特異点」といい、レイ・カーツワイルは、2045 年と予想しました。

しかし池上高志東京大学大学院総合文化研究科教授は、「Beyond AI」で Singularity は既に起きていると A Life (人工生命) 論で語っています。

「人工知能」と「人工生命」の技術的アプローチが近づき、いまや「汎用 AI」AGI (Artificial General Intelligence) の枠を超えた「超知能」(Super Intelligence) の実現を目指している状況を、太田邦史東京大学理事・副学長は「人類はすでにルビコン川を渡ってしまったのかも？」と述べています。

つまり、ある閾値を超えた時点で、AI が意識を生み出す「創発 (Emergence)」が起き、すでに始まっているとのこと。

そして「AI 時代における人間の価値とは何か？」に、A Life 研究者岡瑞起筑波大学准教授は「『自律性』があること」と応えていて、自律性とは何かについては、西垣通東京大学名誉教授が、河島茂生編著「AI 時代の『自律性』」を推奨しています。

経済コースの受講を終えて

田 中 正 人

課題先行の日本経済～日本は何ができるか～と言うタイトルにひかれて受講しました。メイン及びゲスト講師による講義とで日本経済への処方箋について、大変勉強になりました。又経済とは国民生活の豊かさの実現に関する学問であるとの論に納得でした。講義の内容で印象に残った『脱炭素化に向けた日本の課題』と『脱炭素と経済—世界の視点から』について学んだこと考えたことを記します。(1)地球温暖化の問題として世界の平均気温は 1980 年比で既に 1℃上昇し、気候変動に伴う豪雨、猛暑のリスクが高まり農業、水産、水資源、自然生態系、健康、産業、経済活動への影響が懸念される状況となってきた。(2)気候変動に対する世界的取組みとして気候変動枠組条約が 1992 年地球サミットで採択、1997 年には京都議定書により各国が実施へ。2015 年にはパリ協定を採択し、全ての国が温室効果ガス排出削減、抑制枠組が発足した。(3)日本の取組みと課題としては 2050 年までに温室ガスを全体としてゼロとする目標を打ち出す。中間目標 2030 年には 2013 年比 46%減を目指し、さらに 50%の高めに挑戦する。この脱炭素化への課題として、再生可能エネルギーの比率引上げと原子力発電と技術開発の推進。脱炭素のイノベーションの推進。排出枠取引制限などの強化を進め削減計画の実行。環境関連の人材育成や設備投資の促進である。以上より人間活動による地球温暖化の危機をあらためて実感しました。日本として、官民一体となり脱炭素社会に向けて活動し世界をリードしていく事を思いました。

日本経済の課題についてメイン講師の亜細亜大学茨木教授の講義を受講して具体的に取るべき内容が見えてきました。戦後目覚ましく経済発展をした我国ですが、これは、勤勉に復興に取り組んだ人々の努力と同時に、幸運な経済環境によるものも大きく必ずしもすべて実力で勝ち取ったものではないことを再確認しました。ついついバブルの絶頂期に浮かれて、ゆでガエルのごとくバブル崩壊後の30年間を無為に経過させたことを今更ながら反省すべきと感じました。

今、日本は少子高齢化で、一人当たり国民総生産も低下し、デジタル化や地球温暖化等のイノベーションにも立ち遅れています。社会人になっても毎日研鑽してブラッシュアップやスキルアップしなければならないとの認識も不十分です。ただ、取り組むべき課題も見えてきているので、一步一步地道に変革して行くことが急務と感じます。イノベーションの開発に精力的に取り組むだけでなく、ガラパゴスの発想から国際的に通用する発信力を高めて行くことも一層大事であると思います。

これらの学びを学習生と共に共有するために自主学習では、年末に開催されるフェスティバルに参加するため、日本経済の低成長に関して、現状、要因、取り組み等をメンバーと意見交換しながら展示物として纏めました。当日には、市民の方々にご説明して様々な反応を頂きました。学んで来たことの復習や足りない点等を再認識する良い機会でした。更に、講義によっては、オンライン形式での開催もあり、そこでの質疑の仕方や要領を経験出来た良い機会でもありました。

また、三鷹市でユニークな経営をしている会社訪問を通して、経営者の気概や企業実務の悩みなどを本音で聞ける機会を持てたのも大変ありがたいことでした。

外国人労働者が日本を救う？

まずは1年間お世話になりました、茨木先生、事務所の方々、運営委員の皆様にご挨拶申し上げます。

少子高齢化の解決の一助としての「移民政策」に関し、興味があり、調べてみました。

実は「移民政策」は、最終解決ではなく「移民達」も年を取れば、年金、介護の問題は起きる訳で、また、仕事がうまく行かなければ、生活保護のお世話になる可能性もあります。そういう意味では、日本人の抱える問題と同じ所があります。

ただ、現在の喫緊の問題として「人手不足」があり、産業によっては、早急に解決しないと、産業そのものが、成り立たなくなる可能性もあります。

政府は当初「移民政策」を取る気がなく、基本的に、外国人は短期間で帰って頂く、転職は認めない、家族帯同も認めない、という方針でした。それが、「技能実習生」という制度でした。

ところが、雇用する側は、「労働者」じゃないんだから「最低賃金」は守らない、「有休」は付与しないとやりたい放題でした。これでは、実習生側も、やってられないとばかりに「逃亡」したり大変な事態になりました。

そこで政府も「特定技能」という資格を立ち上げました。これは「永住」に道を開くもので「無期限就労」「家族帯同」を認めています。業種に限りはありますが、当面の「労働力確保」という目的は、叶うことになります。推移を見守りたいと思います。

経済コースを受講して

R.T.

35年前に、武蔵野市で起業のため、三鷹市に転居してきました。

毎日のように仕事に追われておりましたが、コロナが発生し自宅にいたことが多くなった時に市報に市民大学開催募集中のお知らせが目に入りました。以前から、税法やFPの勉強をしていたので、早速申し込み、運よく合格しました。

30回の講義には経済界から、幅広くそれぞれの分野の権威の講師の方々の講義を受け大変勉強になりました。また、質問される方々のレベルの高さに感銘を受け、視野が広がりました。

今後も機会があれば是非とも続けたいと思っています。

日本の労働生産性の課題

丸山健蔵

日本の労働生産性（以下、生産性）の課題について取り上げます。理由として、足許の日本の潜在成長率は0.5%程度で、米国の1.8%に比べて極めて低く、その主な要因が生産性の低下にあると考えられるからです。

生産性の国際比較をすると、OECDデータに基づく2021年の日本の時間当たり生産性及び一人当たり生産性はいずれもOECD加盟38カ国中20位台後半で、データが取得可能な1970年以降最も低い水準になっている。特に労働集約型産業（宿泊・飲食・医療・福祉・介護等雇用の約半分が従事している）の生産性の低さが際立っている。生産性を向上させる方策としては以下の3点である。

①労働の流動性上昇

国際的にみると、労働の流動性が高い米国・北欧諸国の生産性伸び率が高いとの結果が得られている。日本は特に正社員の流動性が低く、賃金上昇率を引き上げるためにも成果主義を取り入れた「ジョブ型」への移行を進めることが重要である。

②定型的な業務のデジタル化

日本が非常に遅れている分野であり、処理スピードの向上やミスの抑制にもつながる。

③アウトソーシングの活用

自社の人材で全ての業務に対応するのではなく、業務内容に応じてアウトソーシングを取り入れることで、より効率よく業務を進められる。コロナ禍ではアウトソース産業が発展しており、アウトソースを担う企業は、ホワイトカラー事務量の削減が可能となる。

最後に、充実した1年間を過ごすことができたことに対して、多くの講師の方々、生涯学習センターの事務局、このコースの運営委員の皆様にご感謝申し上げます。

日本経済を通して世界を見る

R.Y.

まず初めに、このような貴重な学習機会をいただきましたことに感謝したいと思います。

1年間の勉強を通じて、日本経済の現状と今後の発展動向について学びました。経済学の授業は難しすぎるのではないかと心配していましたが、とても楽しい学びの雰囲気であったという間に一年が終わりました。

最後に、本経済講座の企画委員、運営委員、職員、先生の皆様にご感謝申し上げます。ありがとうございました。

何を学んだか

H.M.

経済コース応募の動機は日経新聞の経済教室を理解できる知識を吸収する必要性が出来た。

今年度の経済コースの学習目標が日本政府の経済対策の検証と日本経済の諸課題の処方箋なので、理解の助けになると思い参加した。皆さんの講師への鋭い質問、経験から来る意見を聞きながら、自分の知識の無さを感じた。しかしデータの出所をもう一度ホームページで検索できる様になり、掲載文に納得だけでなく違和感も感じる。

1月6日付けの日経新聞の大機小機に20年度から22年度までの歳出額と国債費の当社予算決算と23年度見込みの国債費25.7兆と30年度長期金利2.4%とした場合の国債費32.7兆と7.4兆増加とみている。同時に税収は23年度の69.4兆、30年度は87.2兆と17.8兆増加のシナリオを描いている。名目成長率の回復で税収が増え国債費を賄ってもお釣りが出ると試算している。

本当に国債費以上に経済成長が出来るのか？その為の具体的な税収が上がる投資先と監察収益追跡が政府関係者だけで出来るのか？半導体事業の熊本・北海道に誘致建設は本当に長期的に利益がでるだろうか。半導体は一番でないと薄利多売となり十分な利益を得られないことは経験済みのはず。観光立国では世界的な景気後退すれば観光は一番に打撃をうけ、長期的に安定した収益源になりにくい。余力がある内に限度額を決めて医療、防衛関係の自国で持つべき技術・特許開発に国の出資または共同開発する。これがリスクは大きいですが、民生用利用できれば多くの利益と他国からの攻めに対抗できる。

講座からの学び、考える。

E.M.

少子高齢化問題の原因として、結婚をしない若者の増加、所得の低さ、非正規雇用。キャリアアップの為の専門性の高さや高学歴による晩婚化等。

この時期（妊娠適齢期25～32歳頃）は、仕事のキャリアアップと出産、子育ての時期が重なり女性自身の人生において、どちらかを優先させるかを考えざるを得ません。女性は結婚、出産、子育て、介護等により男性と比べて仕事から離れる機会が多くなります。一旦仕事から離れても家族の協力、企業の制度、国、地方自治体の支援（お金も人手も必要）を充実させ安心して向き合える様に、女性が子育てと仕事のどちらかを選ばざるを得ないのではなく両方が大切であり、子育ては次世代を担う人材育成であり重要な役割と社会全体が理解しサポートしていける体制が整うと良いと思います。

日本の男性は育児、介護休暇取得率が低く世代間によっての意識の差も感じます。出産は限られた女性にしか出来ない事ですが、子育て介護は社会全体で行なえる事であり、行なわなければならない事と言う認識を持っていく事が大切です。

高齢化は避けられません。健康である事で医療費を抑え、より長く働き続ける事が望まれます。人生を豊かに生きる為に健康と一生付き合える仲間を作る事は自分にしか出来ない事です。

日本経済には社会保障、財政、金融、環境エネルギー、対外問題等沢山の課題があります。経済は世界情勢、政治、環境、時代と共に変化していきます。「経済成長は必要か？」と言う柔軟な思考や捕え方も大切と感じました。

茨木先生はじめ諸先生方と学習生の皆さんと、学び合えた事、事務局担当者さんにサポート頂いた事を心より感謝いたします。

2年ぶりに経済コースに参加、メイン講師の茨木先生からは7回の講義にて、冒頭2回で日本経済の歴史及び課題の全体像をお示しいただき、その後、各論で領域毎の現状と課題を取り上げ、図表グラフ中心にわかりやすく紐解いていただき、課題先進国と言われる日本経済の実態に向き合い、改めて各課題への対処を考察する契機となり、また、その際に考慮すべき重要な視座を学ぶことができました。日本の抱える今現在の課題に関して、全体を適切に俯瞰しつつ、各論テーマで個別にここまで掘り下げて展開する講義は、私にとっては初めてであり、誠に有意義な時間を仕事の合間に経験させていただきました。

個別テーマでご登壇の先生方の講義も、基本的には茨木先生が列挙した課題と連動したテーマが多く、経済成長・労働生産性（熊野先生）、少子高齢化（吉川先生）、インフレ・物価・経済政策（大川先生）、グローバル（大橋先生・荒巻先生）、脱炭素（蓬田先生）、デジタル（森先生）、財政・社会保障（村田先生）、安全保障（細川先生）など、各領域に関して別の角度からお話しいただき、新たな気づき、複眼的な思考を得ることができました。そうした中、独自路線で異色だったのは、小幡先生、浜先生、丸山先生の講義であり、経済には斯様な見方や側面があるのかと新鮮な衝撃も感じました。

講座全体を総括して、個人的には、日本経済の抱える本質的な課題として、①人口減少と高齢化、②低位な労働生産性、③食料・エネルギー等の経済安全保障問題、④国家財政の問題の4つの課題が根源にあるという認識に至りました。4つの課題は、発生の経緯・深刻化の道筋・課題対応の経路が異なる別個の独立した課題として捉える必要があるものの、解決の困難性という点において共通点を有する難題です。簡単に解決できるものではありませんが、いずれも、これ以上は悪化させずに改善する必要があり、タイトルにある通り、「日本は何ができるか」を問い続け、個人として、三鷹市民として、国民全体として、どう取り組んでいくべきか、考えて行動する必要があると思っております。

また、この原稿作成中の3月上旬現在、中小企業経営の一翼を担う立場として、賃上げ交渉・春闘の真っ只中にあります。今回は、本講座で学んだ状況認識も十分に考慮して、適切な対処を実施し、一企業としても、日本経済全体のことも少し念頭に置いて、プラスのスパイラルに繋がる道を模索している次第です。

充実した講座を企画・設営いただいた事務局及び企画委員の皆さま、自主学習において学習生間の意見交換・交流・協働を主導していただいた運営委員の皆さま、関係者のご尽力に心から感謝申し上げます。

経済コースを受講して

H.Y.

普段経済の事など考える余裕もなく生活していましたが、今回初めて経済コースを受講して日本の経済に関心を持つ良い機会となりました。

経済を知るには世界や日本の歴史も関係していて幅広く学ぶ事が出来たと思います。

メインの講師の方以外にも多方面で活躍されている素晴らしい講師の方達の講義を聞く事が出来て、それぞれの違った意見を聞けたり、経済に対する熱意も感じました。漠然と日本の将来が不安でしたが、受講するにつれてまだまだ日本は大丈夫かもしれないと思わせてくれました。受講生の方達も、経済に対する独自の考えを持っていて毎回質疑応答の時間が足りないくらいでとても感心しました。

自主学習の時間には、みんなで会社見学へ行って、そこの社長のお話を聞いて社内を見学する事が出来たのはとても貴重な時間で良い思い出です。

社会人になってからまた学生に戻ったような学べる機会と出会いをくれた三鷹市民大学にはとても感謝しています。

講師の方達、一緒に受講した生徒の方達にも感謝です。一年間ありがとうございました。

コロナ禍が始まり在宅ワークが中心となった中で、仕事中心から徐々に生活中心へと切り替えしようと、初めて市民総合講座で受講したのが経済コースであった。普段、仕事上で肌感覚で感じていた日本経済の状況が、講師の講義やグラフなど数値を提示されることによって、感覚でとらえていた課題が改めて整理され目の覚める思いであった。今年度のテーマの「課題先行の日本経済～日本は何ができるか～」で提示された5つの主な構造的課題①人口問題（少子高齢化等）、②社会保障問題（持続可能性）、③財政・金融問題、④環境・エネルギー問題、⑤対外経済関係が当初に提示され、その後の講義で、具体例やより詳しい説明で、ありありと今現在進行している課題をより深く認識することができた（副題“～日本は何ができるか～”として、解決への道筋や可能性への言及が少なかったことが少々残念であった）。これらの課題が相互に関連しあって、現在の日本の経済力の低下（失われた30年）につながっているのだと理解できた。

上記の5つの課題は、この失われた30年のなかで、産業構造の変化による労働集約型のサービス産業が大きな割合になったこと、企業の防衛的意識による内部留保の増大、産業界での投資意欲の減退、賃金が上がらないこと（による消費者の購買意欲の減退）、社内や社外のイノベーションやベンチャーやスタートアップを支援し育てていくシステムが他国に比較して脆弱で世界的に後れをとっていること…等、様々なことが影響し現在の日本経済の状況となっていると思われる。その状況に根底に共通するのは、高度経済成長～バブル期までの成功体験で形成されたマインドセット、例えば財政支援の在り方、経営や企業組織の在り方、新規事業や新しい事への躊躇（失敗を許さない風土）、デフレ意識の消費者マインド形成等、から抜け出せないことなのではないかと思われる。社会や産業がソフト化していく中で、例えば、成長の芽があるIT、日本が誇るゲーム・コミック・映画等のコンテンツやエンタメ、観光コンテンツ、高度医療技術等などにおいても、アメリカや韓国など官民一体となった成長産業への投資などがなされておらず、相変わらず従来の個別の才能と職人的な人々やスタートアップ等の熱意で支えられており、産業界が一体となった「知やノウハウをお金に換えるシステム」形成がなされておらず、世界市場に遅れている現状ではないだろうか。この課題に対しては、日本の政府・産業界・勤労者の意識が、新しいことに挑戦や投資をしていこうとする方へ変化し、相互に連動して来るべき時代に向き合っていく必要があると感じている。

ゆっくり生きよう

～暮らしの中の哲学・宗教～

講師：島 蘭 進
(東京大学名誉教授)

哲学対話の様子



宗教から見る現代人の心と社会

講師 島 蘭 進

30回のクラスのうち10回を私が担当させていただいた。「現代人と宗教」2回、「グリーフケアと日本人の死生観」3回、「現代生命科学与倫理」2回、「現代世界の宗教と公共空間」3回である。宗教学を学んで来た私が、今も学びを深めたいと思っている論題について、三鷹市民の皆さんとともに考える時間をもちたいということから設定した論題だった。

「現代人と宗教」では、現代の日本人が救済宗教を信仰するという事に距離を取りつつも、宗教の重要性は信じているということにつき、私の考え方を述べた。「グリーフケアと日本人の死生観」は、宗教学と並んで死生学を学ぶようになった私自身の変化も踏まえて、死と悲嘆にどう向き合うかについて話した。「現代生命科学与倫理」では発展著しい科学技術が倫理的問題を置き去りにして進んでしまう現状を踏まえ、どのように制御することができるのかを考えようとした。「現代世界の宗教と公共空間」では、分断と対立が深まる現代世界のあり方に宗教がどう関わっているのかを考えようとした。

どの回も80分ぐらい私が話し、30分ぐらいは質疑応答の時間をとり、参加者の皆さんの問題意識にふれる時間を大切にしたい。この討議の時間がとても意義深かったと感じている。宗教は人々の暮らしと切り離せない。ものごとと人間の生き方を根本から考えるのが哲学だとしたら宗教も哲学の枠内に入るが、人々の生き方を切り離せないという点からは宗教から考えていくことの方が身近に感じられるのではないだろうか。

折からウクライナの戦争やガザ攻撃などがあり、どちらも宗教の関与が重要な要素だった。また、日本では統一教会問題を通して日本人の宗教観が問われた時期でもあった。こうした問題を、自らの生き方と深く関わる問題として受け止めていただけるような時間をもてることを心がけた。

繰り返しわきあがってくるのは、日本人にとって宗教は何かという問いだ。自分にとって宗教はあまり関係がないと思っていた方々にとっては、実はそうでもないと感じていただけることがあったとすれば幸いだ。

企画委員の方々との交流も意義深いものだった。市民が積極的に企画していくところに三鷹市民大学の独自性があり、それは私にとってもたいへん共鳴できるものだった。とても楽しい講座だったこと、企画委員だけではなく参加者の皆さんに大いに感謝している。

プロフィール



1948年 東京生まれ
2013年 東京大学名誉教授
2013年 上智大学神学部特任教授(2016年3月まで)・グリーフケア研究所所長
大正大学客員教授
2015年 上智大学モニュメンタニボニカ所長(兼任)
2016年 上智大学大学院実践宗教学研究科教授・同委員長
2022年 上智大学退職。現在、大正大学客員教授、上智大学グリーフケア研究所客員所員、
東京大学名誉教授、NPO東京自由大学学長

しまぞの すすむ
島蘭 進さん

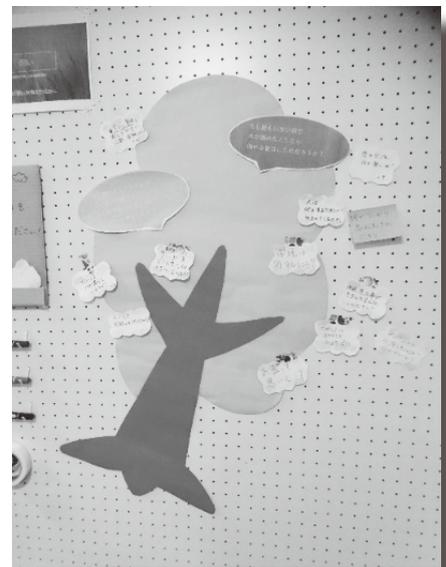
メイン講師島藺先生講義の様子



自主学习発表



フェスティバル展示



●カリキュラム

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|----|--------|---|---------------------------|
| | 学習内容 | | |
| 1 | 5月12日 | 開講式・オリエンテーション | 自主学習 |
| | | 事務局説明・各受講生自己紹介・運営委員選出 | |
| 2 | 5月19日 | 現代人と宗教①宗教からスピリチュアリティへ | 東京大学名誉教授 島菌 進さん |
| | | スピリチュアリティの興隆と主流文化への浸透、苦しみ・恐怖・迫る死(限界意識)のスピリチュアリティ | |
| 3 | 5月26日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | | 今後の自主学習でやりたいことをグループ論議・発表、昨年事例及び生涯学習センターフェスティバル説明 | |
| 4 | 6月2日 | 現代人と宗教②新たなケアの文化と宗教・スピリチュアリティ | 島菌 進さん |
| | | 限界意識ケアの実例「水俣の孤立と悲しみ」・「震災死と喪失感等」 悲嘆とともにグリーフケアで生きる | |
| 5 | 6月9日 | ワイトゲンシュタイン入門編① | 東京大学大学院(倫理学)准教授 古田徹也さん |
| | | ワイトゲンシュタインの考える命題の思考法考察過程 | |
| 6 | 6月16日 | ワイトゲンシュタイン入門編② | 古田徹也さん |
| | | ワイトゲンシュタインがたどり着いた「ものの見方」 | |
| 7 | 6月23日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | | NHKこころの時代～宗教・人生～「追悼・作家・青木新門 生死と生きる」視聴、グループ論議 | |
| 8 | 6月30日 | グリーフケアと日本人の死生観① | 島菌 進さん |
| | | 身近な人の死が心に与えるもの、一人ではどうにもならない喪失感を集いで癒やす＝グリーフケア | |
| 9 | 7月7日 | 戦争と平和についての哲学① | 東京外国語大学名誉教授 西谷 修さん |
| | | 平和＝日常生活の連続 戦争＝殺人解除・一般人停止不能 戦争変化＝殲滅⇒大量殺人兵器⇒キルカウント | |
| 10 | 7月14日 | グリーフケアと日本人の死生観② | 島菌 進さん |
| | | 喪失感を癒やす、悲しみを表現し共鳴を求める童話・詩・音楽、グリーフケアの集いの形成 | |
| 11 | 9月15日 | グリーフケアと日本人の死生観③ | 島菌 進さん |
| | | 日本人の悲嘆の表現と仏教文化 亡くなった子供を思う漢詩(杜甫)、俳句(一茶)、近代中国(魯迅) | |
| 12 | 9月22日 | 戦争と平和についての哲学② | 西谷 修さん |
| | | 平和主義でなく非戦、人はどうしたら生きられるか、人間が生きることを本質的、多面的に考える | |
| 13 | 9月29日 | 死生観についての哲学ワークショップ | 東京医科大学・人間学教室兼任教授 西 研さん |
| | | テーマ「悲しみや喪失感が癒やされるには？」哲学対話 論議・発表 | |
| 14 | 10月6日 | 現代生命科学と倫理① | 島菌 進さん |
| | | いのちを“つくる”医療に歯止めは必要か 遺伝子操作による治療を超えた人体増強⇒人間の尊厳を問い直す | |
| 15 | 10月13日 | 【公開講座】現代日本の教育と政治 | 現代教育行政研究会代表 前川喜平さん |
| | 10月14日 | 【公開講座】アジアにおける平和と共生 | |

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|----|--|---|-----------------------------|
| | 学習内容 | | |
| 16 | 10月20日 | 現代生命科学と倫理② | 島蘭 進さん |
| | ゲノム編集出産、倫理を置き去りにしたテクノロジー、差別・分断をもたらす、人間の尊厳と文化の多様性 | | |
| 17 | 10月27日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 振り返り・グループディスカッション／フェスティバル説明・新規イベント募集結果及び内容決定 | | |
| 18 | 11月10日 | 京都学派の哲学——場所・自己・無【オンライン】 | 京都大学名誉教授 藤田正勝さん |
| | 自己は最初は形がない 障害や悲しみをありのまま受入れ囚われず目標に向く「無」の境地に至れば自在を得る | | |
| 19 | 11月17日 | 生涯学習センターフェスティバル準備① | 自主学習 |
| | 哲学対話：テーマ～ゆっくり生きる～ グループ対話・発表 繁忙な中自分と向き合えるひとりの時間を得る他 | | |
| 20 | 11月24日 | 生涯学習センターフェスティバル準備② 開催日：12/ 2(土)・3(日) | 自主学習 |
| | 振り返り 「哲学の変遷と哲学書」受講生の講義 フェスティバル役割分担決め | | |
| 21 | 12月 8日 | 哲学対話 | 東京大学大学院総合文化研究科・教授 梶谷真司さん |
| | テーマ選定：～友人とは～グループ対話 人によって友人のあり方は様々 | | |
| 22 | 12月15日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | NHKこころのたび「悲しみに寄添うスピリチュアルケアの仏教徒」視聴 グループ論議・発表 寄り添いに形なし | | |
| 23 | 1月12日 | 現代世界の宗教と公共空間① | 島蘭 進さん |
| | 政治の宗教利用と政治的宗教勢力の伸張、ロシア、トルコ、イスラエル、アメリカ、日本の現状 | | |
| 24 | 1月19日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 「祈りの竖琴活動 キャロル・サック」視聴 グループ論議・発表 寄り添うとはどういうことか | | |
| 25 | 1月26日 | 現代世界の宗教と公共空間② | 島蘭 進さん |
| | 戦後日本と国家神道、代替わり儀礼、近代皇室祭祀の創設、国体護持と国家神道解体 | | |
| 26 | 2月 2日 | バッハの世界と真理(バイオリン独奏) | ヴァイオリニスト 戸田弥生さん |
| | 小空間の中で戸田先生による生演奏：豊かで立体感ある音経験、特にバッハは心に迫る忘れられない体験 | | |
| 27 | 2月 9日 | 恋愛哲学 | 中央大学教授 中村 昇さん |
| | わたしたちはどういう存在なのか、恋愛とは、片割れ存在、私が他者と連続する。 | | |
| 28 | 2月16日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | この1年間の学習を振り返る。グループ論議・発表 | | |
| 29 | 3月 1日 | 哲学的生き方 | 哲学塾「カント」主宰 中島義道さん |
| | 「時間」とは、終わった過去と不明な未来の瞬間の現状、「自我」とは、言語がないと理解できない今の自己状況 | | |
| 30 | 3月 8日 | 現代世界の宗教と公共空間③ | 島蘭 進さん |
| | 仏教の近現代、正法を広めるといふこと、仏教の社会事業、戦争／平和への関与、21世紀に入ってから展開 | | |

初心者のすすめ

N.A.

1年間を通じ哲学コースで感じたことは『学びは楽しい』ということです。学生時代から40年余りが過ぎ、久しぶりに市民大学で、このような機会をいただき幸運でした。哲学は興味があったものの、解説書でさえ理解できず挫折することが多かったのですが、ここでは著名な先生方が初心者の目線まで降りてご教示いただき、講義や質問の中で理解、また、考えを重ねる中で新たな気づきに出合え、貴重な時間でした。

講義の他、哲学対話が思い出深いです。グループをつくり受講者同士でテーマを設定し、考え、意見を言い、互いを尊重して話を聞く。このプロセスによって、考える力を育てることを目的とし、結論の有無は求めません。他の方の話を聞くことで自分のイメージが洗練されていく感覚は新鮮でした。また、もう一つの哲学対話手法では、対話の中で、自分の考え方を反省・確認し、そこから自分だけでなく、どの人にも本質とを感じるものを探していきます。いずれの哲学対話も、他からの知識を借用しません。考えや意見は自分の経験で刻み込まれたものを根拠としないと、本質を考える力がつかないからと受け取りました。

令和5年度哲学コースのメイン講師の島菌先生からは、宗教、グリーフケア、死生観、倫理など相当広い範囲を深くご教示いただきました。最近、講義の振り返りを行っていたところ、先生は断定的なことはおっしゃらず「こういう問題や課題がありますが皆さんはどう考えますか。しんどい問題もあるけど、考えることが哲学の入り口です。哲学は割りと生活の身近にあって、入り口はおおらかですよ。」というメッセージがあったように思いました。これが私の受け取った「哲学」のイメージです。

宿題を得て

T.O.

ゆっくり生きように共感した申し込みは抽せんにも漏れ欠員補充で九月に復活、不自由になった身を忘れ久し振りに世間に向き合った六ヶ月でした。

「グリーフケアと日本人の死生観」の講義の関連で、後日ケアの実例「竖琴を弾くシスターと傍に横たわるひとりのお年寄り」の映像番組を観る機会に恵まれました。人の哀しみに寄り添う真情の楽の音に心うたれる静謐のひと時を共有し、優しい女人の話しに語りかけられる老人の姿に思わず我が身を重ね、彼我一如の安らぎが注がれた寄り添いの極致を目前にしました。

生命科学の講義で科学進展の行方の恩恵を待ち望む当事者達に対する私の理解は十分でなく、人間の生命について宗教観も含めて考え続けることが宿題となりました。また毎回の講義の資料を手許に、古代史や国家神道の流れに分け入ることで見えてくることに期待があります。

省みると青年期の出会い「汝自身を知れ」、「善く生きよ」の内包するものは小さな自己の日々の体験の堆積のエキスが軸となった支柱になっているのかと思えます。

後年、哲学・宗教の山なみを細々と辿りながら林住期にある身に一段と強く親和性を見せるのはハイデガーであり、「人間よ道徳的存在たれ」と哲学者の願望を説くカントや社会的存在であることを前提とするヘーゲルの倫理学を横目に、未だ入口に佇み未消化なれど、「死すべき存在としての自覚—これ故に世人として埋没する^{ないう}類落から存在としての本来的在り方—」に足を留め、実生活の中で「本来的って何?」「ほんとう」「よい」の本質に近づけたらと願う。米寿を期に一句「しみじみと他力に浴し御来迎」。

お世話になり感謝申し上げます

一年間受講して思うこと

R.O.

コースを選ぶにあたり、まず、これまで不得手で避けてきた歴史か経済をと考えましたが、締め切り直前になって、自分の中の悩める心に押され、哲学コースに決めました。

先生方の講義は、毎回面白かったです。哲学はともかく、宗教にはあまり興味は無いのですが、そんな私の気持ちを見透かしたかのような、島藺先生の初回の講義。特定の宗教を信じているわけではないが、何か神のような存在を信じているという人は多い、という指摘。まさに私のことだと思いました。先生方の講義を受ける中で、過去の人生で未消化だった出来事のいくつか、呼び起こされる体験をしました。そして、それらの事柄について、改めて本を読んだり、映像を観たり、考えたりしました。受講生の方々のお話にも、新鮮な驚きや発見がありました。受講期間中に、私生活でも様々な出来事がありましたが、受講を通して思考したことが、自分の支えになっていると感じました。

自主学習は、まるで想定外でした。自分たちでテーマに基づいて話し合い、まとめ、発表する。正直、気が重かったです。しかし、ここで退いては、面白い経験もできない。虎穴に入らずんば虎子を得ずの気持ちで、自己鍛錬をするつもりで臨みました。皆さんとの対話の渦中に身を投じることで、人の温かい気持ちに触れることもありました。

一年間受講して思うのは、予想以上に得るものがあったということです。それというのも、私にも伝わるように話してくださった先生方、環境を整えてくださった担当職員の方、委員の方々、受講生の皆さまのおかげです。ありがとうございました。

宗教って意味ありますか

M.K.

宗教に強い関心をもって、本講座を受講しました。大変勉強になり、皆さんに感謝です。初めて参加して何よりも驚いたことは、受講者に幅広い年齢の女性の方が多くおられたことです。講義、自主学習を通して、女性の方々が積極的に参加され、発言されておられて、感心しました。高齢男性としてなかなか払拭されないジェンダー意識を恥ずかしいと思いました。自らの大学時では講義は板書を書き写すことが主で、グループ討議、発表ということが極めて少なかったので、その点でも新鮮でした。

宗教についての講義は、島藺先生のお話しがたいへん興味深く、大いに考えさせられました。宗教とは何かと、私は強く問題意識をもっています。それは宗教が私たちの生き方に有意義なものを与えてくれるだろうという思いがあるからです。今宗教は穴の空いた古着のような取扱いがされて、どんどん私たちの生活の中から遠ざけられてきています。形ばかりのもの、催事ごと祭りごとのように扱われてはいませんか。宗教関係の講座では知識を深めることはできても、宗教本来の人を救う、人間の生き方を問うものからは遠いように思います。宗教の原点には、人智を超えた不思議さに謙虚に立つという揺るぎないものがあるのではないでしょうか。

講座の半分は哲学についてでした。哲学には正直あまり馴染めませんでした。当たり前とされていることに疑問を持ち、考えることが重要であると学びました。なるほどと思いつつも、それでという気持ちが拭えませんでした。哲学は私にとって「吾輩は猫である」の猫のごとく、皆さんのお話を聞きながら顔のヒゲを撫でるだけだったようで、咀嚼しきれませんでした。

ゲノム編集という人の命をつくる医療が広がることによって、「人の命の道具化」が進み、「つくった命は壊せる」という感覚が生まれ、さらに、「命は尊いものである」との基本的な考え方が揺らいでいく可能性がある。これらの内容は、「ヒト胚へのゲノム編集について」の講義で紹介されたものである。

確かに命の道具化が進展すれば、命を破壊することは可能であるとの機運が芽生えると同時に、ゲノム編集によるデザイナーベイビーが富裕層の特権となり、社会の格差が一層拡大する可能性もある。命の道具化の危険性には同感するものの、何か違和感が残り、講義後も多くの観点から思考を巡らせている。以下に、数例を記す。

【医療】ゲノム編集によって遺伝性疾患のリスクを軽減できるのではないか？

【倫理】命には肉体面と精神面があり、生後から育まれる傾向が強い精神面（倫理・道徳面）の命が健全であれば、命の尊さは保持できるのではないか？

【未来】地球環境の悪化等により、人間自らが、ゲノム編集による急速な進化を余儀なくされるのではないか？
(例：宇宙での生活には、放射線への耐性が不可欠)

等々、哲学に関し門外漢である私にとっては、考えることが哲学することの第一歩ではないかと感じている。

一方、少人数による、自らの経験をもとにした意見・考え方を話し合う、自主学习は非常に良い。自分自身の思考の幅を広げることができ、また、昨今失われつつあるコミュニティが、地域に根差した形で創出できている。

最後に、講師の熱意あるご説明、企画委員・運営委員の方々のご尽力、事務方のきめ細かなサポートなどに感謝するとともに、多くの方々が市民大学に興味を持たれ、参加を希望されることをお勧めします。

～暮らしの中の哲学・宗教～受講を終えて

K.S.

家族が宗教に入ったのをきっかけに「宗教とは一体何だろう」と考え始めたところ、この講座「暮らしの中の哲学・宗教」に出会いました。

子供の頃から祖母と墓掃除をし、父は毎朝神棚に手を合わせてから出勤して毎月、伏見稲荷大社へお参りを欠かしませんでした。神さん仏さんそんな言葉が暮らしの中にあり、次第に自分が生まれて来た意味＝使命について考えるようになり、後年は人生をより良く生きるにはどうすれば良いかを模索するようになりました。

こんな私に島菌先生はじめ著名な先生方のお話を聴講する機会をいただき感謝しております。又、自主学习では参加者のことばを生で聴く、貴重な体験が出来ました。

特に、島菌先生の授業では（過去の資料をていねいに解説して頂き、統一教会や宗教戦争に渡る）時事問題など大変勉強になりました。

さて「人は幸せを求めて宗教を信仰するものです」が現在のように宗教が違うというだけで戦争の要因にまでなります。改めて「宗教とは一体何だろう」と問うても答えは浮かびませんが、これからも考え続けたいと思います。

一年間この授業を支えてくださった皆様に感謝申し上げます。有難うございました。

一滴の水としてやってきて、
大気圏の外には行けず、風吹き、
やがて戻る。

「哲学コース」から見出したこと

T.S.

事実や知識を伝えていただきながら、考えるテーマを与えてくださり、自ら答えのない問いを探求することを体験しました。日常の中では時間や結果に追われ、自分にとって最も大事であろう「生きること」「死ぬこと」「自分とは」を立ち止まって考えることが疎かになっている中で貴重な時空間を味わいました。島菌先生を中心に多彩な講師の諸先生方から、多角的な考え方とそのキャラクターから多くの刺激を受けました。

また受講生の皆さまとの対話で、弁えた他者との関わりから自分が刺激を受け、それに応じる中で自分が変わっていくという体験、改めて「自己」が流動的で変化しながら積みあがっていくものだと感じました。そのような変化する不安定さや、答えに行きつくともまた次の問いが出てくる「絶対」がない面白さをこの講座全体から感じることができました。おそらく今後も問い続けていくと思います。

他県の友人が三鷹市の市民大学の講師陣と企画を見て「凄い！三鷹市に住みたい」と言っていました。このような企画をしてくださった運営委員の皆様と市に感謝します。

「暮らしの中の哲学・宗教」を求めて

高橋 かわり

島菌進先生がメイン講師を快諾して下さった事で、今年の哲学コースの成功は、確約されたも同然だった。「現代人と宗教」「グリーンケアと日本人の死生観」「現代生命科学と倫理」「現代世界の宗教と公共空間」など多彩なテーマの講義は、いずれも社会課題であると同時に今を生きる私たちを深い思索に誘うもので、正解のない問いの数々が新鮮に感じられた。

特にいのちを“つくる”医療には、科学への楽観的な盲信がある様に思われ「治療を超えて」心身の「改善」に介入する現代医療は、軍事転用されたら何が起こるか分からない恐ろしさがある。デザイナーベビーに代表されるゲノム編集は、人類を異次元の方向に誘導し、その死生観にも大きな影響を及ぼし「人間観」を根本的に改変しそうだ。予測し得ない事に人は恐怖を覚えるが、スピリチュアリティの価値が前景化し、今後は日本独自の生命倫理が構築されるのではないかと。

また、世界各国の宗教と政治の間には相互に強い関係性があり歴史的にも多くの紛争の種になってきた。日本では統一教会と保守政治の結束が異様に強く、深刻な問題を生んでいる。世俗の政治と宗教が紐帯を強める事の失敗例は枚挙にいとまがなく、哲学なき政治が腐敗を生み国民を苦しめるのは過去に学べないからか。

ゲスト講師の講義では、古田徹也先生の「ウイトゲンシュタイン入門編」により苦手感のあった哲学者の意外な一面もわかり、西谷修先生の「戦争と平和についての哲学」、藤田正勝先生の「京都学派の哲学」、西研先生の「死生観についての哲学ワークショップ」も哲学コースの多彩さを特徴づけ、中村昇先生の「恋愛哲学」は疾走感のある語り口に教室が笑いに包まれた。ヴァイオリニストの戸田弥生さんの美しく力強い独奏は、心が洗われる様な時間を与えてくれた。

講師の方々、共に学んだ学習生、企画・運営委員、担当職員に心からの感謝を！

哲学コースに参加してみて感じた事

A.T.

三鷹市民大学は2回目の参加でした。

一年間、同じメンバーで一つの分野を勉強するという時間が、自分の生活にとって、とても貴重であると感じ、ぜひ参加したいと思いました。

哲学は、この市民大学で初めて出会った分野で、哲学の事を深く理解できたわけではありませんが、自分の中で『哲学』は、身近なものと感じるようになりました。

日々のちょっとした事を、少しだけ深く、または違った視点から考えてみたりする、それも『哲学』かも？と思う事が増え、受講前の自分より、物事を柔軟にとらえられるようになった気がしています。

また、自主学習で色んな世代の方と交流ができるのも、三鷹市民大学の魅力の一つだと思います。おそらく初めて受講する方は、びっくりする方も多いと思いますが、多くの方は、受講後に同じように感じるのではないかと考えています。

デジタル化の中、対面での講義や直接コミュニケーションが取れる場がある事は、とても貴重だと感じます。

これからも三鷹市民大学を継続して行ってほしいですし、また機会があれば参加したいです。

多面的なアプローチで哲学を浮き彫りに

J.T.

一般的に「哲学」を学ぶとなると、まずは西洋哲学の学習からというイメージがある。すると、どうしても哲学用語（＝訳語）の理解が肝要となってこよう。一方で、翻訳の問題もあるが、この用語理解の難解さが「哲学」へのハードルを上げているように感じていた。

哲学という学問に限らず、言葉や考え方を理解する際には、その意味するところを掘り下げていくのが正攻法であろう。ただ、それ以外にも、その言葉や考え方のまわりにある、より具体的なものを数多く学ぶことで対象物の意味を浮彫りにしていくという方法も有効である。

今回の哲学コースでは、さまざまな講師の方々から、宗教というテーマに限らず、それぞれの「哲学」を提示していただくことで、大いなる知的刺激を受け、毎回何かしらの気づきを得た。自主学習でのビデオ鑑賞も含めて非常にバラエティに富んだ、「哲学」への多様なアプローチを学ぶ場となった。

特筆すべきは、メイン講師である島菌先生である。宗教そのものを説明するというよりは、それを取り巻く今日的なさまざまな事案を題材として取り上げ、宗教的なもの・スピリチュアリティ（霊性、精神性）を浮き彫りにしてくれた。押しつけもなく肩肘張らず春風駘蕩の如く語られる島菌先生の影響もあろう、受講生の方々が自主学習時も含めて、何事にも斜に構えず前向きな姿勢で参加、発言されていたことも印象に残っている。

さらに、あの戸田さんのバツハの時間は、至福の時であったことを付け加えるべきであろう。

最後になるが、このような得難い場を設営いただいた小暮さんをはじめ生涯学習センターの方々、また素晴らしい講師陣を招聘いただいた関係委員の皆様にも多大なる謝意を表したい。

たまたま図書館で手に取った市民大学のチラシで本講座を知った。一昨年からは仕事中心の生活からギアチェンジし、宗教と歴史を学び始めたタイミングだったので、講師の先生方と学びの内容が非常に魅力的だった。特に島菌先生のような大変な碩学から、1年を通じさまざまな切り口でのお話を伺えたことはこの上ない幸運だった。資料も充実しており、今後学びを深めていく上で大いに参考になるものである。最終講義で、「宗教とは何か」という質問に、先生が「手を合わせる（祈る）こと、救いを求め目に見えないものを尊ぶ気持ち」と端的に答えられたが、まさにそういうことと感じ入った。

また、自身ではとてもアクセスできそうにない西谷修さん、新進気鋭の古田徹也さんの講義も素晴らしかった。これまで経験のなかった「哲学対話」体験や受講生の皆さんの知的好奇心の旺盛さにも多くの刺激を受けた。

哲学と宗教は切っても切れないもの、と考えているが、その思いが1年を通じてさらに深まった。講座を企画・運営してくださった委員の皆さんと事務局の小暮さん、どうもありがとうございました。

哲学とは、立ち止まって考えること。**只井信子**

「ゆっくり生きよう～暮らしの中の哲学・宗教～」のタイトルに惹かれたのと、島菌先生がメイン講師と知り、本講座を取りました。そして、1年経って、本当にこの講座を取って良かったと思っています。

「宗教」「死生観」「グリーフケア」「戦争」「平和」「現代の生命科学」「政治と宗教」「国家神道」……。この1年間で、さまざまなことを学びました。これらについて、これまで、新聞などのメディア等で気にはしつつも、深くは考えてこなかったように思います。本講座で気付かされたことは多く、発見の連続でした。

心に残ったことを幾つか挙げてみると、

- ・「弔いの儀礼」で琉球弧の葬送歌では、必ず死者の名前を呼び、泣き、語りかける。柳田國男の指摘「声を立てることこそナクこと」。また韓国では、悲しみに浸る時、声を出して泣くという。
- ・西谷先生の「戦争」の話の中で、アメリカが、9.11以後、テロとの戦いに向けて世界の「主権者」となったことで、世界秩序の原則が失われたという件。
- ・「脳死」は人の死か？日本人の考え方では、「脳死」を人の死とせず、「身体」や「心臓」にこそ人の生命の座があるという。「脳」を人の生命の座とする西洋的な考え方との違い。
- ・生命倫理の話の中で、日本では世界に先んじて「中絶」が容認されたという件。
- ・中村先生の「恋愛哲学」での「純粹恋愛」論。等

哲学と聞いて、つい構えてしまうことが多いです。でも、今回このコースをとって、哲学は、どこにでも転がっている事象を、立ち止まって考えてみるのだと思いました。これからも、こうして、ゆっくり物事を考える時間を持っていきたいと思っています。

最後にバイオリン独奏の時間にも感謝です。

三鷹市民大学を受講して

E.D.

初めての受講で戸惑うこともありましたが、楽しい時間を過ごさせていただきました。

講師の先生の講義は無論のこと、学習生の講義への質疑や自主学習日の対話も、興味深く刺激を受けました。講座をきっかけに哲学や宗教に関する本を読み、水俣病やグリーンケアを扱う映画を観ました。ひとつひとつが種となって私の中に入っていました。それらがふとした瞬間につながり結びついて芽吹き、ひとつの考えに至ることがありました。草花の芽が土から顔を出したような、何かを突き抜けたような興奮と喜びをもたらしてくれました。

このような有意義な時間を過ごさせていただいたことに深く感謝いたします。

講座を終えて

Y.T.

「ゆっくり生きよう～」と言うサブタイトルに惹かれ、軽い気持ちで受講に臨みましたが、講義をされる錚々たる先生方のお顔触れや受講生の方々の知識の高さ深さに驚嘆し、リタイヤもあり得るかもしれないと言う一抹の不安を抱えながらの毎回の参加でした。しかし、自分の今まで触れてこなかった哲学、宗教、社会情勢など難解な回も重ねるなかで、聞くこと、知ること、考えること、学ぶと言うことは若い学生だけのものではないと、生涯学習の意味を改めて理解し、学生時代を彷彿させる有意義な時間となりました。

哲学対話など、全く初めての経験でしたが、今まで何となく…で理解していた物事を突き詰める面白さ、難しさ、また最近では、余生は自分の愛好する趣味や友人がいれば平穏な人生を送れるものだと確信しておりましたが、講義を受ける中で目を背けてはいけないう厳しい社会情勢など性別も年齢も環境も異なる方々とのディスカッションを通して実在することを痛感し、ニュースに耳を傾ける機会も増えました。

今回の市民大学の受講により哲学や宗教、世界情勢に興味湧き、それが枝葉の様に視野を広げていくことで、余生にも彩りを添えてくれるのではないかと思います。

そんな機会を与えて下さった運営に携わる皆様、受講生の皆様に感謝の念が絶えません。ありがとうございました。

学びあう

日置敏子

年を重ねる事の哀しみに様々な別れがあります。生きとし生けるものの命の限りを身近に触れた時、さらに地球温暖のもと繰り返す災害の前でなすすべのない人間の無力さを思い知る時、それでも人は何故無慈悲に殺し合い、自然を破壊する戦いをするのかと心が痛みます。不安や怒り、絶望や悲哀の日々にいきづらさを感じてました。

「哲学・宗教」 空回りし自閉的になりがちな私に、ゆっくり見つめなおす時間と場所がこの学びから得られる予感がありました。

どの講座も癒しのような楽しいひとりで、回を重ねるごとに資料を読み返したり、新たな疑問がわいたり、気持ちに余裕が生まれました。特に島菌先生の静かな説得力のある語りはとてもよく理解できました。広汎な知識は、求めていた前を向く力や悩みの核から逃げない勇気など、大切な気づきの機会でした。人たる苦しみや弱さと同時に人たる想像力により他と共感し寄り添えるやさしさ。

お話された言葉から受け取れました。

生かされている命を改めて実感し感謝し、学びながらも少し頑張れそうかなと思いはじめてます。

共に学び会った皆さんに感謝しています。

「毎日流れゆく『暮らし』の中でちょっと足を止め、少しずつ考える動機にして行きたい」と企画して下さったこのコース内容はとても濃密で毎回心に響くものがありました。

素晴らしい講義に参加できたこと、普段自分では手に取らないであろう本を読めたこと、観られないであろう動画を観られたこと、聴けなかったであろう演奏を間近で聴けたことはとても貴重な体験でした。

今まで「哲学」とは無縁でしたので、哲学用語を理解しようと混沌とした中、度々辞書を引くも…

ひとつひとつの言葉の波が、さざなみが、緩やかに寄せてきて、段々その波が荒くなり、いつの間にか大波になって… 大波がザバーン！と崩れて… 言葉が飛沫と共に空中に飛び散るように、私の思考も拡散して白くなり、あれ？！今自分は何を探し求めていたのだけ？！と発端が分からなくなってしまう始末になること多々でした。特にワイトゲンシュタイン編では（笑）。

ですが、目には見えない「何か」は確実に私の一部になっていると感じています。

自主学習でも年齢層幅広い学習生達から沢山の気づきを頂きました。「名は体を現すというようにその人が発する言葉はその人の体を現しているように思うのよね」。「死ぬまで生きるのが死ぬということ」など座右の銘にしたくなるような蘊蓄のあるお言葉も沢山頂きました。

このコースでは、これからの人生を慈しんでいく為の種を沢山蒔いて頂いたように思います。

末筆になりましたが、今回学びの場を下さった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

①『現代世界の宗教と公共空間』（1月～）政治の宗教利用と政治的宗教勢力の伸長について。

トランプとキリスト教原理主義、プーチンとロシア正教会、イスラム教原理主義勢力によるアフガニスタンやイラン等での人民弾圧、今のイスラエルの地は神がユダヤ民族に与えた約束の地だとして（様々な辛い歴史的経過があったにせよ）パレスチナ人を追放、難民化させ虐殺も辞さない現在。寛容性のない宗教と権力の結合は怖い。

日本ではどうか？自民政治家と統一教会の恥ずかしい程節操のない関係。選択的夫婦別姓の法制化（世論調査では7割以上が賛成）に頑なに反対している自民政治家達の背景にあるものは？男系による万世一系の天皇制での家父長的体制や戦前の神権的国体論への郷愁か？かつての安倍政権の閣僚の大半は国家神道復興を目指す神社本庁や日本会議、神道政治連盟に接近していた。今は？

②『京都学派の哲学』（11月10日）自我とは西洋では一般的に行動や思考の主体となるものと考えているが、西田哲学では「自己は事柄の生起を受けとる場所」であり、「私が聞く」というより「聞こえてくるものを受けとる場所」「無限に大きな広がりとしての自己は有を含んだ無でもある」という。共感する。露天の湯でひとり星空を眺めている時など、悠久の時間の中に自分が吸いこまれていきそこに「自我」は無くなり、むしろ自我から解放された自由な感覚になる。1月19日のキャロル・サックさんの歌とハーブも、聞こえてくる優しい調べに、固まった自我がふと溶けだすのだろう。（入手困難だった番組映像をキャロルさん本人から借りて下さった事務局の小暮さんの努力に感謝します。）

人は、時に理不尽と思える別れに接し、絶望的な悲しみ、喪失感に襲われることがあります。
 どうしたら悲しみを癒すことが出来るのか。
 哲学や宗教が救ってくれるのではないか、その方法を知りたいといった気持ちで受講しました。
 哲学や宗教が誰かを救うのではない。
 哲学や宗教という真理は、そこにいる、そこにあるだけ。
 そこに人は自分なりに様々な解釈をして自分で自分を癒していくのだと思いました。
 哲学や宗教は言葉であり、教えであり、人であり、芸術であり、様々な姿を変えて存在するのでしょう。
 目には見えないけれども、感じる何かスピリチュアルなものに自分を投影し、
 自分を形作り、感情、情動、気分などといったところと呼ばれるものを認識していく。
 その過程で癒しが生まれてくるのでしょうか。
 講義を終えてそんなことを考えました。

ミンナニデクノボートヨバレ
 ホメラレモセズ
 クニモサレズ
 サウイフモノニ
 ワタシハナリタイ

最後の講義で島蘭先生がお話された宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩が一層こころに沁みました。
 今回、島蘭先生の貴重なお話を1年通して拝聴することができたこと、先生の優しいお人柄に触れられたことは私の人生の財産です。
 大変ありがたい機会をいただきましてありがとうございました。
 市民大学を運営されている事務局の皆さま、一緒に学び、様々な考えを交わした皆さまにも感謝の気持ちでいっぱいです。
 ありがとうございました。

哲学講座を受講して

S.Y.

今回初めて市民大学に参加しました。今まで哲学についてはどういうものなんだろうと興味はあったものの、全くの無知で、初めは参加して大丈夫だったかなと不安でした。ですが、どの講師の先生も親しみやすく、無知の中でも響くものがたくさんありました。これまで全く考えてこなかったことを考えるきっかけを与えてもらいました。参加されている皆さんとも哲学対話を通して少し距離が縮まったり、自分とは違った考えを受け入れることの大切さを学ばせてもらいました。私が受講している間は子供を保育に預けて居ましたが、子供もこの1年で先生たちとの距離が縮まり、保育を通しての成長もたくさん感じました。先生方にも感謝しています。私自身も子供と少しの時間ですが離れて、全く育児家事とは違う作業をするというのがこれまでありませんでした。この市民大学を通して幅広い世代の方との交流にも繋がり、とても貴重な時間だったと感じます。1年間ありがとうございました。

受講感想

B.F.

昨年3月、再雇用が終了しました。

妻曰く「お父さん、これから毎日どうするの？お邪魔虫やるわけ？」「三鷹市セミナーがあるけど、応募してみない？」

確かに毎日をどうするか考えねばならないなと思っていたところだったので、これ幸いにと応募したところ抽選が当たりました。

「哲学、宗教」セミナーを選んだのは島菌先生が講義の中心だった事、私自身が寺の生まれで宗教（仏教）に関心があった事等によります。

セミナーに参加して、少し違和感が有りました。講師が話をし、受講生が聴き入るといふ教室の様なイメージを持っていたのですが、全く違って、自主学習やら哲学対話やらビデオ鑑賞やら思っていた事とはかなり異なっていました。何回か受講して、段々と慣れてきたのでしょうか。なかなかこのセミナー面白いかもしれないなあとと思う様になりました。

島菌先生が近代から現代までの宗教事情を語る時の自信に満ちた(?)表情には感服いたしました。

青木新門さんのビデオにはいたく感動しました。もう一度観たくて、渡辺さんに借用して家で観て、さらに感動しました。

ソロのバイオリンコンサートにも、いたく感動しました。

落語家の様な話ぶりの恋愛哲学講義には爆笑しました。

そのほかにも色々充実したところが沢山あって、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。

このセミナーを運営していただいた渡辺様、天野様、小暮様等関係者の皆様有難うございました。受講されました皆様方、お世話になりました。

考えるを楽しむ

K.Y.

長いサラリーマン生活の中で、最も長時間従事していた職種がカウンセラーだったワタシにとって、哲学とは憧れの先輩、または秘密の花園的な立ち位置にある。

ワタシは心理学の親は哲学だと信じているので、カウンセラーとしても未熟なワタシが哲学を学ぶなんて恐れ多いにも程がある、身の程知らずの乱行という思いがあった。

そんなワタシも定年を迎え、そろそろ世間様にも迷惑のかからない立場になり、ひょんなことから今回の講義に参加することになった。聞けば希望者は多くかなりの幸運であった由、ワタシよりもっとちゃんとした意識のある希望者の方々に申し訳なく、ここは頑張って皆勤賞を狙ってと意気込んでみたものの、旅行やら体調不良やらおつきあいやらでそこそこ欠席し、重ねて申し訳ないと思っている。思っているのだが、できれば来年もと欲深く思ってしまう。それほど講義は刺激的で興味深く、今夜の夕飯の買い物をしながら、知の巨人達の金言を反芻する幸せな時間を何度となく味合うことができたからだ。正直先生方の講義の内容をどれほどワタシが理解しているかは甚だ謎ではある。だが何か一つでも（たまにそれ以上あったことを信じたい）ワタシの生活や人生の指標に巡り会えたことは本当にありがたい。今はココロにある「？」について考えることをこれからも楽しんでいきたいと思っている。

哲学コースは5年目になりますが、毎年、哲学と他の分野の共通領域を捜すようなコース企画で実施されてます。昨年の「哲学+文化芸術」に引き続き、今年は「哲学+宗教」でした。著名な宗教学者の島藺進先生に講義を頂きました。トピックスとしては、1. 現代人と宗教、2. グリーフケアと日本人の死生観、3. 現代生命科学と倫理、4. 現代世界の宗教と公共空間でした。

ことしの大きな成果は、自主学習の“深まり”でした。先生の講義内容に沿ったビデオ教材を捜し、「心の時代 (NHK)」シリーズの中から上記トピックに近い内容の物を1時間視聴し、1時間議論をすると言うものです。哲学対話を取り入れた成果もあってか、自分の意見だけを主張するような議論ではなく、相手の言う事を良く聞いて理解する姿勢が貫かれました。講義の内容と具体的なビデオ内容から色々な事柄を自分なりに考えた上で意見交換し、個々人が答えを見つけて行くと言う空間になりました。私自身は、ハイデガーの「死の先駆」がなかなか理解できなかったのですが、宗教の死生観やグリーフケアを理解するうちに、“死ぬこととは死の瞬間の事ではなく、「死ぬまで生きる」事なんだ”と理解できました。どんなタイミングに於いても、そこから死ぬまで生きるという事の本質が私なりに見え、今後の生きる縁 (よすが) となりました。

来年は「ことば」との共通領域へと発展し、益々面白くなりそうです。

最後になりますが、難しい宗教をかみ砕いてお教え下さった島藺先生と、我々受講生や運営委員の要望をご理解され最大限のサポートをして下さった事務局の方にも大いなる感謝を申し上げます。

日本の近現代の戦争を学び直し、 平和を守るとは何かを考える

講師：山田 朗
(明治大学文学部教授)



戦争の歴史から何を学んだら良いのか

講師 山田 朗

総合コース(歴史)では、「日本の近現代の戦争を学び直し、平和とは何かを考える」というテーマで、明治以降の日本の対外戦争の「なぜ?」について検討しました。

近代日本は、明治維新直後から「ロシア脅威論」に基づいて軍備拡張を行ない、なるべく日本の外側に勢力を張り出していこうという対外膨張戦略をとりました。その結果、日清戦争と日露戦争が起きましたが、日本は当時の世界の超大国であるイギリスと接近、さらには軍事同盟を結ぶことでこれらの戦争を乗り切ります。日本に植民地支配をもたらしたこの二つの戦争は、当時の多くの日本人に「成功事例」と捉えられ、日本はさらなる膨張戦略をとることになります。とりわけ日露戦争後、日本はロシアとアメリカ合衆国という世界最大の陸軍国と海軍国を同時に「仮想敵」とするという、あまりにも自らの力を過大評価した軍事路線を歩み始めるのです。

また、昭和期になり、日本陸軍の一出先機関である関東軍が満州事変を起こし、さらに「満洲国」を作るという「力による現状変更」が成功すると、これを新たな「成功事例」とみなして、日中戦争へと進み、それが解決できなくなると、中国を支援する英米仏ソなどの諸国に圧力をかけるために日独伊三国同盟を結び、結局は世界を敵に回した未曾有の大戦争に踏み込みました。

現在から見ると、無謀とも思えるこの国家戦略を、なぜその当時は可能だと考えたのか。日清・日露・満州事変といった「成功事例」による拘束と、これら「成功事例」は何故にもたらされたのかを洞察できなかった当時の日本の国家指導者たちのあり方について、参加者の皆様と共に大いに考えることができた1年間でした。また、歴史から汲み取った知識をどのように知恵として深め、現代に生きる私たちがどのように生かしたら良いのか、そういった機会になれたとしたならば、講師としては嬉しい限りです。

プロフィール

やまだ あきら
山田 朗さん



1956年、大阪府生まれ。明治大学文学部教授、平和教育登戸研究所資料館長、専攻は日本近現代史。主な著書として、『大元帥・昭和天皇』（新日本出版社、1994年、ちくま学芸文庫、2020年）、『軍備拡張の近代史』（吉川弘文館、1997年）、『日本は過去とどう向き合ってきたか』（高文研、2013年）、『兵士たちの戦場』（岩波書店、2015年）、『帝銀事件と日本の秘密戦』（新日本出版社、2020年）、『軍事力で平和は守れるのか』（岩波書店、2023年、共著）などがある。

フェスティバル展示



●カリキュラム

| 回 | 日付 | 講義名 学 習 内 容 | 講 師 |
|----|--------|---|------------------------------------|
| 1 | 5月12日 | 開講式・オリエンテーション | 自主学習 |
| | | 企画委員から当コースを企画した趣旨について説明。当コースを選んだ理由など学習生全員の自己紹介。そのあと運営委員・編集委員の役割などを説明し、運営委員5名、編集委員2名を選出。 | |
| 2 | 5月19日 | 市民が歴史を学ぶ意義 近現代日本の安全保障とこれからの方向性 | 「おじさんたちの歴史研究会」 丸山淳一さん |
| | | なぜ歴史を学ぶのか、それは歴史を学ぶことで今を知り未来のことが考えられるから。日本が目指すべきはこれまで築いてきた平和国家のブランドに沿った防衛、国際協力、外交を展開することである。 | |
| 3 | 5月26日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | | 4グループに分かれて歴史を学ぶ意義、自主学習日の学習内容をどうするかについて討議。その後全員でフェスティバルの行事内容を映像で確認し、当コースもフェスティバルに展示参加することを決定。 | |
| 4 | 6月2日 | 核兵器のない世界に向け私たち市民が果たす役割～ ICANの現場から～ | ピースボートインターナショナル コーディネーター 渡辺里香さん |
| | | 国連とともに持続可能な世界実現のための様々な取り組みを紹介。特にICANと繋がって核兵器の廃絶をアピール。大事なものは戦争・異常気象・パンデミックからの人間の安全保障である。 | |
| 5 | 6月9日 | 近代日本は何のために戦争をしたのか？ | 明治大学文学部教授 山田 朗さん |
| | | 日清戦争は利益線(朝鮮半島)確保のための戦争であり、日露戦争はロシア南下の日本の脅威を英国が利用した戦争であった。日清・日露戦争の間、一次大戦後、二次大戦前の軍事費は国家予算の40～50%を占めていた。 | |
| 6 | 6月16日 | いまなぜ民藝か日韓関係をどう見るか？歴史認識の克服と和解のための10のキーワード | 一橋大学大学院法学研究科准教授 クォン・ヨンソクさん |
| | | 日本は朝鮮半島を戦場にして併合し、理不尽な植民地支配を行った事実を自覚することである。そのうえで、日韓両国は今後「求同存異(違いを認め共同の利益を追求する)」に努めることが肝要である。 | |
| 7 | 6月23日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | | 三上智恵監督のドキュメンタリー「沖縄、再び戦場へ」を鑑賞。そのあと4グループに分かれて軍備増強に反対闘争する沖縄・南西諸島の現実をマスコミがなぜ報じないのかなどを討議。 | |
| 8 | 6月30日 | 中国との戦争はなぜ忘れられているのか？ | 山田 朗さん |
| | | 日中戦争が知られていないのは、日本軍の略奪・虐殺・性暴力・化学兵器の使用の漏洩が禁圧されたからである。日中戦争とウクライナ戦争は軍事大国の侵略、世界の分断という面で酷似している。 | |
| 9 | 7月7日 | 中国との向き合い方一日中平和友好条約締結45周年を節目に考える | 東京大学大学院総合文化研究科教授 阿古智子さん |
| | | 習近平政権の中国は国家の安全が最優先事項であり、権威・思想教育の強化、市民の言論弾圧・行動制約が一段と強化されている。不正義には必ず抵抗があり長続きしないとされるが、どうなっていくのか。 | |
| 10 | 7月14日 | 三国同盟は何のために結んだのか？ | 山田 朗さん |
| | | 三国同盟は、日中戦争と欧州戦争に不参加の国から加盟国が攻撃された時に相互援助を約したもので、日本側からすれば東南アジアの英仏蘭葡の植民地の確保と米国に圧力をかけることを狙ったものである。 | |
| 11 | 9月15日 | 台湾有事のリスクと日本の課題 | 明海大学外国学部教授 小谷哲男さん |
| | | 国際政治学的解析からみれば、退路なき習近平が台湾併合を実行する可能性は極めて高いと考えられる。日本は、力による現状の変更は許さないという国際的な共通認識で抑止力を強化していくしかない。 | |
| 12 | 9月22日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | | 世界で初めて放射性廃棄物が最終処理されるフィンランドの地層処分場オンカロ(10万年間保持)のドキュメンタリーを鑑賞。その後4グループに分かれて意見交換。 | |
| 13 | 9月29日 | なぜ日本は英米と戦争することになったのか？ | 山田 朗さん |
| | | 日本が英米と戦争になったのはドイツを過信したからである。その過信は突然の独ソ開戦以降も変わらず、長期戦になると不利になることも資源確保につれ有利になると、天皇まで説得するありさまであった。 | |
| 14 | 10月6日 | 教育現場で何が起きているのか | 武蔵大学人文学部教授 大内裕和さん |
| | | 軍事費の増額は、国内的には間違いなく社会福祉のカットと増税がセットで進められること、そして対外的には中国との関係悪化が日本経済に大打撃を与えることなどをとくと認識する必要がある。 | |
| 15 | 10月13日 | 【公開講座】現代日本の教育と政治 | 現代教育行政研究会代表 前川喜平さん |
| | 10月14日 | 【公開講座】アジアにおける平和と共生 | 青山学院大学名誉教授 羽場久美子さん |

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|----|---|---|---------------------------------------|
| | 学習内容 | | |
| 16 | 10月20日 | 防衛費増強に動く日本の現状と問題 | ジャーナリスト 斎藤貴男さん |
| | 日本が中国と戦争しなければならない理由はない。それなのに台湾有事だとして日本が軍事力を拡大しているのは、米国の世界戦略である対中戦略の別動隊として日本が隷属しているからである。 | | |
| 17 | 10月27日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | フェスティバルの展示に向けての掲載内容について、「日本が関わった近現代の戦争からの学び」のグループと、「平和を守るとは何かを考える」グループに分かれて意見交換を行った。 | | |
| 18 | 11月10日 | 戦争はなぜもっと早く終わらなかったのか？ | 山田 朗さん |
| | 敗戦の大勢が決し、頼みにしていたドイツが降伏しても戦争の終結が遅れたのは、政府・軍部の指導者達が国体護持にこだわって無条件降伏の受諾を黙殺するなど、決定責任を回避し続けたからである。 | | |
| 19 | 11月17日 | 生涯学習センターフェスティバル準備① | 自主学習 |
| | 2グループに分かれてどのような内容の展示物にするかを討議。視覚的に訴える写真やその枚数の確認とともに、これまでの学びを通じて考えていることなどを各自が次回に持ち寄ることに。 | | |
| 20 | 11月24日 | 生涯学習センターフェスティバル準備② 開催日：12/ 2(土)・3(日) | 自主学習 |
| | 2グループに分かれて、前回の討議を通じて持ち寄った写真やメッセージを模造紙に張り付けたり、手書きをすることによって「学びと討議の成果」としての展示物を完成させた。 | | |
| 21 | 12月 8日 | 沖縄戦と松代大本営とは何だったのか？ | 山田 朗さん |
| | 戦争末期、本土決戦に備えて国体護持のために松代大本営の建設が強行された。沖縄戦は、その完成の時間稼ぎで戦線が長期化することになり、結果として沖縄に甚大な犠牲を強いることになった。 | | |
| 22 | 12月15日 | 看護婦たちはどのように戦争に動員され、何を体験したのか | 日本赤十字看護大学看護学部教授 川原由佳里さん |
| | 赤十字看護婦の身分は卒(兵)であり軍属となるも非戦闘員である。しかし、戦地では赤十字条約は守られず病院は攻撃の対象となり、看護婦も身分を隠して軍と行動し自決も覚悟する惨状であった。 | | |
| 23 | 1月12日 | 日本の秘密戦と登戸研究所 | 山田 朗さん |
| | 秘密戦とは、防諜、諜報、謀略、宣伝のための毒ガス等の化学戦であり、細菌等の生物戦であり、スパイ・テロ等の非合法的な戦いのことである。登戸研究所は日本の秘密戦の兵器や資材の研究を担っていた。 | | |
| 24 | 1月19日 | ロシアのウクライナ侵略と日本 | 朝日新聞論説委員 駒木明義さん |
| | プーチンの頭の中：ウクライナが非ナチ化・非武装化・非中立化にならない限り停戦はあっても戦争はやめない。ロシアにとってオホーツク海域は軍事的に重要であり、北方領土の日本への返還などあり得ない。 | | |
| 25 | 1月26日 | 自主学習 | 登戸研究所見学(自主学習) |
| | 山田先生に案内していただき明治大学生田校舎内の登戸研究所資料館、神社、動物慰霊碑、弾薬庫跡など見学する。 | | |
| 26 | 2月 2日 | 子どもの権利と教育の民主主義 | 放送大学千葉学習センター所長 片岡洋子さん |
| | 身の回りで起こる問題を身近な人々と話し合ったり考えたりして解決することを実践するのが民主主義の精神であり、またすべての子どもを差別せず権利は保証されなくてはならない。 | | |
| 27 | 2月 9日 | 国際連盟・国際連合と世界平和 | 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 篠原初枝さん |
| | 国際連合は紛争解決に有効な組織とはいえないが、人道主義を体現し平和な世界の構築に向けて斬新的に活動している。国際連合がなかったら世界はもっと暗黒であろう。 | | |
| 28 | 2月16日 | 自主学習 | 戦争体験者の三鷹市在住 中館文子さん(自主学習) |
| | 戦争体験談を聞いたあとで、この講座を受けての感想発表をする。 | | |
| 29 | 3月 1日 | 戦争と教育(戦争を学び直し平和を守るとは) | 東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター教授 大森直樹さん |
| | 戦後日本の教育界は戦争と教育の事実から何を引き出すのに成功し、何を引き出すのに失敗してきたのかを1951年に出されたスローガンから読み解いた。 | | |
| 30 | 3月 8日 | 軍備拡張は平和をもたらすのか？ | 山田 朗さん |
| | 憲法9条を支えてきた平和主義の土台の継承と軍拡の実態を多くの市民が知る必要性。そして隣国との付き合い方に知恵を絞り憲法の原点に立つ平和外交の展開を望む。 | | |

日本「近現代史」の学び直しを糧に、次世代に平和な未来を届けたい 石黒紀子

「歴史コース」のメイン講師に、山田朗先生を迎えることができ主軸がしっかり安定化。

コース名「日本の近現代史を学び直し、平和を守るとは何かを考える」を企画委員の総意で掲げた。プログラム企画中に「ロシアの突然のウクライナ侵攻」、武力による戦争が始まった。その後、イスラエルによるガザへの攻撃、過酷なジェノサイドが続いている。

山田先生による8回の講義は、まさに過去の負の歴史に学び、平和を構築するためのプログラム。「近代日本は何のために戦争をしたのか？」に始まり、「軍備拡張は平和をもたらすのか？」までを、巨視的かつ微視的に学び直す機会となった。

しかしながら、いま日本の政治状況は“平和憲法9条”に逆行し、軍備拡張路線を直走りで平和志向からほど遠い。

自主学習の1月26日は、「明治大学平和教育登戸研究所資料館」を訪ねる見学会。案内役は館長である山田朗先生が来てくださった。参加者21名は、緑豊かな広い敷地にある登戸研究所に参集。研究所は、戦前日本の戦争・軍隊を知る上で、きわめて貴重な戦争遺跡のひとつ。一般に知らされることのなかった戦争の秘密の側面、暗部を貴重な展示物から知ることができた。特に、アメリカを攻撃する「風船爆弾」、和紙とこんにゃく糊で作られた実物を目にした時は、日本軍の愚かさに驚愕させられた。

明治維新、その後の“脱亜入欧”一色の日本は、欧米の植民地主義を倣っている。当時、戦争に加担させられた庶民の多くは無知のまま「愛国教育」に翻弄されてきた。改めて主権者は私たち市民であることを自覚、微力でも出来ることから実践したい。

ゲストの講師陣は多彩で充実そのもの、其々記すことができないのは残念至極。共に学んだ学習生の皆さま、担当のSさま、充実した学びの機会を感謝いたします。

歴史コース受講メモ（本稿提出日までの）

大井茂光

2022年度経済受講メモ（あゆみ2022年、61頁）で、日本のCO₂排出（気候変動）、生産年齢人口の減少の最大の阻害要因を、日本人のメンタル（官僚制）に求めました。この阻害要因が、最初に日本史とつながったのは、以下の二冊の本を読んでからです。権威者と権力者は異なりまた政治と倫理は区別される。前者は、ちょっとした規模の同族会社の社長が役職名ばかりで、経営の実権は、同族でない専務が握っているような場合、また、専務グループは営業を、常務グループが製造を仕切るような、社内に複数の実力者がいる状況です。後者は、政治（例えば会社の）とは、前述の実力者間の利益分配と調整が主な役割であり、本来会社内外の（例えば株主、従業員、消費者等の）現・将来利害関係者に提示すべき、理想として目指す政策（経営）の前提とする考え方などは、軽視される。…（与那覇潤・中国化する日本、増補版62頁参考）明治以降の日本史を見ていくと、あれこれ、当てはまることばかりだと思われま。

また、日本人には、すでに起こってしまったことに対して、起こってしまったことを前提に全体を前に進めようとして、原則に戻らず原則を崩す面もあります。（安富歩・満州暴走 隠された構造 .92頁参考）。安富先生の師匠の森嶋先生のお話です。1941年12月8日アジア太平洋戦争開戦、1941年12月5日ドイツ国防軍モスクワ近郊より退却開始、以降、日本の敗戦までの、経過を見れば、これも明らかです。（半藤一利編・解説・なぜ必敗の戦争を始めたのか .196頁 297頁参考）

以上を支えたシステムは、今でも見受けられ（野口悠紀雄・1940年体制 .増補版参考）、構造的衰退国家（ジム・ロジャーズ・捨てられる日本 .28頁参考）回避の道筋は、見えていません。

受講を終えて

伊藤 譲治

この一年を振り返って見ますと講師の皆様方の話は大変勉強になりました。
中館文子氏の体験談も貴重なお話しでした。
又、登戸研究所の見学会も大変参考になりました。
戦争とは悲惨な結末になる訳だが世界各地で勃発しているのが現状で残念でなりません。
早期の和解を願っております。
この企画を施行された、担当職員の斉藤さんと運営委員の方々に感謝を申し上げます。

講座を終えて

伊藤 千鶴子

長い間携わってきた国家公務員の仕事を終えて、これまで関わることのなかった地域社会の活動に目を向ける余裕ができたことをチャンスに、初めて三鷹市が実施している取り組みにチャレンジすることができました。特に、全世界でウクライナ侵攻、アフガン戦争、シリア内戦等々、数え切れない紛争が起きている状況を見るにつけ、何故なのだろうという思いを強く抱いていた昨今でしたので、歴史コースの中でこの点に焦点を当てて学びたいという思いで参加いたしました。

多様なカリキュラムを学ぶ中で、果てしない堂々巡りの日々でしたが、いただいたご講義を糧に、改めて平和への希求を忘れずに、その実現のために貢献したいという思いを尚一層強く抱くことができました。

特に、登戸研究所資料館の見学は有意義でした。原爆を持つ国に対して、風船爆弾で対峙しようとしていた我が国のことを初めて知り、ただ驚愕の一言でした。この間に多くの先生方のご講義をいただき、厚く御礼申し上げます。いただきましたご講義を受け、平和の実現のために貢献したいという思いをなお一層強く抱いたところです。

この一年ご指導いただいた各先生方、また運営にご尽力いただいた三鷹市の職員の方々に心から感謝いたします。

やっと戦後史の一步に近づいた！

S.O.

21世紀に入って20余年。今世界をみまわせばロシアのウクライナ侵攻、イスラエルとハマスの激しい戦争の惨状があふれている。いつ、どうやったら戦争は終結するのだろうか。平和な世界を構築するために、個人の力はいかに微弱なものなのか？ 焦燥にかられながら1年間、講義を聞き学ぶ時を頂いた。

山田先生の第二次戦争前後の様々な資料の精読と緻密な解説によって（学校時代に学ぶ機会がなかった）大日本帝国の軍隊の作戦や、国家の動静、天皇の係わり等ようやく、微かではあるが理解できてきた。

又、登戸研究所で目にした数々の遺品、特に紙風船爆弾のような荒唐無稽な物体を目の当たりにして呆然とした。これで本気で戦うつもりであったのか。これを作っていた女学生達はどのような思いであったのか!?

私たち国民はいかに目隠しされてきたのか、今改めて自分の目で社会をみる力を育てることの大切さを思う。小さくともその1人1人の平和を希う力がまとまることが肝要である。学びの1年間であった。感謝!!

日本の近現代史を学んで思ったこと

大野結美

歴史の勉強といえばテスト前に必死に年号や出来事を丸暗記するのみで、その時代背景や時代の流れ、また他の国との関わりなどについては全く関心もなく過ごしてきてしまい、今の世界情勢を見るときちんと戦前、戦後から学び直さなくてはいけないと思っていたところこの講座を知り受講しました。

毎回とても充実した講義内容で、またわかりやすく歴史への興味が深まりました。特にメイン講師の山田朗先生の講義は資料もわかりやすくコンパクトであるだけでなく資料の抜粋文から戦争中の価値観、倫理観が読み取れて戦争中の異常さを際立たせてくれました。当時の軍部のありようが資料からうかがい知ることができるのはありがたいことだと思います。どんなことでもきちんと全て記録しておくことが後々のためになる見本だと実感しました。

今回受講して一番強く感じたことは、

1. 戦争には見えない裏側、水面下の部分があり戦争をしたい人々はそれを目立たないようにして、戦争を正当化するのが上手い。
2. 戦争は「勝利」のためには手段を選ばなくなる。残虐兵器の使用の歯止めが効かなくなる。
3. 平時の価値観や倫理観が崩れて異常な判断がまかり通ってしまう。

日本は今のところ平和に毎日暮らしているが、米軍基地はなくならないし、軍事費はどんどん増えてなし崩し的に軍備増強していてぞろぞろ怖い気がします。

これからも世界情勢、日本の選択に関心を持ち自分の頭で考えて行動できるようにしていきたいです。

歴史を学んで、その後は？

K.O.

「日本人は古代史コンプレックスのために歴史を歪曲し、韓国人は近代史コンプレックスのせいで日本文化を無視する」←思わず吹き出してしまったゲスト講師クォン・ヨンソク氏が紹介してくれた「私の文化遺産踏査記日本編」からの引用文。でも笑ってばかりもいられない。歴史認識の違いが国交問題になっているんだから。

そして日本側としては近代史を歪曲しているのは事実で、植民地時代については私たちにも蓋をしっぱなしでことを済ませたいと思っているのだから。

相手がいるところでの知らぬ存ぜぬはあり得ないと思うのだが。

拉致問題が浮上した時もびっくりしたけど、もちろん拉致がいいわけじゃないけど、日本が植民地時代にしたことを棚上げしたままで、北朝鮮に対する非難をしたことに対してあり得ないと思ってたのに、思いの外そのことは俎上に上がらず、北朝鮮バッシングだけは強まった。メディアの力？そのことにいまだに納得いかない私なのだが、それはともかく、今回歴史コースを受講して、歴史を学ぶことの大切さは再認識した。

知ることは大事。でも知った上でどうすべきか。

歴史を歪める輩がいる。そのことによって人権を奪われている人たちがいるとしたら？

軍部の独走がもたらした戦争についても学んだ。軍部の暴走すらあり得る！

今の沖縄での軍拡。崩れた三権分立。

昔はロシア民謡歌ったりして長閑だったけど、戦後の、夢のあるひとときを体験できた我々は未来のためにもう一踏ん張りしないと、と思う日々となっています。

この市民大学を受講した動機は、山田朗教授（先生）の講義を聴きたかったからです。過去に登戸研究所資料館を見学したり、先生の講演に参加したりで、先生のご活躍には興味をもっておりました。

一方、私たちの住む多摩地域は、軍都として発展し、今でも多くの戦争遺跡が存在しています。

このような環境の中、先生を中心とした市民大学が開講されるということで、申し込みをした次第です。

今回の市民大学で先生の講義を受講して一番感じたことは、「学校で今まで学んできた歴史教育は、一体何であったのであろうか？単に、年号と事件名称だけを覚えるに過ぎなかったのではないか。その背景など歴史の本当の中味というものを学ばずに表面だけの、受験教育ではなかったのでは？」ということです。

お陰様で、「なぜ自分たちの親が出兵したのか？」という疑問も、先生の講義で理解できました。

現在も、世界の各地で戦争・紛争が起きていますが、それぞれに、それぞれの文化を含め歴史的にも根深い問題を抱えており、口で言うように容易に解決することは難しいかと思えます。

しかし、戦争で戦っているのは最終的には、「人と人、人間と人間」です。少なくとも軍事力を用いた戦争状態を回避し、例え緊張関係が続く中であっても、人間が巻き添えにならないよう、先ずは外交交渉の段階に落ち着いてくれればと、切に願っています。

平和にと雪解水や世界にも

最後に、先生はじめこの講座の運営にご尽力された方々に、感謝・御礼申し上げますとともに、今後貴市民大学の更なる発展を祈念いたします。

受講を終えて

中学、高校と、歴史が苦手だった。苦手だったというより、全く興味がなかった。そんな私でも社会人になると、なぜ戦争は起こるのか、平和な世の中は来るのか、という事は常日頃から思っていた。5月になると、だんだんと学習意欲も高まり、講義が始まるのが待ち遠しくてたまらなくなっていた。

20回の講義はすべてが満足いく内容だった。印象に残った講師は、メイン講師の山田朗先生、阿古智子先生（平和友好条約締結45周年を節目に考える）、小谷哲男先生（台湾有事のリスクと日本の領土）、川原由佳里先生（看護婦たちはどのように戦争に動員され、何を体験したのか）である。

特に山田朗先生の講義は非常にわかりやすく、すばらしかった。学習生からの質問には100%以上の対応で、まさに圧巻であった。川原先生の従軍看護婦は、個人的には一番興味があり、戦争の悲惨さを物語るには最適の内容だったと思う。戦争史の中では穴であろう従軍看護婦の講義が、このコースに置かれていたのは非常に良かった。

自主学習の見学会として、明治大学生田キャンパス内にある「登戸研究所資料館」に行った。メイン講師の山田先生が館長を務めており、案内をしてくださった。生田まで行くので、学習生の参加人数に不安があったが、21名の参加があり成功したイベントだった。これも山田先生の講義が素晴らしかったこと、そして案内役を申し出ていただけたこと、これが大きな要因だと思う。

関東軍の暴走から始まった日中戦争は、明確な目的も正確な情報も無く、三国同盟を背景にアジア太平洋戦争へと拡大していったという。止める機会が幾度もあったにも関わらず、誤情報、誤認識によって突き進んだ終戦迄の八年間——。フェイクニュースに惑わされ続けた国民、戦い、死んでいった夥しい数の兵士達、生き長らえた後も心の傷に苦しみ続けた帰還兵達、終戦間近、兵員不足を補う為に戦場へと送られた学生達……。原爆投下によってようやく終戦を迎えたアジア太平洋戦争とは、国民にとって何であったのだろうか。

戦後八十年を迎えようとする今、`新しい戦前、が具現化しつつある。政治は教育に介入し、道徳教育の教科化、教育基本法改正による愛国教育、教科書選定への圧力等が行なわれた。防衛予算は今後5年間で43兆円。過去5年間の1.6倍となった。武器輸出三原則は改定され、緩和された。自衛隊の軍隊化や憲法改正も課題となっている。沖縄、奄美大島を含む南西諸島へは、住民の強い反対にも拘らずミサイルや自衛隊の配備が着々と進められている。

本当に「敵」はいるのか。なぜ「敵」であるのか……。平和の為に出来る事は、戦う姿勢＝軍備拡張だけではないはずだ。

さあ、社会の動きをしっかりと見守ってゆこう。おかしな事には異を唱えてゆこう。そして孫達と、ウクライナやガザの惨状を観ながら、戦争とはどういうものか話してゆこう。きっと平和の有難さを理解^{わか}てくれるはずだ。

講座を終えた今、歴史を学ぶ意義とおもしろさを改めて思う。

ゲスト講師の皆様、そして山田先生に、心よりお礼申し上げます。

近現代日本の戦争を学び直して

C.K.

今回の歴史コースは、メディアなどを通して「戦争」という言葉が、これまでにない現実味を帯びて耳に入るようになった昨今、タイムリーな企画だった。留学時代、親しくなった米国人との会話が第二次大戦に及んだ時、無知がたたって沈黙してしまった自分へのリベンジも、受講を決めた動機の一つ。

メイン講師の山田朗先生は、近現代日本の戦争がなぜ、どのように始まり、展開し、終わったのかを世界的視野から学術的資料に基づいて、わかり易く講義され、毎回目から鱗が落ちた。なかでも、ウクライナ戦争と日中戦争との類似性に関する考察は、時機を得た内容で、日々のニュースを見る目が変わった。学習生からの多岐に渡る質問への回答も明快で、さらに学びを深めることができた。圧巻は、ご自身が館長を務められる明治大学登戸研究所資料館の見学で、風船爆弾や偽札造りなど、あまり一般に知られていない史実が、眼に見える形で展示されており、インパクトある体験となった。

単発の授業は、日韓・日中・日露関係から教育まで幅広い内容だったが、中でも戦時中の看護婦の実態を報告された日本赤十字看護大学の川原由佳里先生の講義が興味深かった。また学習生仲間にも、恵まれた。自主学习、フェスティバルの準備作業、講義内容に関する情報交換等、様々な形で活発な交流があった。

一年間の講義を受講し、過去や現在の日本や世界の動きを、より深く理解できるようになり、友人や家族との会話の中身も広がった。だが、自分へのチャレンジは、始まったばかり。日本の近現代の戦争や平和について、自分の言葉で語れるよう研鑽を積みたい。

この講座を企画、運営、サポートして下さった皆さん、そして学びを共にして下さった皆さん、ありがとうございました。

受講後の感想

小林 恵美子

学校で習わなかった知らない戦前戦後を知りたく応募したら運よく参加できた。おもしろかった。

チェンバレンはナチスにどう対応すればよかったのか。ジョージア、クリミアにメルケルは世界はどう対応すればよかったのか。

（'43.2.1 ガダルカナル撤退 '43.5 アッツ島玉砕

'43.2 スターリングラード降服 '43.5 北アフリカ撤退

'43.9.3 イタリア降服）'43.9.30 絶対国防圏とは何だったのか。枢軸利用ならば戦争やめるべきだった。

本土決戦、特攻隊を決定した責任者は天皇か。

なぜ中国等で残虐なことをしたのか。

「沖縄はくれてやる」沖縄戦は本土決戦のミニチュア。

アメリカに一撃を与えアメリカを抑える。イギリスはドイツに降服する。ドイツ頼みの戦争だからドイツの旗色が悪くなったら戦争終了すべき。1943年当時。独敗走。

ウクライナもガザも本土決戦だ。

「戦争に負けてよかった。軍部がなくなった。戦前にもどらない。」

再び教え子を戦場へ送らない。一日教組

登校拒否は学校に「no!」という子供

「国の為生きるつとめを果し得て矢弾尽き果て

散るぞ悲しき」硫黄島全滅 '45.3.22

'45.4.1 沖縄本島上陸 '45.5.7 ドイツ降伏

'45.6.8 御前会議「本土決戦」このバカバカしさ!!一億総玉砕

「はじめから沖縄は沖縄のものなるを

順わせ従わせ殉わせ」

受講を終えて感じたこと

S.K.

明治維新以来、富国強兵のスローガンの下、軍事力の増強により、日清戦争から海外への軍事行動が始まり、太平洋戦争で終焉を迎えた。戦争は人間の義務・道徳心を崩れさせ、勝つ為には「手段」を選ばなくなる。

登戸研究所の見学で、そのことを実感した。それは、旧日本軍により様々な秘密兵器の開発が行なわれ、毒物の人体実験や細菌の散布実験などが実際に使用された事実を目の当りにしたからで、本当に胸が張り裂ける思いがした。

欧州では、大戦について今日まで続く政治や社会への現実問題であり、その原因や責任を問いつける取組みが、国境や時間を越えて話し合われている。具体的には、対立した相手（ドイツとフランス・ポーランド）と共通歴史教科書の作成などが行なわれている。支配者と被支配の関係があった者同士が、歴史を共有しているのである。これは、日本（アジア）にはない違いである。一方、日本では大陸への進出により、後世まで反発や不信感を抱かせたり、日露戦争後になされた韓国併合により、決定的な反感と敵意をもたらしてしまった。これらに対する国の謝罪や反省、また責任の取り方などの姿勢が十分でなかったのではと感じており、欧州との違いには残念でならない。昨今の国も、悪しき慣習を継承(?)しているのではと、思わざるを得ない。

国民へ顔を向けた「真っ当な」政治と「争いのない世の中」の実現を目指して、声を出して行きたい。

21世紀はアジアの時代と言われています。しかしプーチンが仕掛けたウクライナ戦争により様相は一変しました。

経済・軍事大国化した中国と専制国家の弱体化を狙う米国との対立は、台湾併合の問題でアジアの戦場化リスクを高めることになっています。～で始まる歴史コースの企画委員の方の開設主旨がまず気に入りました。

またこれに附随するゲスト講師の的を得た問題意識が並ぶ。

これらを見て読んで講座コース一覧で歴史コースを受講することに即決めました。

歴史の企画委員の皆様のご努力に対し、厚く御礼申し上げます。

三鷹の市民大学は五コースの各先生方からも、評価が非常に高い。三鷹の市民大学が、市民によって企画され、市民によって運営されていること、これらの活動が50年以上に亘って続けられ、講座費はタダ、これらも他の市区町村に対しても大いに誇り得る生涯学習であります。

現在の様に人生100年の時代に入り、益々生涯学習の大事さが、重要さが指摘されている中、このすばらしい市民大学を、これからも続けていって欲しいと願っております。

聴講しながら連想を楽しみ空想に遊びました

山田朗先生の講義は、お話が興味深いだけでなく毎回出されるレジュメは大変参考になりました。例えば、1月12日のレジュメP2の中段でノモンハン事件がでてきました。そこで私の連想は12年ほど前に飛びました。12年前私はハイラルから南へ草原を7時間車で走り、その先にノモンハン事件の記念館がありました。記念館前には1939年の戦闘で破壊された戦車がありました。ジオラマ風の説明がありました。鉄道敷設の準備が進んでいたソ連-モンゴル側に対して、ハイラルからの陸路からの増援・補給に頼る日本側の劣勢は明らかです。ハイラルから1か月以上の行軍の末たどり着いたハルハ河で必死に掘った塹壕をやすやすと越えていくソ連の戦車に対する日本兵の恐怖が目に見えるようでした。

また、1月26日の明治大学平和教育登戸研究所資料館の見学はとても有意義に感じました。資料館に入る前に、かつて11万坪もあった陸軍登戸研究所時代の神社、慰霊碑、食堂付近に残る消火栓などを案内していただきました。山田先生のガイドなしには廻れないコースでした。石井式ろ過筒の現物を見られるとは!？驚きました。もう一つ私が注目したのは「登戸研究所第二課」で研究開発されたという「青酸ニトリル」の話です。

ここから私の連想に入る…私は松本清張さんの「小説帝銀事件」を思い出しました。遅効性青酸カリというものがあり、帝銀事件ではそれが使われたのではないか、という清張さんの推理です。戦後の731-石井部隊や登戸研究所の一部の研究員がGHQと繋がりが有ったとすれば??空想レベルを超えて妄想かな?帝銀事件は20次の再審裁判が継続中と聞きます。

「戦争には見えない裏側があり、勝利のためには手段を択ばなくなり通常の人間の価値観、倫理観を崩壊させる」という山田先生の言葉は重いです。

6月16日のクォン・ヨンソクさんの講義でも連想に引き込まれました。最近、外国の名前表記の際実際の発音に近づける為か?私としては、普通カタカナ表記が多いが日本と韓国の場合漢字を入れていただくと助かるのだけれど。江戸時代、島津藩の船が難破漂流し朝鮮半島に流れ着いた時、島津藩のお役人と李王朝の地方役人の間では漢字の筆記のやり取りで意思疎通ができたと聞きます。その時代を思い返したいと思います。

講義を終えて

S.M.

終戦時幼少でした私は、先の戦争が終った時、国も貧しく又個人も貧しい時でした記憶があります。今度の山田朗先生の講義を受け、霧で見えない又知らない多くの事柄が資料に基づく説明で視界がハッキリし理解しました。

結果的には、日英同盟は成功したものゝ、ドイツを見誤り日独防共協定から日独伊三国同盟へと変化した。国の指導的立場にある人々が正しい情報に基づき誤りのない国策を進めるのに尽きるのではないのでしょうか。

過去の歴史を生かし今後の国の賢明な、そして近未来を展望して誤りのない道を進みたいものです。

翻って今の政治は如何なものでしょうか？近視眼的で日本が米国一辺倒で、隣の大国中国と如何に接していくか見えません。難かしい問題ではありますが地理的には動かせない。故安倍総理の方策がベストと考えます。

今生きている若い方々が日本に生まれて良かったと思われることが年長者の責務ではないでしょうか
終るにあたり素晴らしい先生を選んで頂いた企画委員の方々並びお世話になった事務局の方々にお礼を申し上げます。

日本の近代史を学んで

R.M.

私がこのコースを選んだのは学生時代の歴史授業で近現代史授業が少なかったので再度学びたいと思ったからです。現在ウクライナの戦争が長く続いて世界が二分してそれぞれに援助して終りが見えない。戦争すれば当事国の国民は家を焼かれ命も危ない目に合います。過去の日本の戦争を調べてみると日中戦争が類似していると思われる。第一は国際秩序の維持者による秩序破壊という点である。満州事変まで常任理事国であったが満州国建国を契機に連盟を脱退した。ウクライナ戦争も国連の常任理事国であるロシアによる公然たる侵略で国際秩序を維持する側の大国で自らその秩序を破壊した。日本もロシアも過去の成功例を見て先に進んだ。ロシアはクリミアをロシア系住民によるロシア併合世論を組織して短期で制圧した。ウクライナ戦争ではウクライナ東部、南部をクリミアと同じように併合することにあつたと推測される。ウクライナ戦争の危険性は世界の二極化と兵器使用のエスカレーションである。ロシアによる戦術核が使用される危険性がある。和平実現のためには第三者が存在しないと難しい。日本が世界の先頭に立って平和構築活動を進める事が日本の恒久的な安全保障になる。世界一の平和超大国を目指しましょう。

受講を終えて

L.K.

昭和19年(1944)6月にアメリカ軍がサイパン島を占領し、B29の前線基地が建設されて以後は、同爆撃機による日本本土の軍需工場や軍事施設、民間人を目標とする本格的な爆撃が始まった。日本の敗北に王手をかけるものであった。東京大空襲、広島、長崎とつながり計り知れない民間人の被害がでたのもサイパン陥落からであった。戦争は始まると止められない。始めさせないことが大切でありまた明治大学の登戸研究資料館を訪問した時に戦争の謀略の側面をも学んだ。得るものの多いコースであった。

1943年のカイロ宣言で日本は台湾を中国に返還することになり、1978年の日中平和友好条約で日本は台湾が中国の領土の不可分の一部であることを理解し尊重するとしていることから、中国の台湾併合について日本が関わることはないことは明らかである。それにもかかわらず、台湾有事が日本の有事になると言いたてるのは何故なのか。

遑れば、台湾有事は2021年4月のバイデンと菅の日米首脳会談で「台湾海峡の平和と安定」の明記によって表面化したと言える。この時バイデンは菅に、「台湾が尖閣の領有権を主張しているため中国が台湾に関与することは日本の領有権が危うくなる。米国は尖閣のいかなる行動にも反対するが、抑止力・対処力の強化をする必要がある。これからは日本がインド太平洋地域の安全保障の最前線に立ってもらいたい」と言い、菅は易々と承知した。このことは岸田にも引き継がれ、2022年12月、あっという間に安保3文書改定による反撃能力の保有、防衛費倍増が閣議決定された。その後麻生がわざわざ台湾を訪問して「戦う覚悟が抑止力になるんだ」と吠えたが、「バイデンさん、言いつけ通り日本はちゃんとやっていますよ」という米国への隷従メッセージと考えればストーンと腹に落ちる話ではある。

要するに、「台湾有事は日本の有事」は、日本が米国に隷従して対中戦略の先兵になったからである。これでは日本は独自の防衛・外交戦略を放棄したも同然である。主権国家であれば中国が台湾併合に動いたとしても、日本は日中平和友好条約を持ち出すなど、平和を守り抜くために無用な戦闘は自衛行使の原則に背くとして米国を牽制し、沖縄や南西諸島を再び戦場化する愚を犯さないことである。また、仮に中国が武力以外の手段で台湾を併合して尖閣の領有権の帰属を主張したとしても、過去の歴史的経緯や日中平和友好条約などを絡めながら忍耐強く外交努力を重ねていくことである。

ところが、外交努力を持ち出すと「外交に過剰な期待を寄せるのは現実の軍事的な脅威から目をそらすものでしかない」との批判が必ず待ち受ける。まさに抑止力の強化こそが重要であるとの論である。同志国の連携強化は必要であるが、軍事力の強化が高じると一触即発のリスクが生じ、ひいては戦争やむなしに行き着くのではないだろうか。だとすれば、抑止力強化論は戦争回避の意思よりも戦争辞さずの意思の方が強いように思われる。そして、ひとたび戦争になった場合に一般市民の命や暮らしがどうなるか、戦争の収拾がいかに困難であるかなどを考えているとは到底思えない。

無益な戦争は断固回避することである。時勢に即した防衛力は保持しつつも、「尋常ならざる粘り強い外交力等の継続こそが平和を守る最大の武器である」のだと考えたい。

メイン講師の山田朗先生は現存する資料をもとに近現代の戦争（日清・日露・第一次世界大戦・日中・アジア太平洋）の実情と背景を淡々と伝えてくれました。明治大学内にある登戸研究資料館に行き、そこで日中戦に向けての中国の偽札製造やアメリカに散布する目的で長時間かけて作られた風船爆弾（牛を殺傷するウイルスを入れた）など見学しました。その間アメリカは核を生み出していたのです。この戦力の大差を軍隊はわかっていなかったのか？そもそもなぜ真珠湾攻撃をしてしまったのか？なぜ沖縄戦になる前に戦争を止めることができなかったのか？片岡洋子先生の言葉が強く心に残ります。『戦争に賛成する人が圧倒的多数になったときに戦争が始まるのではなく、何も考えない人々が多数になったとき戦争が準備される。始まってしまった戦争を遂行するために世論も物資も動員され、それに反対する人々は非難されるようになる』これは決して過去のことでありません。大森直樹先生の講義で現在の教育現場の状態がわかりました。満帆の指導要領を押し付け、現場の意見や疑問が言えない、考えない教師・生徒をつくろうとしています。遠足や発表会を無くすことが良いことなのか？楽しい学校行事を子ども達で企画実践する過程に教科書からは学べない大切な事があるのではないのか？自分の意見を発表し相手の考えを尊重しまとめていくことが本当の民主主義精神だと思います。「なにが大切なのか！」「戦争は決して始めてはいけない」と言える国民でありたいと思います。

今だからこそ学びたい戦争と平和

H.W.

今年（2024）年は戦後79年です。私が生まれた昭和時代はまさに戦争の時代といっても良いでしょう。それなのに戦争が自国および周辺国に及ぼした重大事実を「知らない、教えない、知ろうとしない」で今まで安穏とした日常生活を送ってきてしまいました。

幸い1945年以降日本国内での武力戦争はありません。しかしながら今も世界では戦争が行われています。人はなぜ戦争をするのでしょうか？

ロシアのウクライナ侵攻やアメリカと中国の対立、イスラエルとハマスの武力衝突は、今まさにこの国際社会で起こっている出来事です。日本も、領土問題や東アジア地域の連携などさまざまな問題を抱えています。

歴史を学ぶことで、これから、何が起こるのか、何を变えれば、何が起こらないのかを予想し、悪い事態を避けることができるかもしれません。歴史を学ぶということは、そういうことだと理解しました。

昭和、平成、令和の時代を生きてきた私だからこそ、平和を「ただ戦争がない世界」ではなく、もっと広義の平和と捉え、「戦争は起こっていないけれども、今の日本は本当に平和なのだろうか」と常に問い、考えていきたいと思います。そして、社会に生きる一人として感じる生きづらさの一つ一つ解決していくことも平和な世界につながる事を孫世代に伝えたいと思います。

身近なくらしから環境問題を考えよう!

～気候変動・エネルギー・衣食住～

講師：福士 謙 介
(東京大学未来ビジョン研究センター教授)



三鷹市民大学総合コース

講師 福 士 謙 介

「三鷹市総合コース～市民がつくる、市民の学校～環境」の2023年度の担当をさせていただきました。終わってみるとあっという間の1年でした。私は6回の講義を担当いたしました。地球環境、地域環境、ゴミや食料の事など幅広い内容をお話いたしました。新聞やニュース等で見られるようなトピックに関して、その原因や科学的解説をできるだけ平易な言葉で説明するように心がけました。科学的解説に加え、日本国内の事情、諸外国との比較、世界動向、解決の難しさ、そして、それぞれ地域や個人が取り組めることに関しても講義の内容に入れていました。そして、何より、皆さんと意見の交換や論議をすることが私としてはありがたく、できるだけそのような時間をとるようにしておりました。

日本は公害を経験しており、その意味では環境問題は身近な問題でした。60年代～70年代の日本は、河川は汚染され、海岸にはイチジク浣腸が流れ着き、山林には不法投棄のゴミが見られ、光化学スモッグの注意報が出されました。現代ではそのような目に見えるような環境汚染はあまり見られず、地球温暖化のような、今は目に見えない地球規模の環境問題や微量有害物質の様に、見た目は綺麗だが有害性のある環境など、直感ではわからない環境問題が多くなってきています。その意味では、社会や自然のシステム構造や将来の予測などを理解し、想像する力が必要となってきています。例えば、大切にものを使うことは基本的には良いことですが、20年前のエアコンを大事に使うことは地球環境面から言うと悪いことです。エアコンは製造、使用、廃棄の各過程エネルギーを使用しますが、圧倒的に使用時のエネルギー消費が大きく、効率の悪いエアコンを使うことは悪いことということになります。

今回、講義時に気をつけたのは資料を投影している画面を指しながら、皆さんにお尻を向けて説明することは、しないようにしておりました。受講生の皆さんにまんべんなく視線を向け、問いかけるように話すようにしていました。ただ、反省点として、興が乗ってくると、横道にそれたり、話が飛んだり、また、元来早口なので受講生の皆さんには、わかりにくいところもあったかと思えます。三鷹駅から歩いて生涯学習センターに通いましたが、三鷹の街の佇まいを感じるのが楽しみのひとつでもありました。この場を借りて、皆様にお礼申し上げます。

プロフィール



ふくし けんすけ
福士 謙介さん

1966年青森生まれ。仙台一高卒業、東北大学卒業、米国ユタ大学博士課程修了。
東北大学、アジア工科大学を経て2013年より東京大学教授。
土木環境工学を専門とし、サステナビリティ学を日本で立ち上げたメンバーのひとり。
地球と地域の環境問題、気候変動適応と緩和、地域エネルギーマネジメント、
排水・廃棄物処理、土木環境インフラ、健康リスクマネジメントに関する研究を日本と海外
の両方で進めている。
著書(監修)に「地球の危機図鑑」(学研)。

講座風景



福士謙介先生



クール・ネット東京エコアドバイザー



川野茉莉子先生



相川美菜子先生

自主学习



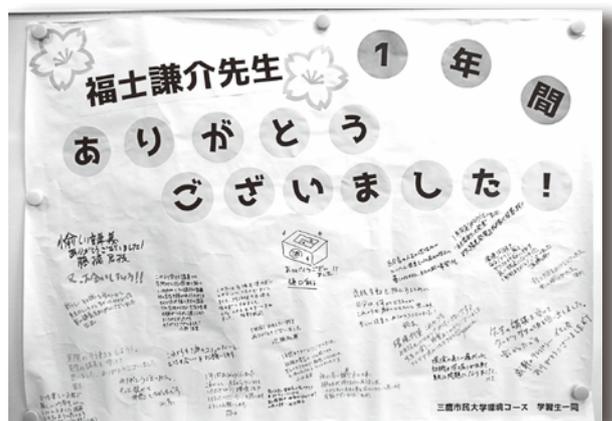
生涯学習センターフェスティバル準備



学習生企画の自主学习



学習成果の発表 (模造紙展示)



学習生による寄せ書き

●カリキュラム

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|----|---|--|--|
| | | 学習内容 | |
| 1 | 5月14日 | 開講式・オリエンテーション | 自主学習 |
| | 開講にあたって企画委員からの一言。講座運営についての説明。学習生の自己紹介。 | | |
| 2 | 5月20日 | SDGsと水資源 | グローバルウォータ・ジャパン代表 吉村和就さん |
| | 国連加盟国中自国水源保有は21か国のみ、他は国際河川依存。水資源問題を解決すればSDGs17項目の多くも解決可能。日本の水質管理は世界に誇れるが食料自給率は低く輸入食料は世界の水に支えられており賢く使うことが大切。 | | |
| 3 | 5月27日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 1.生涯学習センターフェスティバルに参加することを皆で確認。2.今後の自主学習をどうするかを、4つのテーマ別グループに分かれて議論、やりたいことなど意見を出し合った。 | | |
| 4 | 6月3日 | 気候の危機と社会の大転換【オンライン】 | 東京大学未来ビジョン研究センター 教授 江守正多さん |
| | IPCC資料を使い気候危機について学習。温暖化が更に進むと異常気象増加、影響度合いの地域差拡大、海面上昇等影響は深刻となる。GHG削減ペースは全く不十分。社会の大転換により「化石燃料からの卒業」が必要。 | | |
| 5 | 6月10日 | 気候変動はどのように私たちの生活に影響するのか | 東京大学未来ビジョン研究センター 教授 福士謙介さん |
| | 「気候変動」は地球の重要なシステム。限界を超えると破壊的な影響を及ぼす。限界以下でも農業への影響、猛暑ストレス、経済損失等影響は広範囲。気候変動の影響を軽減し社会を守る施策を皆で考えることが重要。 | | |
| 6 | 6月17日 | 最新の気象関連情報と防災対策について | 気象予報士 千種ゆり子さん |
| | 防災士でもある講師は気候変動問題を防災とからめて語る。講義は気象庁や国土交通省HPの防災情報をスマホで的確につかむ実践的なもので避難行動に及ぶ。実際の避難行動は感覚にも支配される。 | | |
| 7 | 6月24日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 「三鷹市の地球温暖化対策と取り組み」について学習生3名による発表、および意見交換。全体での共有化。 | | |
| 8 | 7月1日 | 気候変動はどうしたら阻止できるのか | 福士謙介さん |
| | 気候変動の度合いを最小化する気候変動緩和策について学習。例えば化石燃料は使わない、様々な資源は繰り返し使う、平和と平等(インクルーシブネス)。カーボンニュートラル社会の実現に至るプロセスや地域活動例等。 | | |
| 9 | 7月8日 | フードテックと代替タンパク質の動向 | (株)東レ経営研究所産業経済調査部 シニアアナリスト 川野茉莉子さん |
| | 環境問題や食料問題の解決策の一つとして調理ロボットや食のパーソナライズ化等のフードテックがある。畜産の環境負荷を軽減するための植物性タンパク質、昆虫食、細胞農業に代表される代替タンパク質について学習。 | | |
| 10 | 7月15日 | カーボンニュートラルの潮流～国内外の政策動向、地域社会、家庭でできることは？ | 東京大学教養学部環境エネルギー科学 特別部門客員准教授 松本真由美さん |
| | 地球温暖化は深刻化し、世界は2050年カーボンニュートラルを目指し脱炭素目標を掲げた。産業界も実現に向け、サステナビリティと企業価値を高める事業戦略を進めている。私たちも省エネを意識して行動することが大事。 | | |
| 11 | 9月16日 | 楽しく学ぶSDGs～私たちにできることを考えよう～ | 株式会社笑下村塾代表取締役社長 相川美菜子さん |
| | クイズ形式で数枚の写真の裏にある環境問題を当てる。特製のババ抜きカードで遊びながらSDGsの17項目に触れる。グループ毎に特定テーマを話し合い発表。身近な暮らしの中から楽しくSDGsに取り組んで行く事が大事。 | | |
| 12 | 9月30日 | 日常的にできる省エネ対策 | クール・ネット東京エココアドバイザー 一條美智子さん |
| | どうしたら省エネになるかをクイズ形式や家庭でのエネルギー消費動向、具体的な家電製品でのケーススタディ等を通して学習。電気製品以外の省エネの肝は、家庭でのエネルギー消費の4割を占めるお湯の使い方(量と温度)。 | | |
| 13 | 10月7日 | サステナブルファッション/衣料ロスについて | 大妻女子大学家政学部教授 吉井 健さん |
| | 家庭から放出される衣服は年間75万トン。68%はごみとして処分(うち再資源化は5%のみ)。より安くより多くの海外依存の生産から垂直統合モデルへの転換による課題対応や、大妻女子大ゼミでの資源循環の取り組み例を紹介。 | | |
| 14 | 10月13日 | 【公開講座】現代日本の教育と政治 | 現代教育行政研究会代表 前川喜平さん |
| | 10月14日 | 【公開講座】アジアにおける平和と共生 | 青山学院大学名誉教授 羽場久美子さん |
| 15 | 10月21日 | 環境の悪化はどのようにして改善するのか | 福士謙介さん |
| | 一昔前の日本の水管理を写真や映像を使って紹介。95%以上の普及率になった下水道の仕組みと河川への処理水流入状況を解説。下水道整備には膨大なコストが必要。私たちの出来ることとしては、下水道への負荷を下げる事が重要。 | | |

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|------|---|---|-------------------------------|
| 学習内容 | | | |
| 16 | 10月28日 | プラスチックとリサイクル | (一社)プラスチック循環利用協会総務広報部 富田 斉さん |
| | プラスチックの3つのリサイクル手法と現状を学習。リサイクル率向上の取り組みを具体例と共に紹介。プラスチック資源循環促進法では消費者の責務は再資源化製品の使用、長期間使用、廃棄物の排出削減努力。 | | |
| 17 | 11月4日 | 生涯学習センターフェスティバル準備① | 自主学習 |
| | 12月2日(土)、3日(日)のフェスティバルに向けて4グループに分かれて各テーマと内容について話し合う。 | | |
| 18 | 11月11日 | 廃棄物(ごみ)問題にどのように対応するのか | 福士謙介さん |
| | 廃棄物の状況を多面的な軸で学習。日本は諸外国に比べ焼却処理の割合が高くコンポスト割合は非常に低い。プラスチックごみが増え続けている。家庭での生ごみ削減やコンポスト実施、分別によるペットボトルリサイクルなどが大切。 | | |
| 19 | 11月18日 | 地元の資源利用をした循環型社会～落ち葉たい肥・段ボールコンポストから、コミュニティ・ガーデン、有機農業へ～ | 恵泉女学園大学人間社会学部教授 澤登早苗さん |
| | 「武蔵野の落ち葉堆肥農法」が首都圏初の世界農業遺産として認定。恵泉では学園教育を通し竹チップを活用したコンポストの開発を実施。コンポスト堆肥づくり等地域活動を展開。学習生のコンポストへの関心が高く活発な質疑応答が行われた。 | | |
| 20 | 11月25日 | 生涯学習センターフェスティバル準備② 開催日：12/ 2(土)・3(日) | 自主学習 |
| | 4グループに分かれて、生涯学習センターフェスティバルの展示準備。当日の当番等確認。 | | |
| 21 | 12月9日 | 食品ロスについて | (一社)現代生活学研究所所長 上村協子さん |
| | 前半は、「食品ロス図鑑」、江戸の良き生活文化を伝承する「江戸エコかるた」、および、フードバンク活動例の紹介。後半は、3グループに分かれて、江戸エコかるた取り大会。食を大切に作る意識醸成が大切。 | | |
| 22 | 12月16日 | エネルギーをつくり出そう。省エネと創エネ | 福士謙介さん |
| | 環境負荷の高い化石燃料利用から、太陽光・風力・水力・バイオマス等でエネルギーを創る技術開発が進められている。カーボンフットプリントを認証し環境ブランド等新たな付加価値を提供する企業の取り組みもなされている。 | | |
| 23 | 1月13日 | 自主学習 | 滝沢ごみクラブ(自主学習) |
| | 前半は「滝沢ごみクラブ」の内容とクラブメンバーが行なっているごみ削減のための活動を各部リーダーから紹介を受ける。後半は、4つのグループに分かれ部活リーダーとの意見交換や可能なアクションなどを議論。 | | |
| 24 | 1月20日 | 食料をめぐる様々な話 | 福士謙介さん |
| | 食糧自給率を品目別等で学習。全品目では38%だが飼料自給率を反映すると低い。温室効果ガス(GHG)排出量は牛等のメタン排出の影響が大きい。家庭からの食品廃棄削減実行、地産地消による自給率向上、都市農業の維持が大切。 | | |
| 25 | 1月27日 | 2050年の脱炭素社会と再生可能エネルギー | 横浜国立大学院・環境情報研究院教授 本藤祐樹さん |
| | 学習内容は、1.家庭でのエネルギー消費の現状、2.再生エネルギーの利用状況、3.2050年の脱炭素社会に向けたエネルギーミックスの選択。CO ₂ 削減と費用を考えたエネルギーミックスの選択が必要。 | | |
| 26 | 2月3日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 前半は環境関連の事業を起業した学習生から取り組みについての発表と意見交換。後半は、学習生一人一人から自身の環境問題についての考えや取り組みについて発表。 | | |
| 27 | 2月10日 | 森林資源と脱炭素社会 | 認定NPO法人環境リレーションズ研究所理事長 鈴木敦子さん |
| | 森再生活動について。森がCO ₂ を多く吸収するのは植樹後10年以降だが木が育っていくのが楽しみ。生物多様性に貢献という理由で参加する個人もいる。10年後は自然林になり生態系が循環していく。 | | |
| 28 | 2月17日 | 三鷹市ゼロカーボンシティ宣言等環境施策について | 三鷹市生活環境部環境政策課長 茂木勝俊さん(自主学習) |
| | 前半は、三鷹市環境政策課長から環境施策(ゼロカーボンシティ宣言、地球温暖化対策実行計画改定、基本計画改定)についての説明。後半は、グループ別に三鷹市が脱炭素に向かうために必要なことを議論し発表。 | | |
| 29 | 3月2日 | 自主学習 | 自主学習 |
| | 前半は本年度講座の振り返り。良かった講義や感想などをグループで話し合い最後に発表。後半は、1年を振り返り学習したこと、感じたことや今後に生かしていきたいことを学習生一人一人が発表した。 | | |
| 30 | 3月9日 | 学習のまとめ | 福士謙介さん |
| | 福士先生から一年間を振り返ってのお話を頂き、その後質疑応答や意見交換を実施。インターネット等の無い時代と現在の生活との比較から始まり、核融合やペロブスカイト太陽電池等の先端技術まで多岐に渡る議論。 | | |

常に新しい物を欲しがらる。おいしい物ばかりに目移りする。身の丈以上の生活を求め続けている。そして子供には過度の期待をかけ、能力以上の成果を望む。果たして、そこに本当の幸福があるのでしょうか。僕はよく散歩をするけれど、ゆっくり歩いていると、道に生えている草花の美しさや生命力を感じることができます。スタスタ歩く人には見えない。貧しいということは、自分が貧しいと思っているから貧しいんで、貧しくないと思ったら貧しくないんですよ。－山田洋二監督の言葉－

このコースでは、日常の暮らしの中で得る環境に関する知識とは違ったアカデミックな情報を各講師から得ることができた。地球規模の環境データの分析と予測やプラスチック、廃棄ゴミ処理、上下水道の課題、段ボールコンポストの取組み等を多様な視点から学ぶことができた。高齢で二人暮らし所帯での日常は、免許返納で車を電動自転車へ換え、市のゴミ出しルールに従い生ゴミは新聞紙でこしらえた処理袋で水気を取る、ペットボトルのラベルも取り除く、住まいは九階の最上階にあり日当たりと風通しが良く空調使用は酷暑の時だけで、冬の暖房もガスでのセントラルヒーティングにより利用効率が良い。風呂は毎日のジム通りの施設を利用しており、妻のみが使う。こうなってくると後は、どのように取り組むか!? 結局のところ冒頭の山田洋二監督の考え方にいきつくのである。

このコースでの主任講師福士先生の話では、仲間内でも1960年頃の暮らしに戻る事を提案されている方もいるようである。今の世界情勢から考えると危機的な気候変動に、対応できないかも知れないと考える一方で「心配するな、大丈夫、なんとかなる」(禅僧 一休)の声も聞こえてくる。

「環境を悪くするも良くするも 住みなすものは心なりけり」 F.A.

「身近な暮らしから環境問題を考えよう」を受講して

阿部武司

日ごろから環境問題には関心があり、テレビや科学雑誌などで雑然と知識は得ていたが今回の受講で整理出来たと思っている。気候変動はとくにCO₂排出量をいかに減らして2050年までにニュートラルな状態にするかであり、エネルギー衣食住すべてにかかわっている。地球に住む人々は現在エネルギーや衣食住を得る為に化石燃料を使っているが、早急に生活の様式を変えCO₂の出ないクリーンなものにしなければならない。特にエネルギーは化石燃料からの割合が高く、再生可能なものへの切り替えがなかなか進まない、時間の制約もあり、一人一人の取り組みでは達成は難しい、人類全体が一体となって初めて出来ることと思う。本講座から何かすぐできることを考えることも目的であった。

今までに実施できたこと、

- 1、石油ストーブの使用をやめエアコンと炬燵にした。約180Lの石油を削減できている、ソーラーパネルで昼からエアコンを使用し暖かく過せている。
- 2、給湯器は深夜電力使用を昼に変更しソーラーパネルの電力が使えるようにし、入浴は一定時間内にするようにしたので湯の使用量を大幅に減らすことができた。

最後に原子力について考えてみた、原子力発電はCO₂ニュートラルの為には必要である。現在は従来の古い原発の使用期限を延長することだけを議論しているが不十分で、もっと安全なものに換えるべきではないか、また将来の為に原子力エネルギー利用技術を確認する為の研究開発が必要と思う。特に核融合技術利用までには時間がかかることを考えると高速増殖炉の技術も重要で、再度取り組んでみることも必要だと思う。高速増殖炉常陽では良い結果が得られていたと思うのでまだやることではないだろうか。

昨年 2023 年は世界の平均気温が最高になり、国連事務総長グテーレスさんからはもはや地球沸騰の時代に入ったとの警告がありました。東京も猛暑日が 22 日間、過去最多を記録しました。皆さんはどれくらい気候変動に危機感を感じているか、昨年の生涯学習センターフェスティバルで来場者に聞いてみました。アンケートには若い方から高齢者まで 81 名の方が協力してくださり、気候変動を身近に感じ、何とかしなければと思っている市民がとても多いという結果が出ました。他方で、三鷹市ゼロカーボンシティ宣言や地球温暖化対策などはあまり知られてないのが現状でした。どうすれば温暖化対策に関心を持ち自分ごととして取り組むことができるのでしょうか。

気候変動対策は我慢ととらえられがちですが、やり方次第で楽しく進んで取り組めることをこのコースで知りました。例えば滝沢ごみクラブの皆さんのゴミ減量活動や SDGs 活動はイベントや Zoom を通して全国規模に広がっています。アイデアや意見を交換することで新しいライフスタイルが見え、仲間を増やすことで活動が楽しく大きくなることを知りました。また二酸化炭素を吸収する森を育てる活動をしている環境リレーションズ研究所のお話も大変勉強になりました。国土の 67% が森林の日本、二酸化炭素を吸収し生物多様性を育ててくれる有難い存在ですが、管理をしないと存続できない森も多いそうです。皆伐放棄地や土砂崩れの山に木を植えて森を生き返らせる Present Tree という活動を知りました。何かの記念日やプレゼントに木を植えて緑を再生。何十年もかかる取り組みですが、すばらしいプロジェクトだと共感しました。またグループで話し合った温暖化対策への要望を市へ伝えることができたのはとてもよかったと思います。

環境コースを受講して

T.K.

地球環境には人々の活動により引き起こされる多くの問題を引き起こしてしまいました。気候変動、生物多様性の劣化。これをくい止めるには私たちが努力しなければなりません。例えば省エネルギー、リサイクル、公共交通機関の積極的な利用など、その他行うことが沢山あります。

講座のなかで私がとくに気になった項目を 2 つほど挙げておきます。

1. 私達は多くの食肉を消費しますが、牛肉 1 kg 生産するためにはトウモロコシだけで換算すると約 11kg の飼料、豚肉では約 6.5kg の飼料が必要になります。

鶏肉 1 kg を生産するには、約 2.2kg の飼料が必要とされています。既にスイスでは植物由来の代替肉がすでに 8700 店で販売され、6100 のレストランで提供されています。

私達はこれらを常に頭の何処かに置いておいて食生活を組み立てていく必要があると思います。

2. プラスチックは私達にとって生活に欠かせない安価で大変便利なものです。製造されたときは大きなプラスチックが自然環境の中で破壊・分解され 5 mm 以下の微細粒子となり海水に浮遊する。これらを海洋生物が摂取し生物濃縮され人間の健康にも影響することが懸念されます。多くの海洋汚染として懸念材料となっています。しかしマイクロプラスチックがどのような影響を与えるかは未知数です。プラスチックを自然環境に放棄するのが問題で、正しく処理すれば原材料になり又はサーマルリサイクルなどに活用すればマイクロプラスチックにならずに有益に利用できるのです。とにかく自然環境下に放置しないこと、各自治体の指示にしたがい正しく処理することが重要、私たちの地球を守るために！

環境コースを受講して

小野 浩美

今の社会にとって地球環境問題は大事なテーマであり、一度きちんと勉強をしておきたいと考え受講した。環境問題といっても今の生活全般に関わる様々な問題と具体的取り組みがあり、今まで知らなかった分野の取り組みもあって大変勉強になった。データを使っただけの講義が多く、味気なさもあったがわかりやすかった。

今まで政治、歴史、哲学、教育などのコースを受講してきたが、今回のコースでは今までとちょっと違う感じを受けた。若い講師が多く、学問的というよりも実学的という感じだった。

地球環境問題は今まで人類が築き上げてきた膨大な経済的開発の上に成り立っており、経済成長をどう考えていくかが問題の要にあると思う。

市民大学総合コースを受講して

近藤 和廣

「身近な暮らしから環境問題を考えよう！」の関連で読んだホープ・ヤーレンの「地球を滅ぼす炭酸飲料」(築地書館)をご紹介します。感想にかえさせていただきます。

1 ホープ・ヤーレンは1.5℃または2℃の危険上限目標設定には根拠がないと主張

- ①寒い思いをしながら成長した私たち(凍えながら古いフォードを溝から押し出し馬を探して何時間も農地のはずれを歩き回るなど様々なことを氷点下30度の凍てつく風の中で経験した)に気温の1.5度上昇は理屈抜きに悪いことだと納得させるのは至難の業だ。
- ②この難題に関し気候変動に関する政府間パネルが十分に検討し理解したとは思えない。
- ③私たちは摂氏2度という上限がどこから来たのかも忘れてはいけない。これは1970年代の科学者の問いかけに由来している。二酸化炭素の排出量が倍増したら、温暖化がどれだけ進行するかという問いに対する回答が摂氏2度だったのだ。
- ④2200年の二酸化炭素の含有量が今日の2倍に届かない未来を思い描くのは難しいがパニックになる必要もあきらめる必要もない。しかし真剣に考えなければならない。

2 国連・政府・マスコミが危機をあおるのに反対

私はただの研究者だが、それにしても市民に危機感を持たせるためには恐怖心をあおるべきだという発想には恐ろしさを感じる。不安を抱えていると良い決断を下せない。

3 ホープ・ヤーレンの温暖化問題に対処するための基本的な考え方

- ①今日使われる燃料と電気のすべてを70億強の地球の住人に平等に再配分してみよう。一人当たりのエネルギー使用量は1960年代のスイスの国民の消費量と等しくなる。
- ②今日世界では10億トンの穀物を人間が食べ10億トンが動物の餌として提供される。これだけの穀物を動物に与える結果、1億トンの肉が手に入り3億トンの排泄物が出る。

1年の学習を振り返って

M.S.

市民大学の総合コース（環境）を受講したいと思ったきっかけは、環境問題といっても様々な切り口があり、幅広く学びたかったことと、自身の仕事がエネルギーに関連した仕事のため、何かためになるものが得られるのではということからでした。

実際に受講してみて、環境分野でご活躍されている講師のお話を直に聞くことができ、自身が知らなかったことも学べたこと、また、一緒に受講している市民のみなさんも意欲的な方が多く、様々な意見を聞くことができ色々な考え方があるなど改めて感じました。

また、生涯学習センターフェスティバルに向けての取り組みは、みなさんと一緒にどのようなことを展示するか考え、展示物を作成するのは、まるで学生の時に戻ったような感じで懐かしい気持ちになりました。

この市民大学があくまでも『学習の主体が市民である』ことをとてもよく感じることができましたし、年齢を重ねても学びたいという意欲を持ち続けて、主体的に情報をとっていくことが大事だなと思っています。一年間ありがとうございました。

環境コースを学ぶ機会に感謝！

笹川英之

昨年度の環境コースの企画委員から参画し、企画構成・タイトル検討、講師の選定等に携わり、同メンバーにも恵まれました。

また、学習生募集ポスターの制作も担当させて頂いて、広報宣伝にも協力できて光栄でした。

今年度は、学習生として運営委員も兼務。メイン講師の福士先生の豊富な知識と、ユーモア溢れる語り口は絶妙でした。

環境問題の本質から現実的な数値データによりリアルな社会課題を痛感しました。

ゲスト講師では、相川先生のSDGsカードゲーム体験が印象深く、よく練られた企画演出はSDGsの世界に引き込まれましたね。

自主学習では、三鷹市ゼロカーボン宣言の自主活動グループや環境問題の起業活動をお聞きし、凄さにリスペクトでした。

全体で1番の思い出は、生涯学習フェスティバルの展示活動です。企画検討でみなさんと色々と話し合いを重ね、アンケート、災害予防QRコード・動画投影、コンポストやフードテック、リーフレット配布等より多数のご来場を迎えた貴重な体験でした。

今回学習した環境問題は奥が深いですが、まずは自らの小さな取り組みから地域社会の変革に繋がる心意気から始めていきます。

年間を通して、一緒に活動した運営委員には諸々ご相談させて頂きました。お陰様で学ぶことの素晴らしさを再認識しました。

あと、事務局担当の大中原さんには、講座運営で唐突な要望等にも柔軟にサポート頂いて、本当に有り難う御座いました。

最後に、三鷹市民大学で学べた喜びと貴重な機会に感謝し、今後の三鷹市民大学の益々の事業繁栄を祈念しております。

日本のエネルギー源の問題についてメイン講師をされた東京大学の福士謙介教授は、講義の中で余談として、「車を所有しないことでガソリンの使用を削減し、環境負荷に貢献できる」と話されました。この問題は真摯に向き合い、一考する価値があると思います。海外では車を都心部に乗り入れを禁じる国もあり、カリフォルニア州では車を持たない低所得者に対して税額控除制度の法案が議会で可決され、車を所有しない人には給付つき税額控除も検討されています。日本が脱炭素社会を目指すには我々が身近な問題に目を向け、具体的な政策を実施することが必要です。一方電気自動車（EV）への置き換えが脱炭素に向けて最大の貢献となります。しかし日本のEVは自動車全体のわずか2%程度しか占めていません。世界的なEV普及を考えると、国を挙げての取り組みが不可欠です。

話は変わりますが、今回の講座でサプライズがありました。富士東大教授が講義の終わりに酒2本をお持ちになり、ジャンケンで勝った2人の受講生に贈られることになり、私はその1人になりました。このお酒は福士教授が新潟の佐渡ヶ島に地域の貢献を目指して、学校の廃校となった教室に研究室を開設したこと由来しています。その場所は酒造会社の蔵となっており、その蔵のお酒を頂いたことに驚いています。福士教授が三鷹市民大学の理念を理解され、大切に思ってくくださったことに感謝しています。市民大学の理念は「ともに学び、ともに考え、ともに行動しよう」を心にとめて、これからも大切にしたいと思います。

一年間環境コースを受講させていただき、本当にありがとうございました。事務局として活動された大中原さん、運営委員の皆様本当にご苦労様でした。おかげさまで、自分としては、満足のいく受講ができたと思っております。ありがとうございました。

さて、このコースを受講する前は、自分にでもできることは何だろうか？少しでも環境により良いことを知って、実践してゆこうと思っておりましたが、残念ながらそのようなことは、すでに実践していることばかりで、新たな行動を起こすものはあまりなかったように感じております。これは、授業が物足りなかったということではなく、私自身が環境問題にある程度の知識（常識レベルですが）を持っていたので、これまでもわずかですが、できることを実践してきたからに他なりません。

今後、より一層環境に良いことを実践してゆくためには、自分自身の知識や認識を深めることだけではだめで、今後は国、都道府県、市区町村という行政府が中心となり、環境改革プロジェクトなるものを立ち上げ、住み良い生活環境を強力に作り上げられるような計画や、規則を定めてゆくことが必須であると考え次第です。

十数年前に東京都千代田区が皮きりだったと思いますが、路上喫煙者には、罰金を取るルールを定めました。今では、千代田区に限らず、少なくとも東京都のどこへ行っても、路上喫煙者を見かけることはほとんどなくなっています。こうなるためには、十数年を要しましたが、まさに、「路上喫煙」に対して大改革を成し遂げたと言えるのではないのでしょうか。これと同様のことを前述の行政府が中心となり、ルール化や罰則化を順次実行してゆけば、この国の生活環境は、見違えるほど良いものになってゆくのではないのでしょうか。

サステナブルな社会実現に向けて

M.S.

サステナブルな社会の実現の為に自分には何ができるのかについて、環境コースにて先生方から様々な取り組みについてお話を伺うと共に、他の参加者の方々と活発に意見交換をすることで、深く考えることができた一年でした。

特に印象に残っているのは、全国の放置された森に個人や法人からの寄付により植樹をすることで、里山として再生していく活動（Present Tree）についての講義です。寄付だけではなく、実際に現地を訪ねて地元の方と交流する植樹イベントも企画されているとのこと、実際に寄付をした多くの人々が参加しているとのことでした。

今、世界中の多くの企業がCSRの観点から、環境保護活動やSDGsの達成に力を入れており、それは素晴らしいことだと思いますが、我々が個人レベルでサステナブルな社会実現の為にできることも決して少なくないのだという気づきが、この環境コースの講義の中では多かったと思います。例えば、家庭での省エネ、食品ロスを出さない工夫やコンポストの利用、代替たんぱく食品の利用など、我々が環境保護の為にできることは多く、それが最初は小さなステップであっても、地道に継続していくことが大切だと思いました。

最後に円滑なコース運営の為に尽力頂いた運営委員の方々や事務局の方々に感謝を申し上げたいと思います。

地球沸騰化を抑える身近な行動の大切さ

高橋 衛

まず、本コースの企画運営に携わられた関係各位、講師の皆様にご心より感謝致します。

市民大学講座への参加は昨年「環境と科学」に続いて2回目でした。昨年度はエネルギーミックスを軸にグローバルな視点で環境問題を幅広く学習、今年度はより身近な視点で衣食住やごみ問題を軸に学習。この2年間で環境全体を補完的に学習するととても有意義なものでした。

6月には自主学習枠で「三鷹市の地球温暖化対策の現状と取り組みについて」と題し、地域の現状と課題を共有する機会を頂いたことにも感謝致します。

講座外でも環境問題を自身で考える機会が増え、以前の自分ではやらなかったであろう、三鷹市基本計画や温暖化対策素案などに対するパブコメにも参加。環境問題をより自分事として捉えるようになりました。本コースに参加した成果でしょうか。本コース終了後も継続することが重要であるとも理解しています。

一年を振り返ると世界的な猛暑の中、今年の夏頃からは「地球沸騰化」という言葉を頻りに耳にするようになりました。私たちは本当に温室効果ガス削減ペースを加速できるのか、危機的な状況にあると危惧しています。三鷹市の削減対策の進捗も決して順調では無いことも理解しています。不可逆的な状態に陥らないよう、今後とも身近な重大課題として注視するとともに、「家庭での省エネ行動」を継続的に実施、行政や地域の取り組みに関しても発信・参画したいと思います。

本コースの講義の中では、省エネと共に廃棄物削減や資源循環の課題も何度となく取り上げられました。これらに関しても高い意識をもって生活し、学びの循環を実践することが大切だと理解しています。自身が、地域が沸騰しないように。

プラスチックの生活を考える

M.T.

近年の異常気象や災害のニュースに、地球環境が汚染され疲弊している現状に不安をもっていました。この講座を受講し、より広くより深く考える機会となりました。

これまでもリサイクルや、ごみ分別、油処理や水の流しかたなど生活で出来ることは意識をもって暮らしてきましたが、プラスチックについては多くを依存している現代の生活において認識以上に深刻なものでした。

人間は地球を消費して生活し発展を享受していましたが、安価で便利な多量のプラスチックはこれまで存在しなかった化合物や有害物質を生み、自然界に排出されても分解されることはなく増え続けています。分別してゴミ出ししていたプラスチックのリサイクルも十分とは言えず、焼却したり海外から低品質のプラスチック製品となって戻って来るのは憂慮されます。

海や河川においても個人的にはごみを投棄するなど考えられませんが、災害などによって海に流れ出るごみ以上に生活の中で多量のプラスチックを使用する生活が海洋ごみを生み出し、洗剤や衣類にも含まれるマイクロプラスチックやナノプラスチックも流れ込み、いったん海に出ると回収も困難で海洋生物に取り込まれていることは衝撃でした。

最近ペットボトルの飲料水にも多量のプラスチックが混入されているとわかり、食品、水、空気などに入り込んだプラスチックの摂取に晒され、健康問題の解明は始まったばかりと感じます。

講座の最後にいろいろな形で私達に何が出来るかを考える機会がありましたが、それこそが大事であると思います。待たなしの環境問題を地球規模で考え、モチベーションをもって行動が出来るようでありたいと思いました。

環境講座受講を終えて

K.T.

昨年に続いて2度目、市民大学総合コース受講の機会を得ました。昨年は哲学・文化芸術、今回は環境と分野は全く異なりましたが、暮らしを通しての視点で考えてみるという受講スタンスは変わりません。

環境コース企画の段階から携わったものの、特に環境問題に通じていたわけではありません。テーマを決めた後、講師の方々をお願いするに当たって、他の企画委員の熱心な議論を聴きながら、私自身はなるほどーと感心するばかりで、企画委員としての役割を果たしたと言えず、身の縮む思いでした。

さて、その企画に基づいて始まった講義は、実際に身近な暮らしに直結した内容で大いに興味深いものでした。一口に環境問題といっても、色々な切り口があるものだと知りました。SDGsが声高に叫ばれている今、意識の高い企業では問題解決に向けて動いているということですが、個人で出来ることは何か？と、自分の日々の暮らしに当てはめて考えてみました。

ゴミの分別に始まり、容器・過剰包装削減、フードロス解消、地産地消等々。ほんのちょっとした心掛けで出来ることがあります。「塵も積もれば山となる」の諺を信じて積み上げていくしかないのかもしれませんが、世の中の便利さを享受してきた挙句に言うのも憚られますが、未来の子どもたちに、少しでも暮らしやすい、希望の持てる社会を残したいという願いが叶いますように。

「市民大学」は知識を得るだけでなく、人と人の会おう貴重な場。いろいろな事を学びました。多くの方がこの素晴らしい時間を共有できるよう、願っています。

1年間ありがとうございました。

受講を終えて

T.T.

コロナが収まりかけ、引きこもり、生活からの脱却を考える頃、市民大学環境コースを友人から誘われ受講することにしました。

講義が始ってみると、既に何年か学んでいる人や実際に活動を始めている人たちがいました。

私には少しレベルが高く、知らない単語や造語が出てきて資料から見つけ出すのにあたふたしました。次の資料を受け取れたら予習が出来るのに残念！

講義内容は、水資源や化石燃料、森林伐採、プラスチック、ゴミなど多岐にわたり、新しい知識を得たり目から鱗の驚きなどがあり毎回楽しい講義でした。

人口増加や貧困、食料不足など、どれも歴史や経済や環境と深く関わり合い地球温暖化から地球沸騰にまでなってしまったことに胸を痛めました。

飛行機や車を使い、冷暖房の効いた部屋でおいしい食事をする。

楽しく便利な生活を手放すのは難しいけれど見直す必要がある。

滝沢ごみクラブさん達の全国ネットの活動は素晴らしいと思った。

火鉢や綿入れで寒さをしのいだ年代なので、もう少し電気を節約し、食品ロスをなくし、ゴミを出さない生活にしたいと思い、ダンボールコンポストに挑戦してみました。暖かくなり、発酵が進み、堆肥が出来たら庭で花や野菜を作ろうと楽しみにしています。

上手にできたら親戚やご近所を巻き込んで少しずつでも活動の輪が広がるようにしたいと思います。

市民大学を受講して視野が広がり、いろいろなことに興味や関心を持つようになり、楽しい1年でした。講座に関わってくださった全ての方々に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

危機感の共有の難しさ～共感を得て楽しく継続するために

Y.T.

講義の一コマに名画にトマトスープを投げつけた環境活動家をどう思うかという問いかけがありました。主張はわかるが手段が間違っている、と思う学習生がほとんどでした。「怖い、こんな極端な人たちがいるから環境問題にはついていけない」と感じさせてしまい、『共感』は生まないというのです。

私は環境問題で取り上げられるやせこけた白熊や山火事の写真が苦手です。こんなに悲惨な状況だといわれても、大変だ、どうしよう、で思考が固まります。危機を煽られると（現実には危機ですが）とりあえず今は考えないという選択をする人もいます。また、環境問題は規模が大きすぎて今ひとつピンと来ないし、地球規模の問題よりは自身の日々の暮らしを大切にしたい人も少なからずいます。私も身近な人から地球が大切というのはわかるが、そのための我慢は嫌だ、と言われてしまいました。

我慢をすることは長続きしません。楽しめなければ継続することがつらくなってきます。やらねばならない、という押し付けは逆効果。皆が楽しそうにやっているから自分も仲間に入る、あるいは自然に楽にできることが実は環境に良いことという流れが理想です。福士先生も話されたように「社会のシステム」を現在と100年後をバランスよく自分事として落としこんでいける仕組みに変えていくことです。

続けられる向き合い方は人によって違いますが、大切なことは続けること。こんなことやったよ、という沢山のアイデアを共有できればその中に何か一つくらい長く取り組みたいことが見つかるかもしれません。

経済か環境かの二者択一ではなく両立させる。できますよ、きっと。何より自分が地球や人に優しいことをすることで未来を変えられるってワクワクしませんか。

目から鱗の一年でした。すばらしいプログラム設定と先生方の熱弁に感謝です。 S.N.

身近なくらしから環境問題を考える先には、如何に世界市民のマジョリティーを感化するかが課題だろう。実態の多くは、個人がやれることの小ささと無力感、更には無関心、他人事に繋がる。事実、家庭部門の日本の二酸化炭素排出量割合は4.8%にすぎない(1/27 横国大本藤先生)。しかし視点を変えて、世界の温室効果ガス排出総量の約3割は食料由来だそうだ(1/20 福士先生)。これは市民にとってもインパクトのある数字だ。もちろん、内、直接家庭から排出は微々であっても、だから社会全体で！と拡散可能だ。このように、市民の心に響き、行動を変革させ、市民が輪となり環境悪を糾弾する力を呼び起こす表現・アピール方法がもっとあるのではないか…。他、この一年衝撃を受けたお話と私感を残す：

／日本は実は世界の水に支えられている(42%が輸入仮想水(VW))(5/20GWJ 代表吉村氏) ←えっ！／「脱炭素化」は、分煙革命、産業革命、奴隷制廃止同様社会の大転換しかない。常識を変える必要！現状の排出削減が全く足らず、今を逃すと実現不可能となる各種証拠とその悲惨な結末(6/3 東大江守先生)。←もっと市民に知らしめるべき。／世界の大手企業のサプライチェーン排出量が決手(7/15 東大松本先生)。←市民に知らしめ、監視・評価する世論形成要。／衣服の98%が輸入。内、家庭で手放される量年間75万tのうち再資源化は5%。95%は焼却・廃棄。しかし売れ残り海外処分の量はそれ以上(10/7 大妻女子吉井先生)。←もっと業界を追及すべき。市民の購買意識も反省要。／プラスチックの実態(10/28 プラスチック利用協会富田氏) ←マイクロプラ等知ってるつもりが実は何も知らないプラスチックのこと。／等々、三鷹市民大学に敬服です！

生活と環境は地続き

A.H.

「環境コース」受講を終え、改めて自分の普段の何気ない日常生活と、地球規模での環境問題は、地続きなんだと実感した1年でした。

日々の暮らしの中で、どうすればカーボンニュートラルにつながるのかを具体的に教えてもらえる講座や、生ゴミを堆肥に変えることで環境負荷を抑えるだけではなく、自治体のゴミ焼却のコストも削減できることを知った講座、食品の選び方一つで地球の寿命を少しでも長く保てたり、最新の技術で細胞レベルの食肉産業が生まれようとしていること教えてもらった講座などなど…

具体的に上げていくとキリがないのですが、講義をしてくださった先生方のお話からは、「一人の市民として、あなたの選択が地球の未来を変えていくのですよ」と、生活者としてのモラルと覚悟を気づかせていただいたと感じます。

また、日常生活でできるカーボンニュートラルから1歩先に進んで、より積極的に環境のためにできる活動も教えていただきました。

日々の仕事や生活に追われるだけではなく、少しずつですがそうした活動にも参加し、少しでも地球と未来の人々のためにお役に立てればと、思います。

初めて参加した三鷹市民大学

平 林 孝 章

こんなにも素晴らしい無料講座が世の中にあるのか？応募時も受講後の今も変わらない正直な感想です。

三鷹市・生涯学習センター・企画委員をはじめ、この講座をご準備頂きましたスタッフの皆様感謝いたします。産官学民それぞれのフィールドにて第一線で活躍されている講師陣から伝わってくるエネルギーもリアル面前は勿論のことオンラインスクリーン越しでも学習室で熱量を十分に感じる生の旬の情報でした。

実質8ヶ月で30回の講義はかなりハードで家庭生活に影響があるのではないかと不安も徐々に緩和され、逆に規則正しいリズムの生活となったように感じます。

講座の三分の一に当たる10回は自主学習という学習生自ら企画し学習生同士で学び合う能動的なスタイルも、講師からの学びを深め、また、交流機会が増し、ひとりひとりの活動に向けた最初の一步を踏み出す背中を後押ししてくれる大きなきっかけであったように感じます。

抽選なので希望通りになるかどうかは確実ではありませんが、時間が許せば申し込むことをお勧めいたします。年度を追うごとに裾野の広がる市民コミュニティの繋がりがどんどん発展していくことを願っております。いくつになっても新たな機会が与えられ成長できることに感謝いたします。どうもありがとうございました。

これからも一緒に環境問題を考えていきましょう

藤 田 恵 美

今年度の環境コースは、恵泉女学園大学の澤登先生から段ボールコンポストやコンポストの取り組みからコミュニティ活動に広がっている事例や、認定NPO環境リレーションズの鈴木さんからプレゼントツリーなどの紹介。また、自主学習では市民レベルの活動の紹介や、滝沢ごみクラブのオンラインを通してつながりながらそれぞれの地域でゴミの問題に対して具体的に取り組んでいる人たちとの交流など。自分たちの暮らしからできることを考えられるように工夫されていたように思います。市民大学受講3度目にしてはじめて自主学習への参加が楽しみになった講座でした。

学びが地域について考え、仲間をつくりその学びを地域や生活の場に活かし、コミュニティづくりやまちづくりを図ることを目的としているというこの市民大学。その市民大学の目的に惹かれて受講してから3年目。はじめは自主学習はあるものの自己完結型の形に、1年間のコースは長すぎると感じていました。しかし、今年度は学びを通して受講生同士が話し合いを重ね、地域課題を共有しながら次のステップへと移行していけそうなそんな雰囲気です。ありがとうございました。

私たちが学んだことを、コミュニティづくりやまちづくりに活かすためには、まだまだ受講生同士の交流や意見交換の時間が必要だと思います。引き続き何らかの形で、1年間学習してきた仲間と身近なくらしから環境問題を考えていけたらと思っています。

1年間ありがとうございました。

SDGs や気候変動や食糧不足は止められるか？

藤 橋 君 枝

23年度の市民大学総合コースは「環境」コースに入りましたが、余りのテーマの大きさにどのように対処したらよいか戸惑いました。私は高齢者で余り先の世の中を想像できません。若い人に未来を託すしか在りません。講師の方々に若い人たちがいらっしゃいました。今の若い方々はSDGsを普通の生活に実践しています。気候変動や食糧不足に取り組む姿勢は感じられましたが、どこまで可能か疑問に思いました。若い人のホンネをお聞きしたいです。国家や企業がどこまで本気に取り組んでいるか知りたいです。

吉村和就先生の「SDGsと水資源」では各国の水資源事情を聴いて温暖化や水資源への影響、今、日本で水道水が危ないことなどが解りました。澤登早苗先生の「武蔵野の落ち葉堆肥農法」「オーガニック・エディブル・コミュニティガーデン多摩の実践」などが実践可能な例として心強く思いました。福士謙介先生のゼロカーボン日本酒製造を実際に行っていること成功例として良く解りました。

果たして我々は気候変動や食糧不足を防げるのでしょうか。我々の英知が問われます。ささやかな市民の努力と活動で何とかできるのでしょうか。希望を持って、前へ進むべきでしょうか。高齢者の気概の持ち方でしょうか。頑張りたいと思います。

最後に講師の先生方、企画委員、運営委員、事務局の方々に感謝申し上げます。

衣食住、日々の暮らしから環境について考える

M.Y.

人間が暮らす以上地球に何らかの影響を与えてしまうのは避けられないが、今はどんどん人によるエネルギー消費量が増えて地球が熱くなってきています。地球温暖化を改善するには今の生活様式を変えていかねばならないと思うが、出来ることには限りがあります。

「身近な暮らしから環境問題を考えよう！」という本講座で、衣食住それぞれの視点から自分たちの生活が環境に与えている影響について学びました。

福士謙介先生はお忙しい中メイン講師を引き受けて下さり感謝いたします。先生のお話は雑学含め内容盛りだくさんで楽しく、かつ環境問題と日々の生活の現実的な折り合いを考える上で役にたちました。

またゲスト講師の方々も多岐にわたっており、代替たんぱくとフードテック、大量生産と消費モデルのアップルビジネスの課題と大妻女子大学生の取り組み、クールネット東京による省エネの話、コンポストと地元の資源を利用した循環する社会、プレゼントツリーと森林活動の話など印象深い内容が多かった。そして、三鷹市としての取り組みを話してくれた市役所の方、すでに何らかの活動をしている受講生の話、そのご縁で、無償で話をしてくださったごみクラブの方々、すべての講師の方々に感謝いたします。

1960～70年代は日本で公害問題が起きていて大気や水の汚染がもっと深刻でしたが、様々な規制によって改善されてきました。今や多摩川に鮎が戻ってくるほどです。オゾンホールもフロンを規制することによって改善されています。一度悪くなった環境もなんらかの努力をすることによって、時間はかかるが環境が改善される事例を私たちは知っています。無駄なく大量消費をしないよう生活していきたいと思います。

転換期に直面する世界と日本

～現在地点から今後を探る～

講師：五野井 郁夫
(高千穂大学経営学部教授)



市民が政治を変えるために

講師 五野井 郁夫

三鷹市の市民講座でこの1年間、9回の講義を受け持つなかでわたしも受講者の市民のみなさまとともに多くを学ばせていただきました。まず、毎回大変熱心に参加していただいた受講者のみなさま、そして企画委員として全30回を企画に携わったみなさまに、この場をお借りして深く感謝と御礼を申し上げます。

三鷹市の講座には過去に幾度か立たせていただいたことがあります。この1年間の講座全体をつうじて心がけたのは、この講座を受講した市民のみなさまが、この三鷹市が今後もよき自治を行うために何が必要か、何を気にかけるべきか、他の市民に対してどう接するべきか、課題に直面したときどう対処したらよいかなど、知の手がかりを提供することでした。

2023年度は、国際政治ではロシアによる継続的なウクライナ侵攻、ガザ戦争などの近代以降のリベラルデモクラシーと人権の原則論に照らして受講者のみなさまの世界との向き合い方が問われる世界史上の出来事、国内政治ではLGBT理解増進法の制定などの出来事とともに、講義は進んできました。みなさまには単純に反米・親米、反ロシア・親ロシアといったような立ち位置から「敵の敵は味方」としたり先入見から判断するのではなく、人権と民主主義という概念とその展開から物事を考えていただけるよう、それら概念の成り立ちと現代の諸相を講じたつもりです。

みなさまが今後も三鷹市の自治に積極的に携わるにさいして、古代ギリシャ・ローマから知恵と勇気ある市民たちによって2000年以上の時をこえて連綿と受け継がれてきた共和主義と共和国、そして民主主義の伝統を今後もこの三鷹の地で継承し実践されることを願っています。野川近くの公務員宿舎で幼少期を過ごしたわたしにとって、三鷹市は故郷のようなものです。今後も三鷹市をみなさまの手で、さらに素敵な民主主義の都市にして下さい。ありがとうございました。

プロフィール

ごのい いくお
五野井 郁夫さん



1979年、東京都生まれ。上智大学法学部卒業、
東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程修了(学術博士)。
日本学術振興会特別研究員、立教大学法学部助教を経て現職。
専門は政治学・国際関係論。おもに民主主義論を研究。

<主な著書>

『10歳から読める・わかるいちばんやさしい民主主義』(東京書店、2021年)
『「デモ」とは何か——変貌する直接民主主義』(NHKブックス、2012年)、
『リベラル再起動のために』(毎日新聞出版、2016年) など

五野井郁夫先生



島山澄子先生



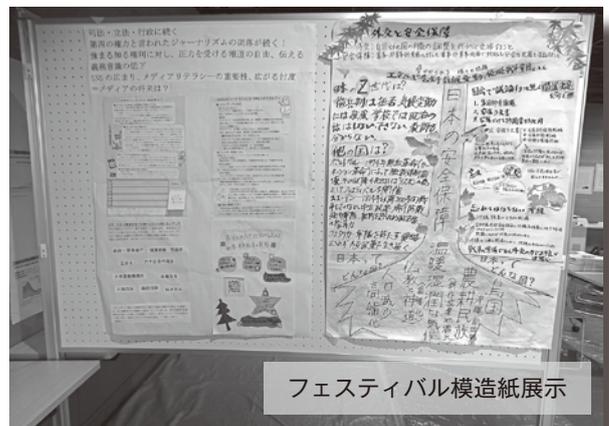
前川喜平先生



浜矩子先生（オンライン講義）



自主学習（フェスティバル準備）



フェスティバル模造紙展示

●カリキュラム

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|------|---|---------------------------------------|--------------------------------|
| 学習内容 | | | |
| 1 | 5月13日 | 開講式・オリエンテーション | 自主学習 |
| | 企画委員から今期政治コースの趣旨説明、自己紹介、運営委員を決める | | |
| 2 | 5月20日 | 古代ローマからの民主主義の理論と歴史 | 高千穂大学経営学部教授 五野井郁夫さん |
| | ①民主主義の起源 ②古代ローマ以降の共和主義 ③近代民主主義と議会主義など | | |
| 3 | 5月27日 | 都会と田舎、これから“価値残る”のはどっちか？ | 株式会社日本総合研究所主席研究員 藻谷浩介さん |
| | 自然資本(農産、林産、水産、再生可能エネルギー、自然景観)は自然利子を生む | | |
| 4 | 6月3日 | 東アジアの政治について(今後の見通しなど) | 東京大学名誉教授 小原雅博さん |
| | ①地政学から考える、海の地政学 ②東アジアの政治体制 ③東アジアの国際関係 | | |
| 5 | 6月10日 | ジャーナリズムの危機と展望 | ジャーナリスト 斎藤貴男さん |
| | ①ジャーナリズムの危機と展望 ②報道の影響力 ③亡国の国家運営が批判されない理由 | | |
| 6 | 6月17日 | 日本と単一民族国家神話、昭和から失われた30年 | 五野井郁夫さん |
| | ①ネーションとナショナリズム ②単一民族とはなにか ③日本の失われた30年 | | |
| 7 | 6月24日 | 平和をどう構築していくのか～市民社会の視点から～ | ピースボート共同代表 畠山澄子さん |
| | “抑止力”で戦争は防げない ①いま何が起きているのか ②「国家安全保障戦略」改定のどこが問題なのか 他 | | |
| 8 | 7月1日 | 日本の教育は何処へ行く | 現代教育行政研究会代表 前川喜平さん |
| | ①学校は何のためにあるのか ②戦争の出来る国造り ③教育に対する政治支配 ④学問の自由と憲法23条 他 | | |
| 9 | 7月8日 | ジェンダー平等の現在と課題～#MeToo運動を中心に | 弁護士 ヒューマンライツ・ナウ副 理事長 伊藤和子さん |
| | ①ヒューマンライツ・ナウの活動紹介 ②女性に対するバッシングなどの現実 | | |
| 10 | 7月15日 | 日本と世界の外交安全保障 | 五野井郁夫さん |
| | ①外交・安全保障の基礎 ②敗戦後の日本と平和憲法 ③日米安保と吉田ドクトリン ④沖縄施政権返還後の東アジア 他 | | |
| 11 | 9月16日 | 下心政治とその継承が破壊した日本経済をどう立て直すか 【オンライン】 | 同志社大学名誉教授 浜 矩子さん |
| | ①経済活動とは何か ②使命に忠実な経済政策に求められるもの ③偽りの「経済合理性」に惑わされることなかれ | | |
| 12 | 9月30日 | 冷戦後の国際関係 | 五野井郁夫さん |
| | ①コロナ禍とリベラル・デモクラシーの国際秩序の動揺 ②ウクライナ戦争下での国際関係 他 | | |
| 13 | 10月7日 | 自主学習 *前半の感想、フェスティバルについて | 自主学習 |
| | 今まで学習してきた感想と意見交換。15名参加 | | |
| 14 | 10月13日 | 【公開講座】現代日本の教育と政治 | 現代教育行政研究会代表 前川喜平さん |
| | 10月14日 | 【公開講座】アジアにおける平和と共生 | 青山学院大学名誉教授 羽場久美子さん |
| 15 | 10月21日 | 自主学習 *フェスティバルグループ分け | 自主学習 |
| | 民主主義、メディア、安全保障、教育の4グループで展示発表することを決めた。14名参加 | | |

| 回 | 日付 | 講義名 | 講師 |
|----|---|--|-----------------------------------|
| | | 学習内容 | |
| 16 | 10月28日 | 生涯学習センターフェスティバル準備① | 自主学習 |
| | 民主主義、メディア、安全保障、教育の4グループがフェスティバル発表内容を検討。16名参加 | | |
| 17 | 11月4日 | 日本社会と貧困格差 | 五野井郁夫さん |
| | ①日本国憲法と貧困問題 ②産業構造の転換とワーキングプアの誕生 ③弱者男性論と女性の貧困 | | |
| 18 | 11月11日 | 天皇制 | 五野井郁夫さん |
| | ①戦後日本の天皇制 ②象徴天皇制 ③君主と元首 ④天皇の行為 ⑤皇位継承と女系天皇 | | |
| 19 | 11月18日 | 海の中から地球が見える～気候危機と平和の危機～ | NPO法人気候危機対策ネットワーク 代表 武本匡弘さん |
| | ①海から見た地球「気候変動・気候危機・気候正義」 ②海から見た地球「プラスチックプールの海」 ③戦争と環境破壊 | | |
| 20 | 11月25日 | 生涯学習センターフェスティバル準備② 開催日：12/2(土)・3(日) | 自主学習 |
| | 民主主義、メディア、安全保障、教育の4グループがフェスティバル発表展示物作成。14名参加 | | |
| 21 | 12月9日 | 食料安全保障の危機～農業を潰して武器と昆虫をかじって生き延びるのか～ | 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授 鈴木宣弘さん |
| | お金を出せば食料が買える時代の終焉。地域農業を守ることが安全保障 農業にこそ数兆円の予算を早急につけよ | | |
| 22 | 12月16日 | 新自由主義、自己責任論 | 五野井郁夫さん |
| | ①新自由主義とハイエク ②新自由主義と自己責任論 ③自己責任論を乗り越える | | |
| 23 | 1月13日 | 三鷹市の情報公開制度について | 三鷹市総務部相談・情報課長 八木 隆さん(自主学習) |
| | ①情報公開制度の基本的な考え方 ②情報公開制度の概要 ③三鷹市情報公開条例 | | |
| 24 | 1月20日 | 「防衛力の抜本強化」で日本と東アジアは平和になるのか | ジャーナリスト 布施祐仁さん |
| | ①2022年12月「安保3文書」 ②統合防空ミサイル防衛の導入 ③日本の「反撃能力」は米軍指揮下で 他 | | |
| 25 | 1月27日 | フェスティバルの発表報告 及び沖縄問題 | 自主学習 |
| | 沖縄問題では「ドキュメント石垣島」のビデオを視聴し意見交換。 | | |
| 26 | 2月3日 | 国家と政治 | 五野井郁夫さん |
| | ①政治学における国家の論じ方 ②国際法における国家の論じ方 ③国家から逃れること | | |
| 27 | 2月10日 | ICU学生との意見交換 | 自主学習 |
| | 学習生でもあるICUの学生に若者の立場から今を語ってもらいましたがしっかりした意見に皆が共感した。 | | |
| 28 | 2月17日 | 総括、年間の感想 | 自主学習 |
| | 学習生がそれぞれ語る今年の政治コースの感想は市民大学が三鷹の文化であることを物語っていた。 | | |
| 29 | 3月2日 | 憲法と安全保障政策 | 学習院大学法科大学院教授 青井未帆さん |
| | 平和憲法と思っていた日本国憲法がいつのまにか骨抜きにされている現実を突きつけられた。 | | |
| 30 | 3月9日 | 国家と市民 | 五野井郁夫さん |
| | 市民の定義と歴史から国家と市民の関係を考えた。「100年後には常備軍の撤廃の方向に行く」に希望 | | |

一年間の学習を振り返って

I.T.

タイムリーな題名に惹かれ受講した。

コロナ前頃から重苦しい閉塞感に襲われていたが、各国の感染症対応をみて、改めて統治とは何か、民主主義とは何かを学び直そうと考えた。ユートピアだと思っていた自由と平等を掲げる民主主義が、発展途上の思想であり、世界中に受容されるのではなく、今や少数派となる現実に一層の危機感を抱いている。

転換期の情勢を正確に把握し、冷静に行動する指針を求めての参加だったが、今年を受講生は年齢層も幅広く、関心の高さ、特に若い学生のしっかりした意見には頼もしさを感じた。

また、講師の未来を見据えた言行一致の行動に模範を示して貰った。「物事は、出来事は、目先の恐怖・利益ではなく長期的なスパンで考え、自分達の目標とする社会に向かって、一步一步、地道に知識を蓄え、出来る限りの行動することだ」と。

更に、「日本国憲法を守ることこそが、最大の安全保障であり、人々の権利が守られ、平和に暮らせる為に憲法に従った政治を求めて、今こそ、市民が憲法論を語ろう。」と説く憲法学者に大いに賛同させられた。

今年も有意義な機会を戴けたことに、また、係わって下さった方々に心からの感謝の意を表します。

三鷹市民大学政治コースを終えて

今 富 由起子

専業主婦として政治や経済は何か私とはかけ離れた分野だと漠然と考えて生きてきたが、非常勤のアルバイトもコロナでやめてしまった私は新聞をくまなく読むようになっていた。チラシでこの講座を知り哲学か政治か悩んだが政治コースにした。

始めてみると大学生の気分楽しんで講義を聴くことが出来、楽しかった。五野井先生の講義はまさに大学で授業を受けているようで、政治の歴史から現代の状況も絡めながらの講義で達成感があった。数字やグラフを使ったクイズ形式の藻谷浩介氏のお話も面白かったし、小原雅博先生のユーラシア大陸の覇権争いのお話も興味深く聞いた。最後に先生が今の日本に必要なのは教育です。と述べられた時はまさに私の考えと一致していて嬉しかった。浜先生のアダムスミスの経済学の論点は新しく感じた。また羽場久美子先生の実践的まさに今に迫る政治的経済的な分析は少しほかの先生とは違っているようで面白かった。出席出来なかった講義も多々あるが総じて大変有意義であったと思う。

沖縄の米軍の駐留、石垣島の自衛隊の駐屯、自主学習で論議されたようだが一回も出なかった。米軍駐留の横暴は私も心を痛めており、デモに参加する人もいるようだが、私個人は署名運動にしたい。米軍がもたらす経済的効果 VS 環境汚染といろいろな意味での暴力を天秤にかけ、将来的視点で沖縄を測るなど愚の骨頂かもしれない。しかしハワイと比べ天然資源も限られており、観光産業の展望がどれほど見込めるかと考えた時、なにか折衷点はないか？いや NO とはっきり拒否すべきではないかと逡巡する。しかしデモも署名運動もやったほうが良い。

講義を快く引き受けて下さった先生方、企画をして下さった同志、土曜日出勤のスタッフの皆さん、大変お世話になりました。心からありがとうございました。

広報に、市民大学にて“転換期に直面する世界と日本”という気になる講座があり応募しました。初めてでしたが見事補欠で当選しました。

私は老年になった今、世界規模の転換期に立ち会うことになるとは思っていませんでした。是非この目でしっかりと見届けていきたいと思い受講しました。

そうそうたる講師たちが予定されており、特にメインは若手の論客、五野井郁夫先生がどのような講義をするのか楽しみでした。

今現在、新自由主義に伴う民主主義の劣化があります。正しく状況を認識する為には判断材料としての正しい一次情報がどうしても必要です。

これに関しては、斎藤貴男生、布施祐仁先生の講義は大変有益でした。

フェスティバルでは、民主主義についてのグループに属しました。

そこで、アメリカの民主化度が非常に低いことに驚きました。

世界の3つの代表的な調査データのうち一番悪いものは、政治の安定度（世銀2022年）117位／208ヶ国、（日本29位）でした。一番良いものでは、民主主義の質（エコノミスト誌2022年）30位（欠陥のある民主主義）／167ヶ国、（日本16位）でした。

日本は比較的良好な結果でしたが、実感が湧きません。また、親米と思われる国々が、必ずしも民主主義とも限らないようです。

報道の自由度（国境なき記者団2023年）では、日本は68位／180ヶ国（アメリカ45位）でした。来場者にアンケートを取ったところザックリ100位の結果でした。

多くの方が報道の自由度が低いと感じている様です。

メディアが知る権利に充分に向き合っていない表れだと思います。

私は特に、ウクライナ報道でのプロパガンダはひどいと思います。

「平和も民主主義もメディアから腐る」と言われています。

メディアリテラシーが今、非常に大事です。

直接講師と接するのは新鮮で、ほかの講師の講義も素晴らしかったです。

五野井先生は、明確な説明ではありましたが理解が追い付けないのは残念でした。

これからも復習を含め続けて勉強していきたいと思っています。

企画をした企画委員他関係者には感謝の限りです。

原稿を書くにあたり、今年度受講したレジュメを整理しておりましたが、改めて、幅広い政治課題について、貴重な知見に触れることができたことと感謝しております。

最近、戦争や災害、感染症や環境問題、貧困格差や財政破綻に加え、政治腐敗に至るまで、難しい政治課題が気の遠くなるほど山積し、日本の明るい未来が頭に描けず、半ば投げやりな感覚で世の中を斜めに見る毎日でした。そうした中、市民大学の講師の方々の熱い講義を伺うと、必ず夫々の問題解決の糸口が垣間見え、その度に、まだ『諦めるな』と背中を押されているような感覚になりました。

メイン講師五野井先生の講義では、民主主義から始まり、日本の成り立ちや天皇制、更には国際政治や安全保障問題まで、基礎となる理論や歴史的事実を踏まえた上で、現代の事象を取り上げていくというスタイルで、様々な政治課題を考えるための座標軸をいただいたと思っています。

講義全体の中で、その他印象に残った点を挙げると：

- ① ジャーナリズムのチェック機能を失った“民主主義”は、権威主義より始末に負えない。
- ② 日本の防衛における核抑止力論は実質張子の虎。むしろ『ASEAN アウトルック』に沿ったアジアとの共生を再検討すべき。
- ③ 日本は、対米従属の農業・食糧政策の結果、食糧安全保障体制が実質不在、更に、日本の食は近年非常に汚染され危険水準。
- ④ 自主学习での学生との懇談では、未来への希望を感じた。

最後に、五野井先生他講師の方々が真摯に受講生に向き合い、閉塞感に満ちた世の中を少しでも変えるため、一人ひとりの日々の行動を促し励ましてくださったこと、また、運営委員の方々が、自主学习を盛り上げるため様々な工夫を凝らし、ファシリテーションを最大限発揮されていたこと、改めて感謝申し上げます。

これはパロディ？ 政治と金の問題

岡崎 務

日々の出来事と政治が深く関わっていることを学んだ。なかでもマスメディアを含めた政治とジャーナリズムについて興味を持った。

突然だがここであるTVの時代劇の一場面から。商人：「お代官様、これをどうぞ（ずっしりと重い菓子折り箱を差し出す）。代官：「ムフフフフー……△△△屋、おぬしもなかなかのワルよのう」。と、そこに現れた正義の剣士。代官：「な、な、なに奴？ 曲者だ。出会え、出会え！」。そして……チャンチャンバラバラ、チャンバラ。あとは察しの通り。

しかし最近はこの手の番組（昭和的すぎる？）が減ったなあー。マンネリだし視聴率も悪いし、スポンサーからは文句言われるし。もし正義の剣士が現れたとしても「(政権を批判ばかりする) 偏った番組を流していると電波を止めるわよ！」と言うお大臣様がいる。そんなこんなでTV局も忖度するのかなあ？ もしそうだとしたこれはまるでパロディだ。

ところで今話題になっている政治屋（金儲けが本業みたいなので政治家と呼びたくない）の裏金問題。某政治屋はため込んだ3000万円もの金を図書購入費に使ったという。その本には当人のことを某ライターがベタ褒めした内容が書かれているそうだ。そして支持してくれそうな人に配ったとか。有償か無償か知らないが、選挙の時は金持ちの政治屋の方が有利に働くに違いない。

有権者が代議士を選ぶときはたった一票しか使えない。だがマスメディアのようなジャーナリズムは、その数千倍、数万倍の力を発揮することがある。しかし時と場合によって両刃の剣にもなることも知っておかなければならない。

市民大学での学習や研究の成果を発表する 2023 年 12 月のフェスティバルで、「民主主義アンケート★究極の選択」をやりませんかと提案した。「世界のトレンドや日本の政治情勢から近い将来、こんな選択を迫られるかもしれません」「あなたはどちらを選びますか?」。回答スペースを年代別に分け、赤丸と青丸のシールを来場者に貼っていただいた。

【選択肢 1】 暮らし（経済）さえよければ、日本が権威・独裁国になってもいい（赤）

【選択肢 2】 暮らし（経済）が苦しくても、自由な民主主義国家の方がいい（青）

気になる結果は。2 日間で 49 人の回答があり、20 代が 1 人、30～40 代が 2 人、50～65 歳が 1 人、65 歳～が 2 人の計 6 人（12%）が、赤丸の「日本が独裁国になってもいい」と答えた。この数字を多いと思うか、少ないと思うか。民度が高いといわれる三鷹市民にしては意外と多かったのではないかと（ゼロもあり得ると予想していました）。

アンケートを思いついたきっかけは、講義で紹介されたスウェーデンの研究所の分析（民主主義レポート 2023）だ。世界の人口の 72%にあたる 57 億人が独裁主義国家で暮らしていることに驚いた。さらにショックなのは、10 年前の 46%から大きく増加しているという。冷戦の終焉や「アラブの春」で民主化に進んだ国々が、反動的な指導者を再び迎え入れたということなのか。残り 28%の民主主義国家は「選挙民主主義」と「自由民主主義」に分類されるが、公正な選挙に加えて表現の自由や法の下での平等が守られている自由民主主義国家は 13%、33 カ国に過ぎない。

では、33 カ国の民主主義は理想の形、あるべき姿と言えるのか。イスラエルの現状はあまりにも悲劇的だ。ハマスのテロ行為に対する正当な反撃だとしてパレスチナ・ガザ地区で殺戮を繰り返し、犠牲者は 3 万人を超えた。そこにはハマスを壊滅させるまで攻撃を止めない、子どもや市民が巻き込まれても構わない、アラブ世界に築いた「民主主義の砦」を手放さない、正しければすべてが許される、という他者に極めて不寛容な思想が見て取れる。

民主主義が完成する日なんて来るのだろうか。わずかな希望は、SDGs やジェンダーフリーなど国家や民族、宗教を超えて多様性（他者）を認める考え方が世界に浸透しつつあること。もう一つは国際司法裁判所（ICJ）が暫定措置ながらイスラエルの行為をジェノサイド（集団殺害）だと異例の早さで認定し、国際法違反を明白にしたことだ。行きつ戻りつ、でも前進はしていると信じたい。

「転換期に直面する世界と日本」を受講して

小原英之

日本の政治の劣化が気になりその理由が知りたくて政治コースを選びました。政治の劣化を感じるのは民主主義の根幹の一つであるメディアが本来の使命である権力の監視機能を発揮していないところです。「ジャーナリズムの危機と展望」講師：斎藤貴男氏（ジャーナリスト）の講義は大変参考になりました。

憲法の解釈変更で戦争の出来る国になってしまった気がする日本の立ち位置について五野井先生もジャーナリストの布施氏も「日本は仲介国家を目指せ」と説いていました。しかし、平和憲法を棄損させてしまった今の日本にその役割を世界の国々が認めてくれるのかという疑問を感じました。

食料の安全保障では鈴木宣弘先生の講義からその深刻さを実感し、教育問題では前川喜平講師から右傾化が浸透していることを、環境問題では武本匡弘講師のプラゴミによる海洋汚染の実態に驚きました。そうした中で「平和をどう構築していくか」を市民目線から講義された畠山澄子講師の話に希望の光を見つけました。

自主学习で議論した「食べていければ専制主義の社会でも良いか、生活は苦しくても民主主義の社会が良いか」をフェスティバルで市民の方々に問いました。民主主義を優先する方が多かったですが、「自分の息子は生活を優先するかも？」という声があったのが印象的でした。また、報道の自由度に関しても問うと、自由度が低いと感じている方が60%もありました。

とても良い講師に恵まれたのは企画委員の方のおかげです。自主学习への参加者が少なかったことが残念ですが、運営委員の方々の努力のおかげで受講生間の議論が進みました。有難うございます。また担当の濱中さんご苦勞様でした。

メディアと政治

K.K.

今回初めて政治コースを学ぶ機会に感謝いたします。以前は子育て、芸術・美術、環境、保育付きで小さな子供を預けながら学べる事も魅力でしたが市民の方が主体的に学び自主学习ではそれぞれ関心のあるテーマを調べ発表しあう場も良かったと思います。

特に印象に残っているテーマはジャーナリズムの危機・報道についてです。政治コースジャーナリズム発表では①日本にジャーナリズムは在るのか？②SNSはジャーナリズムではない？③受け手＝市民のメディアリテラシーを高める初等、中等教育の実態は？④各種圧力団体と公正・公平・中道報道を考える、4つのテーマのうちメディアリテラシー学校教育について調べる機会がありました。小学校ではフィンランドの小学校がフェイクニュース・偽情報を見破る教育・（新聞記事より）メディアを主体的に読み解く能力などを育む教育、中学校ではある国内の中高等学校で情報を適切に判断し活用するために国語：新聞づくりや情報：CM作成など、目的に合わせた情報収集、取捨選択されており発信者の意図が伴うこと、かならずしも事実ではなく加工された現実すぎない等…学校教育の中で情報を読み解く能力を育む機会が与えられている。次世代を担う青少年に立法、司法、行政に次ぐといわれている言論について正しく学ぶことは大切だと感じます。世論、国民に良質の情報とより良い声が反映される政治にと願います。

一年間を通して良き学びと、参加されている市民の受講生の皆様との交流の場に感謝いたします。ありがとうございました。

企画委員からの参加した。岩波書店の「世界」を参考にして直接話を聞きたい筆者を講師に推薦した。企画委員に参加すれば受講出来る。という安易なことから始めた。

令和6年世界では大きな戦争が現在進行形、日本では国民としての説明責任と納税の義務を果たさない国会議員の姿を見ると恐ろしい感じがする。国民は直ぐに忘れてくれると言わんばかりだ。

今回、青井美帆先生の講義にはひしひしと感ずることが多くあった。『大日本憲法』を制定するにあたり1689年英国の『権利章典』1789年フランス革命『人権宣言』を参考にして1889年『大日本帝国憲法』が出来た。森有礼と伊藤博文の対立は有名な話である。

現在、私たちは空気のような存在として『日本国憲法』を持っているが、憲法は為政者を監視する。と言う事を忘れていないだろうか。『国際法』より『日本国憲法』の方が厳しいとの考えを基に首相は『安保3文書』を閣議決定してアメリカで大統領の満面の笑みで迎えられた。その時の得意げな顔は忘れられない。

今、憲法と平和を話し合う事は無い。自衛隊を憲法に入れる案。防衛省として内閣の下に置き特別枠を設ける案。自衛隊の海外派遣で民間人を殺害した場合は個人の責任になり兼ねない。現行法は隊員の人権を守る為にも整備が急がれる。国民を守るのは警察と消防で国をまもるのは自衛隊とあからさまになっている。安全保障の前に人権は余りにも小さい。

日中戦争時に東北大学医学部に留学していた『魯迅』は戦勝に湧く同級生が見ていた映像に日本人に殺害される同胞を取り囲んでる中国人たちが笑いながら手を叩いている姿を見て驚いた。『魯迅』は自分は中国人の【身体】ではなくて【心】を治さなければと思い医者には成らず作家の道に進んだと聞いた。アメリカではトランプ政権が誕生しそうだ。

青井先生が言うようにおかしいことはハッキリ言って行かないと憲法9条も吹っ飛びそうだ。参加したからこそ色々な考えにも会えた。

まさに今知りたい問題

M.T.

三鷹市民になって約10年になりますが、今期に三鷹市民大学の存在を初めて知りました。SNSでよくお見かけし、政治及び社会問題のご意見に賛同していた方がメインの講師であり、その他の講師陣にも魅かれて受講を希望しました。実際参加して驚いたのは、コース、カリキュラム、講師の選定は三鷹市民の企画委員の方々の協働で行われていることでした。私達市民の生活に密接に関わる政治について、まさに今知りたい問題を取り扱っていると思いました。現在の政治は三権分立がきちんと為されておらず、このままではいけないと深く感じています。今期の政治コースでは、政治、民主主義、メディア、人口減少、国家間紛争、教育、ジェンダー、格差、環境、食糧などのトピックについて学びました。どの回も新たな気づきや知識を得ることができました。また、他の参加者の質問や自主学習での意見を聴けたことも、とても良かったです。これからも一市民として、日々変動する社会情勢に対応し、悪しき習慣である“忖度”によって腐敗した政治に対して目を光らせておくために、学ぶことを続けたいと思います。また、より良い社会、例えば、生きにくい方々が安心して暮らせる社会にするには、具体的にどうしたらいいのかを考え、実際に行動していかねばならないと思いました。

今年の「市民大学」は、若い政治学者、五野井先生の鋭い論点によって、私のような「団塊の世代」が、どうしても「太平洋戦争後の荒廃」から出発した「民主主義」をどう構築し、発展させていくか、という視点から抜け出せないのと違い、政治学が「貧困・格差・差別」といった現実の「多種多様な不平等」に向かい合い、現実的な生き生きとした「政治」を学び、切迫感を感じました。

私は「平和憲法」が「お花畑」と言われた時代を経て、「安保3文書」が閣議決定で簡単に決まり、「専守防衛」も「平和主義」も変わってしまったことへの恐怖を感じます。

食糧自給率が40%を切っていて、海上封鎖されれば日本中がすぐに飢えてしまう現実を鈴木宣弘さんに学びました。世界には多種多様な人々が住んでおり、コミュニケーションをとる大切さを畠山澄子さんに、温暖化がすすみ「母なる海」が病んで、地球に人が住めなくなる現実を武本匡弘さんに教えられました。そのなかで、日本が「戦争に備えよ」と防衛費をGDP 2% (11兆円) にしていくなど、それこそ「お花畑」ではないか、日本は戦争ができない国、ということをしみじみ感じました。

イスラエルのガザへの攻撃が「20世紀の植民地獲得戦争」とどう違うのか分かりません。ウクライナとロシアの戦争が、一度引かれた国境線をなぜ丁寧に交渉で解決できないのか理解できません。私はアメリカを通してしか「世界」を見てこなかったのではないか、ヨーロッパの外交の複雑さからもっと「政治」を立体的に、学んでいかなければいけないと思いました。

五野井先生、他の多くの先生、政治コースのみなさま、濱中さん、1年ありがとうございました。

これからも体力の続く限り、団塊の世代の一員として「反戦・反核」を軸に、それを実行する難しさと向きあっていきたいと思います。

学びを支える参加の継続を

E.K.

今、世界を見つめることは辛い。ウクライナ、ガザをはじめとする戦火は、人々の生活や人権を破壊し生命を脅かす一方、地球環境の破壊等は待ったなしである。日本の現実も厳しい。格差とそれに伴う矛盾の拡大で貧困と将来不安に苦しむ人々…、しかし、目を背ける訳にはいかない。人々の関心がそがれば厳しい現実には過酷さを増し、さらに取り返しのつかない事態が進むだろう。こうした状況に有効なものがあるとなれば、それは「政治」である。政治が的確に機能することによって、少なくとも最悪の状況を回避し将来への道筋をつけることは可能だろう。しかし現実の政治の動きはハラハラ、イライラすることばかりで、主権者たる市民の力はなかなか届かない。だからこそ市民が政治に参加できるチャンネルを増やすとともに、市民が政治を身近なものにし、日常の中で語り合える場面をつくっていかなければならない。私たちは現状を見据え、身近なところから政治を取り戻すために基本を学び、主権者として何を選択していくか考えていきたい。

あらためて、市民大学総合コース「政治」コースは市民が学び話し合う場として最適と感じる。今年度も政治や民主主義の基礎を学びつつ多角度にわたる課題を取り上げて考えるカリキュラムを組み、学習生たちからの評判も上々だった。自主学习等での意見交換は「市民が積極的に政治を語り合う」実践になったと言えよう。

その毎年度のカリキュラムの組み立てをするのは企画委員であり、私もその一員に加わった。ともに学び意見交換するための組み立てはそんなに楽なものではない。でも誰かが引き受けなければいけないし、次々に受け継いでいく人が必要である。お互い様のそんな人たちの努力で市民大学総合コースは成り立っている。自覚した市民としてこれを守り続けていくことが、みんなに求められていると感じている。

学びの一年

M.S.

市民大学政治コースに初めて参加させて頂きました。

「転換期に直面する世界と日本～現在地点から今後を探る～」というテーマに惹かれたからです。日頃から政治、メディア教育においても社会の矛盾を感じていました。

今の日本は平等で平和な民主主義が機能していないと思っています。

政府の方針は規制緩和を進めどんどん大企業の有利な方へと舵を切ろうとしています。

中小企業への締め付けは強まり下請会社やさらにその下の労働者は低賃金、長時間労働、不安定雇用の厳しい状況下にある。インボイス制度は弱い者いじめとしか言いようがありません。社会は貧困格差が広がっていて、世間の風潮は「本人の努力不足」と自己責任で切り捨て人々をますます孤立と分断に追い込んでゆく。メディアは横並びの記者クラブの発表に頼り権力追随は自滅の道をたどり「報道の自由度ランキング」は68位。

国外でもロシアによるウクライナ侵攻は終わりに見えないまま年を越しさらに軍事強化しようとしています。イスラエル、ガザ最南端ラファへの本格攻撃、軍事同盟強化と大軍拡の流れの中で世界は戦禍にまみれています。

メインの五野井先生をはじめ著名な講師の方々から様々な角度から国際秩序と普遍的な変革に対する示唆を感じ、今更ながら学ぶことの大切さを知り、私自身の中で漠然としていた思いを客観視できたように思います。

とても充実した一年を過ごすことが出来ました。

企画運営に関わっていただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

とても有意義な時間

M.N.

初めての総合コース受講であったが、期間を通じてたいへん有意義な時間を過ごすことができた。

各回のテーマは世界情勢、メディア論、ジェンダー問題、安保、教育、食糧問題など多岐に渡り、それぞれとても興味深いものであった。講師の方々には専門分野をわかりやすい言葉で話していただき、その内容は胸にスッと落ちることが多く、私たちの生活に関わる全てのことが政治につながっているのだということをつくづく考えさせられた。

メイン講師の五野井先生の授業は、自分の知識不足ゆえか、情報量の多さとスピードに初日から挫けそうになったものだが、社会問題や憲法、自己責任論などという事柄を市民目線から学ぶことができ、最後まで関心が尽きなかった。

また、本講座は受身の聴講というだけではなく、自主学習の時間が設けられていたこと、フェスティバルでの掲示発表に参加することなどで、受講生の間で意見交換ができたことも収穫の一つであった。

今回のコースのタイトルは「転換期に直面する世界と日本～現在地点から今後を探る～」。昨今のニュースを見聞きするだけでも、国内外の状況は厳しい局面に向かっていると感じられ、危機感を覚えることも多くなっていたが、今講座の受講を終えて、私たちはまさに転換期に立っているのだと、さらにその思いを強くした。それでは今後、自分にはどのような行動ができるのか。「今後を探る」の言葉通り、それぞれの講義にそのヒントが提示されているように思うので、復習も兼ねて、微力ながらここからどんな一歩を踏み出せるのかを考えてみようかと思う。

今回が初めての受講でした。まずは豪華な講師陣にびっくりするとともに、「政治」枠を超えた多様な講義内容に毎週、期待に胸が膨らみました。

政治は一国の国内問題だけではなく、全世界の様々な政治制度を運用している国々との関連性を踏まえて考えるべきであることを学びました。

また、自然環境に影響を受ける農業問題や異常気象等の気候問題を、政治学を超えた多様性を考察しつつ「政治」を考える視点を持つことができました。

この原稿を書いた日は米国の「スーパーチューズデー」でした。高度な民主主義を形成している米国において発生している「トランプ現象」によって生起している民主主義の新たな局面と課題にも注視しています。

来年度も市民大学で「生涯学習」を継続していきたいと考えています。

知性を持つことの重要性

「知性」を持つことの重要性を認識した1年間だった。五野井先生がギリシャ、ローマ時代の古典、政治学・社会学の主要文献、国内未翻訳の書物などを基に、該博な知識と教養を教示されたことは大変印象的だった。

昨今、日本社会で知性軽視の風潮が蔓延していることは非常に危険だ。SNS上で、学者や知識人に嬉々として罵声を投げ付け、中傷する行為には寒々としたものがある。中学や高校で知性も教養もない粗暴な「ヤンキー」連中が、優等生をいじめたり、バカにしたりして、自分たちと同じレベルまで引きずり落とすことで快感を得ようとするのと同じ図式だろう。

時間や手間をかけ、正しい知識や教養を身に着けるより、ウケだけを狙う投稿者の発言に、指先一つで同調する方が楽だし、快適なのだろう。得体の知れない投稿者が「インフルエンサー」ともてはやされたり、保守的とみられているような方々が無知なネトウヨ連中に「リベラル派」「左翼」と罵られたりする奇々怪々な状況も生まれている。

日本学術会議問題の根本にあるのは「学者として、物申したいという姿勢が嫌われる国」だと聞いたことがある。知性を感じられなかった安倍晋三氏の第二次内閣発足以降、学者や知識人をバカにして悦に入る、田舎の「ヤンキー的風潮」が顕著になった。五野井先生の言う「市民として『知性』という徳をはぐくむこと」が日本の民主主義を守る王道なのかも知れない。

身近な生活から民主主義を考える第一歩として、三鷹市長が力を入れている、高さ100m、約25階建てのタワーマンション（億ション？）や商業施設を建設する三鷹駅南口再開発事業が本当に市民のプラスになるのかといった問題などを考えていきたい。

一年間の講義を終えて

J.N.

一年間・毎週土曜日に講義に参加することは難しいかも…と危惧しながらも申し込みをさせてもらった今年度のコースだった。昨年度に環境コースで学び、今の環境問題を大きく変えたいと思ったら政治を学ばなければと思っていた。しかもメイン講師が五野井先生との事で是非とも講義が受けたかった。しかし、結果的にフェスティバルの準備に関われずに迷惑をかけた事は反省点としたい。

講義は古代ローマの民主主義の起こりから始まり、メディアと政治・平和の構築・教育・貧困・気候危機・食料問題・安全保障…とどれ一つとして疎かに出来ないテーマばかりだった。問題が山積する時代にあっても国会は軽視され・民意に反して沖縄の基地建設は進み・特定の教団との関係が浮き彫りになり・莫大な裏金問題…何をしてでも政治は変わらないと諦めたくなる事ばかり。それでも諦めずに活動を続けている講師の方々の熱のこもった講義は毎回圧巻だった。それは机上の空論ではなく確固たる信念に元づく活動に裏打ちされているからだとして強く感じた。テーマにとどまらず壮大に広がる講義は本当にワクワクする二時間だった。強いて希望を言わせてもらうなら、講義の後に質問の時間だけでなくディスカッションの時間があれば一方通行の講義ではなく自主的な学びの場になる気がした。

何でも検索すれば簡単に答えが得られる時代。つい問題解決の正解や処方箋が欲しくなりがちだが、まずは学び・考え・継続していくこと。次に行動出来るようになってきたらと思った一年間だった。お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

“学ぶ”ことを学ぶ場として

古川 英一

政治コースには2年連続で籍を置かせていただきました。いわば市民大学の“2年生”です。(もちろん、市民大学には学年はなく、10年生?くらいのベテランの方々も)

三鷹市民大学の総合コースは学習生自身が年間のテーマを決めて、メインとなる先生を選び、より詳しく個別の問題ではゲストとなる先生に話をうかがいます。さらに自主学習の時間では学習生同士で議論をしよう、まさに3重構造の学びの場になっていると思います。こうした構造は、実は“学ぶ”ことを学ぶという、あたかも入れ子のようにになっているのではないかと、というのが2年間の実感です。(3重構造に、入れ子構造とは何がなんだか…)市民大学は政治や、経済などテーマは分かれています、それだけではなく“学ぶ”こととはどういうことなのか”についても問いが投げかけられているような2年間でした。

ところで政治を学ぶとはどういうことなのでしょう、それは権力を行使する側(国家)と、行使される側の市民との関係性を歴史の経験を通して考え、市民が権力に対してどのように向き合っていくのか、その方法を探るものではないかと思えます。

そして政治コース、五野井郁夫先生は、古代から現代、プラトンからベンヤミンまで時空を超えた疾風怒涛の講義の中で、そのことを伝えてくださったように思うのです。民主主義が正常に機能しているとは思えないような今の国内外の状況の中でも決して諦めずに立ち向かい行動していくのが“市民”だと。

あれれ、ギリシャの丘の上、アゴラをちょっと見下ろす場所・プニクスなるところに、またもや私たち学習生によく似た風体の人たちが集まって、政治とは?市民とは?とあれこれ話が尽きない様子…得意のうたた寝をしたか、気づけばもとより市民大学の学習室、みなさん真剣な表情で…

“学ぶ”ことを学ぶ場へ、みなさんようこそ。(抽選にはずれなければ“3年生”としてご一緒させていただきます!)

政治コースを受講しました。

表題は「転換期に直面する世界と日本～現在地点から今後を探る～」

メイン講師は五野井郁夫先生。野外の集会で何回かお見かけしてまして、行動する学者先生と認識しています。

私達は幸せに安心のうちに暮らしたいと願っていますが、身の周り国内世界に噴出する問題はそうでない方向に向かっています。

エネルギー・食糧・気候危機・侵略と戦争・貧困と差別 etc.

国内に目を向ければ、辺野古埋め立て反対の民意は届かず代執行・原発再稼働と新たな増設（PFASと共に命を脅かす問題）・議論無くして閣議決定された集団自衛権、安保3文書・公が弱体化し色々な分野で縮小…

私が最も恐れるのは戦争の気配。南西諸島でのミサイル配備が進んでいる事を聞けば、只の気配にとどまらない。早くに良い方向への転換がなされなければ、諸々の問題に押し潰され飲み込まれてしまう。だが全ての不安や恐れは絶望とするものではないかもしれない。

諸問題の大半が憲法を無視した民主主義を蔑ろにする政治が行なわれているからで、政治が代わりさえすればと。

五野井郁夫先生からは歴史に見る民主主義、国家・日本の世界の外交安全保障・仲介国家としての日本の立ち位置等々のお話がありました。難しくはありましたが、質疑に於ける学習生皆様の見識の深さに驚くと同時に楽しくもありました。市民大学の学習は問題を我が身に引き寄せ自分の事として、正しい知識と情報を基に学習を継続していくことにあるのだから、その指針を頂いたのだと解しました。

政治に期待はできるか？憲法に拠り所は持てるか？近い先に、私達は民主主義を標榜し、私達は憲法を大切に立憲主義国家に在ります、と言える日が来るのでしょうか！

先生方は仰います。『諦めないで、声を上げ続けましょう』

個と個が声を上げ手を繋ぎ、より大きな輪を、よりより大きな力を！

先生方、職員スタッフ・企画・運営委員の方々にはお世話になりました、ありがとうございました。

1年を振り返って

K.Y.

コロナの感染が落ち着き、授業は原則対面で行われた。とはいえ、用心のためにマスクをしている方が多かった。対面授業はオンラインでの授業とは違う効果があったように感じられる。

今年のコースは、メイン講師として高千穂大学五野井郁夫教授が9回の講義で政治に係わる基本事項を紹介され、11回を他の講師が経済、安全保障、環境、ジェンダーなどの幅広い分野のテーマを分担するという構成になっていた。五野井先生の専門は、政治学・国際関係論であり、国家、社会、国際関係などを歴史的経過も含めて詳しく説明された。これに、10回の自主学習を加えたコース構成になっている。ただし、講師の日程調整で、前期に自主学習日が取れないという時間割になり、自主学習活動のスタートが2学期になってから本格化した。12月にはフェスティバルが企画され、政治コースでは4分野（資本主義、安全保障、マスコミ・メディア、教育）について展示物を作成したが、自主学習での議論が遅れて、準備作業に影響したかもしれない。

今回のコースでの質疑応答や自主学習での意見交換で、学習生はしっかりと自分の意見や考えをもっていると感じた。今まで何回か受講した経済コースとは違いを感じた。コース分野の特徴かもしれない。

この1年間の学習を通じて、政治に係わる幅広いテーマに理解が多少進んだけれども、まだまだしっかりと考えなければいけないことが浮かび上がった。これが一番の効果かもしれない。

この1年間、企画委員・運営委員の熱心な取り組み、事務局の気を配ったサポートなど授業を支えていただいた関係の方々に感謝します。

市民が学ぶ政治と行動

渡 辺 衛

幸いな事に令和3年度から3年間政治コースを聴講出来た。各年度共にメイン講師の専門性から特長のあがるカリキュラムであった。令和3年度は小原先生による緊張する国際政治の中でロシアによるウクライナ侵攻を見通した的確な分析が有り、4年度は政治学の泰斗である杉田先生の政治、特にアカデミックな面からの深い学びを得た。本年度の五野井先生からは、政治学の基礎を踏まえた元で我々の社会生活に於ける政治問題を取り上げ、中でも問題意識を持った市民の行動の重要性をご自身の発言や行動の紹介と共に強調された。

現代社会に於いて脅かされている市民の人権を守る事、政治・行政の現状に問題意識を持った市民が発言、行動する事でのみ社会が変革する可能性を繰り返し教えられた。市民大学に学ぶ学習生は少なからず社会への問題意識を持つ市民であると思うが、それも日常での会話の中で忿懣をぶちまける事はあっても中々行動には繋がって来なかった事を反省させられた1年間であり、同時に市民大学でのメイン講師の重要性を改めて認識させられた。この3年間の政治コースが高い専門性を持ったメイン講師によって充実した講座が持てた事は又、市民大学に於ける企画委員の重要性を再認識させる。即ち年度カリキュラムは各講師の論議の充実によると共に講師陣を提案する企画委員の問題意識と見識に大きく依存する物である。従って政治コースをこれからも有意義なものにするには、様々な社会経験を持ち、昨今の政治・社会に問題意識を持つ三鷹市民から新しい企画委員への参入を促す事が必然と思われる。新しい血がより良い物を生んでいく事は間違いない。その為のシステムの改善も望まれる。

令和5年度三鷹市民大学事業総合コース
学習記録「あゆみ」第56号

発行 公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団
編集 三鷹市民大学事業総合コース「あゆみ」編集委員会
〒181-0004 東京都三鷹市新川 6-37-1
元気創造プラザ4階 三鷹市生涯学習センター
電話 0422-49-2521
HP <https://www.mitakagenki-plaza.jp/shogai/>
※「みたかe-bookポータル」に本誌のPDF版を掲載しています。
<https://mitaka-e-book.actibookone.com/>